

文学部

I 2012 年度認証評価 努力課題に対する改善計画（報告）書

該当なし

II 2015 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2015 年度大学評価結果総評】

文学部では、その教育理念やカリキュラムの概要が学部パンフレットや HP などに明確に示されている。また『文学部 2016 GUIDE BOOK』の内容も（専任教員の顔写真を掲載するなど親しみやすい作りになっていることも含めて）簡潔かつ分かりやすいものになっている。

学科ごとに独自の学問分野や教育方針を掲げながらも、共通して少人数教育を重視しており、学生が主体的に学んでいくことを促進・媒介する仕組みとなっている可能性が高いといえることができる。

このようなきめ細かな指導は、その他の学務（とりわけ日本文学科と史学科と地理学科の場合は通信教育部の仕事）とあいまって、教員個々の負担増につながりうることも懸念される。少人数教育の強みをより一層生かすためにも、教員の負担増を減らす措置・工夫が望まれる。

なお、教授会規程、内規、細則等の整備を指摘された認証評価・努力課題に対する対応が適切になされた結果、具体的な改善点としては、特段に記載することはない。

【2015 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400 字程度まで）

少人数教育を維持・発展させながら、学部・学科運営、カリキュラム改革等をととして、担当教員の負担減を図りたい。

III 自己点検・評価

1 教員・教員組織

【2016 年 5 月時点の点検・評価】

（1）点検・評価項目における現状

【教員像および教員組織の編制方針】（2011 年度自己点検・評価報告書より）

学部・学科の理念を十分に理解した上で、学生一人一人に目の届くきめの細かい教育を行ない、かつ、独創的で最先端の研究に従事できる教員が求められる。同時に教員は、学部・学科運営にも積極的に関わることも重要である。

教員組織においては、年齢、性別、国籍、専門分野等のバランスに留意し、理念を実現するのに十分な教育・研究・指導が可能となる編制を目指す。

1.1 学部等として求める教員像および教員組織の編制方針を明確にしているか。

①採用・昇格の基準等において、法令に定める教員の資格要件等を踏まえて、教員に求める能力・資質等を明らかにしていますか。

☒ はい ☐ いいえ

【根拠資料】※教員に求める能力・資質等を明らかにしている規程・内規等の名称を記入。

・「文学部教授会規程」、「文学部教授会規程内規」、「文学部人事委員会細則」

②組織的な教育を実施する上において必要な役割分担、責任の所在を明確にしていますか。

☒ はい ☐ いいえ

【学部執行部の構成、学部内の基幹委員会の名称・役割、責任体制】※箇条書きで記入。

- ・学部執行部：学部長（教授会構成員の投票による選出）、教授会主任・副主任（学部長の委任、教授会の承認）
- ・学部執行部の役割は、教授会を開催し、審議・決定を行なうことである。
- ・基幹委員会名称：文学部各種委員会一覧参照

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・「文学部教授会規程」、「文学部教授会規程内規」、「文学部各種委員会一覧」

③教員組織の編制において大学院教育との連携を考慮していますか。

☒ はい ☐ いいえ

（～400 字程度まで）※教員組織の編制において大学院教育との連携にあたりどのようなことが考慮されているか概要を記入。

文学部専任教員の約 9 割が、大学院人文科学研究科にも属している。文学部と人文科学研究科は、連携して専任教員人事を行なっている。

哲学科・英文学科・史学科・心理学科では、大学院生・学部生への教育効果を上げるべく、学部生が一部の大学院科目を履修することを認めている。また、地理学科では、人文科学研究科への進学を前提とした早期卒業制度を整備している。

学科によっては、大学院生と学部生の共用スペースを用意し、研究スキルや論文作成上のアドバイスを学部生が自然に受けられるよう配慮している。

また、修士論文や博士論文の中間発表会の予定をホームページ上に公開し、意欲的な学部生の参加を促すことで教育上の縦の連携を図っている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・「文学部教授会議事録」、「大学院人文科学研究科教授会議事録」、「文学部 履修の手引き」

1.2 教育課程に相応しい教員組織を整備しているか。

①学部（学科）のカリキュラムにふさわしい教員組織を備えていますか。

☒ はい ☐ いいえ

（～400 字程度まで）※教員像および教員組織の編制方針、カリキュラムとの整合性等の観点から教員組織の概要を記入。

教員組織として年齢、性別、国籍、専門分野等のバランスに留意し、理念を実現するのに十分な教育・研究・指導が可能となる編制を目指し、教育課程にふさわしい組織を整備している。学科専門科目については、担当教員の適合性を判断するために、各学科が担当候補者について審議し、文学部人事委員会に諮る。6 学科の委員ならびに学部長および教授会主任の合計 8 名からなる人事委員会は、学科から提起された候補者について審議・承認し、文学部教授会が最終決定する制度となっている。その他、基礎科目などについても、人事委員会および教授会で審議・承認している。なお、基礎科目の改廃および新規採用人事については市ヶ谷リベラルアーツセンターの運営委員会および分科会と協議している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・各学科「人事に関する内規」、「文学部講義概要（シラバス）」

2015 年度専任教員数一覧

（2015 年 5 月 1 日現在）

学部・学科	教授	准教授	講師	助教	合計	設置基準上 必要専任教 員数	うち教授数
哲	11	1	0	0	12	6	3
日本文	14	1	0	1	16	9	5
英文	10	3	0	0	13	7	4
史	6	3	1	1	11	6	3
地理	7	2	1	1	11	6	3
心理	8	1	1	0	10	6	3
学部計	56	11	3	3	73	40	21

専任教員 1 人あたりの学生数（2015 年 5 月 1 日現在）：38.8 人

②特定の範囲の年齢に著しく偏らないように配慮していますか。

☒ はい ☐ いいえ

【特記事項】（～200 字程度まで）※ない場合は「特になし」と記入。

新規採用においては、専門分野を考慮した上で決定している。その上で、年齢や性別についても配慮して採用を行っている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・新規採用を予定する学科の当該項目を参照

年齢構成一覧

（2015 年 5 月 1 日現在）

年度\年齢	26～30 歳	31～40 歳	41～50 歳	51～60 歳	61～70 歳
2015	0 人	8 人	21 人	24 人	20 人
	0.0%	11.0%	28.8%	32.9%	27.4%

年齢構成比 (2015年度文学部合計)	年齢構成比 (文学部合計過去5年平均)	年齢構成比 (過去5年全学部平均)
1.3 教員の募集・任免・昇格は適切に行われているか。		
①各種規程は整備されていますか。		☒ はい ☐ いいえ
【根拠資料】※教員の募集・任免・昇格に関する規程・内規等の名称を箇条書きで記入。 ・「文学部教授会規程」「文学部教授会規程内規」「文学部人事委員会細則」 ・大学の定める「教員の定年に関する規程」、「法政大学名誉教授規程」、「市ヶ谷リベラルアーツセンター運営委員会規程」		
②規程の運用は適切に行われていますか。		☒ はい ☐ いいえ
【募集・任免・昇格のプロセス】※箇条書きで記入。「上記根拠資料の通り」と記載し、内規等（非公開）を添付することでも可。 ・「法政大学文学部教授会規程」第3条および第4条に関わる人事のうち、教授会より委嘱されたものを審議するため、「文学部教授会規程内規」第9条に基づき、文学部人事委員会が「文学部人事委員会細則」に従って、文学部の人事を審議し、教授会に上程する。 ・専任教員の募集については、原則として学科会議での発議を受けて、その募集内容について文学部人事委員会および文学部教授会が審議・承認を行う。審査は当該学科の教員（および必要に応じて市ヶ谷リベラルアーツセンター分科会の教員）で構成される人事選考委員会に委ね、その審査結果を受けて文学部人事委員会および文学部教授会が審議・承認を行う。審議・承認においては、最終候補者の履歴書・業績書、および業績本体を一カ月間閲覧できる状態にし、次回の文学部人事委員会および文学部教授会にて承認を得る。 ・市ヶ谷リベラルアーツセンター関連の専任人事については、市ヶ谷リベラルアーツセンター運営委員会での結果を受け、文学部教授会の承認を得る順序を原則とする。 ・教員の任免については、原則として学科会議での発議を受けて、文学部人事委員会における審議・承認を経て文学部教授会で審議・承認を行う。 ・教員の昇格については、原則として学科会議からの発議を受け、文学部人事委員会および文学部教授会が審議・承認を行う。		
1.4 教員の資質向上を図るための方策を講じているか。		
①学部（学科）内のFD活動は適切に行なわれていますか。		☒ A ☐ B ☐ C
【FD活動を行うための体制】※箇条書きで記入。 ・執行部、教学改革委員会、質保証委員会が連携して、「専任教員による授業相互参観」の方法改善や集計結果を検討し、教授会全体に周知している。 【2015年度のFD活動の実績（開催日、場所、テーマ、内容（概要）、参加人数等）】※箇条書きで記入。 ・「学生による授業改善アンケート」（専任・兼任全教員 大学指定期間）を実施した。 ・「専任教員による授業相互参観」（春・秋学期のほぼ全期間）を実施し、前年度より参観数が増加した。 ・その他個別には各学科による当該項目を参照		
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・「文学部教授会議事録」、「文学部教学改革委員会議事録」、「文学部質保証委員会議事録」		

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書き

でそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・基本的に前年度からの継続であり、特記事項は特になし。	

(3) 現状の課題・今後の対応等 (任意項目)

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・特になし

【この基準の大学評価】

文学部は6学科からなり、採用や昇格などについては、最終的には文学部教授会が決定するが、各学科での「人事に関する内規」などの規程を基に慎重に審議されており、全体として、問題のない運営が図られているものと評価できる。組織的な教育を実施する上においての必要な役割分担や責任の所在は、各学科とも明確になっており、一人の教員に過度な負担とならないような仕組みが意図されているが、まだ充分ではないようである。各学科の約9割の教員が大学院教育を担当しており、学部教育と大学院教育との連携は充分担保され、高く評価できる。さらに、学部学生に大学院科目受講を認めており、毎年履修者が出ていることは、学生にとってより高度な学習機会が得られることになり、評価できる。

各学科の専任教員構成はカリキュラム体系に沿って編成されている。年齢構成は、概ね、特定の年齢範囲に著しく偏らないように配慮されており評価できるが、一部偏っていると思われる学科もある。しかし、学科自らがその問題点を認識しており、今後の努力を期待したい。男女の比率については、学問分野により、一概に言えないところもあるが、学科によっては女性が著しく少ないところもあり、今後共、引き続き努力することが期待される。

学部内のFD活動については、概ね適切に行われていると認められるが、今後もFD活動の一層の充実が可能と考えられ、更なる成果に期待したい。

2 教育課程・教育内容

【2016年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

【教育課程の編成・実施方針】

学位授与方針についての目的や目標にそって、自己と世界に関する根本的な視点を確立するために、基礎科目の中に学部独自の基礎ゼミを置き、文章読解、ディベート、プレゼンテーション、レポート作成、資料探索技術等、さまざまな視点から自己を客観的に見直すと同時に研究のための基礎的な能力を涵養している。また、各学科の専門科目では、それまで培ってきた知識や手法を用いて自己と世界の理解をより深める。特に少人数のクラスによって開講されている種々の科目やゼミナールを履修することで、一人一人がそれぞれの独自の問題意識を深めていく。集大成である必修の卒業論文によって、学生が問題を自ら発見し、自ら解決していく方法を取得することを目指す。

2.1 教育課程の編成・実施方針に基づき、授業科目を適切に開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

①学生 の能力育成の観点からカリキュラムの順次性・体系性を確保していますか。	A	B	C
(～400字程度まで) ※カリキュラム上、どのように学生の順次的・体系的な履修への配慮が行われているか概要を記入。 学位授与の方針についての目的や目標にそって、市ヶ谷基礎科目の中に学部独自の「基礎ゼミ」(日本文学科の場合は専門科目「大学での国語力」)を1年次春学期から置き、文章読解、ディベート、プレゼンテーション、レポート作成、資料探索技術等を授業で一通り教えることで、大学での学びに必要な基礎的な能力を身につけさせ、同時にさまざまな視点から自己を客観的に見直す力を涵養している。 各学科の専門科目では、年次進行によって、体系的にカリキュラムを組織している。2015年度には各学科でカリキュラムマップを作成し、それに付随して一部の学科がディプロマポリシーを改正した。特に少人数のクラスによって開講されている種々の科目やゼミナールを履修することで、各学生が独自の問題意識を深めている(学科ごとのゼミ形式の授業の段階的設定については、各学科の記載を参照)。 また、4年次には、学業の集大成である卒業論文を必修化しており(SS1学生は選択制)、学生が問題を自ら発見し、自ら解決していく方法を取得することを目指している。 以上のカリキュラムの順次性・体系性は、2014年度から議論を行っている科目ナンバリングによって明らかにされる予定である。			
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。			

・『文学部履修の手引き』、各学科の「カリキュラムマップ（ツリー）」（暫定版）、「ナンバリング」資料	
②幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程が編成されていますか。	A ☒ B C
（～400 字程度まで）※カリキュラム上、どのように教養教育等が提供されているか概要を記入。 深い教養を習得し、総合的な判断力を身に付けるために、教養教育に関する科目として、6 つの群から構成される「基礎科目」が設置され、1 年次から配当されている。またリベラルアーツセンターが主催する専門科目である「総合科目」も、広く教養教育に関する科目として 2 年次から配当されている。導入部を指導し基本的な知識を備えさせる 0 群（上述の「基礎ゼミ」はここに入る）、文化全般を研究対象とし、文化を創り出す人間とは何かを課題とする 1 群、社会科学の思想・方法・理論を説き、現代社会における人間の知の広がりはどうあるべきかを問う 2 群、数学リテラシーと科学リテラシーを学ぶ 3 群、世界の多様な文化に対する理解を深め、外国語を学ぶ 4 群、スポーツ総合演習の 5 群によって「基礎科目」は構成され、幅広く深い教養と総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養することが期待されている。 なお、「基礎科目」「総合科目」とともに、個々の学生の専門的な学習の展開と関心の広がりに応じて、3 年次・4 年次で履修することができる。このようにして、一般教養の上位に専門教育を積み上げるという旧来の考え方ではなく、基礎科目と専門科目が有機的に連携した教育課程を全体として構築している。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『市ヶ谷基礎科目・総合科目講義概要（シラバス）』、『文学部講義概要（シラバス）』	
2.2 教育課程の編成・実施方針に基づき、各課程に相応しい教育内容を提供しているか。	
①学生の能力育成のための教育課程・教育内容が適切に提供されていますか。	A ☒ B C
（～400 字程度まで）※学生に提供されている教育課程・教育内容の概要を記入。 各学科とも年次進行と学生の知識・学習能力の広がりや深まりにあわせた教育内容が提供されている（各学科の項目を参照）。 なお、文学部 6 学科の学生に開かれた科目群として「文学部共通科目」を設置している。豊かな人間性を涵養し高い倫理観を持った人材を育成するよう配慮した科目群である。文学部ではこの「文学部共通科目」の充実に努めている。2011 年度より、現代社会のニーズに合わせた就業力や社会倫理の涵養を目指し、「文学部生のキャリア形成」（2 年次より）および「現代のコモンセンス」（2 年次より）をオムニバス形式で開講している。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・「文学部生のキャリア形成」および「現代のコモンセンス」については、「文学部講義概要（シラバス）」を参照	
②初年次教育、キャリア教育は適切に提供されていますか。	A ☒ B C
（～400 字程度まで）※学生に提供されている初年次教育、キャリア教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。 学士課程教育への円滑な移行に必要な初年次教育として、「基礎ゼミ」や「大学での国語力」などの充実を図っている（各学科の項目を参照）。キャリア教育に関しては、「文学部共通科目」の中に「文学部生のキャリア形成」と「現代のコモンセンス」を設置している。学科によっては、卒業生を招聘して学科独自の就職セミナーも行っている。詳しくは、各学科の項目を参照。また、市ヶ谷基礎科目 0 群にも、文学部生が受講可能な「キャリアデザイン入門」や「キャリアデザイン演習」などのキャリア教育科目が開講されている。（なお、各学科の項目も参照）。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『市ヶ谷基礎科目・総合科目講義概要（シラバス）』、『文学部講義概要（シラバス）』	
③学生の国際性を涵養するための教育内容は適切に提供されていますか。	☒ A B C
（～400 字程度まで）※学生に提供されている国際性を涵養するための教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。 学生がグローバルな尺度で自らの英語力を把握し、伸ばしていけるよう、1 年次の 4 月と 1 月の 2 回 TOEFL-ITP(R) の受験を勧奨している。文学部のスタディ・アブロード (SA) ・プログラムとしては、英文学科 SA 制度（長期および短期）があり、また、哲学科で開講されている「国際哲学特講」は、授業の一環としてアルザスやストラスブール・ハイデルベルクの滞在を含んでいる。全学的なプログラムとしては、法政大学派遣留学制度が整備されており、参加した学生が帰国した際には、各学科で科目内容を精査して、外国で取得した単位の認定を適切に行っている。 さらに文学部生は、英語力が一定のレベルに達していれば「グローバル人材育成支援採択事業」によって設置された ERP（英語強化プログラム）を受講し、卒業所要単位に含めることができる。（なお、各学科の項目も参照）。 2016 年度からグローバルオープン科目を提供し、学生が英語による授業を受ける機会を増やしている。	

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・『文学部講義概要（シラバス）』、各学科の当該項目を参照

（２）特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・基本的に前年度からの継続であり、特記事項は特になし。	

（３）現状の課題・今後の対応等（必須項目）

※（１）～（２）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。

・今年度の大学全体の課題である 3 つのポリシーの改定作業、カリキュラム・マップ（ツリー）そして科目ナンバリングの完成等（それに伴う必要なカリキュラム改革等）が当面の課題である。なお、各学科の当該項目を参照。

【この基準の大学評価】

文学部のカリキュラムの順次性・体系性は、各学科によって異なるが、それぞれに工夫が凝らされていることが窺え、概ね、良好と評価できる。卒業資格としての卒業論文の位置付けは、学部全体として統一が取れており、高く評価できる。また、初年次教育として、多くの学科で、必修または多数が受講する「基礎ゼミ」が開講されている。キャリア教育は、文学部独自の共通科目が開講されており、評価できる。

学生の国際性を涵養するための教育内容については、哲学科が「国際哲学特講」でフランス・ドイツでの短期滞在を課しており評価できる。学科毎の達成度の相違はやむを得ないが、情報・意見交換等を活発にすることにより、学部全体としての発展が期待される。

3 教育方法

【2016 年 5 月時点の点検・評価】

（１）点検・評価項目における現状

3.1 能力育成の観点から教育方法および学習指導は適切か。

①学生の履修指導を適切に行っていますか。

A ☒ B C

【履修指導の体制および方法】※箇条書きで記入。

- ・入学時、学科ごとに、学務部事務課による「新入生ガイダンス」の開催
- ・4 月新学期開始時：教員による「新入生オリエンテーション」の開催、2 年次以降の学生に対する、「在学生ガイダンス」の開催
- ・学科別のガイダンスに加えて、SSI 学生（1 年次～4 年次）を対象に文学部全体でのガイダンスを保健体育部の協力を得て開催
- ・転編入学した学生に対する文学部全体のガイダンスの開催
なお、各学科の当該項目を参照。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし。

②学生の学習指導を適切に行っていますか。

A ☒ B C

（～400 字程度まで）※取り組み概要を記入。

新入生に対しては、すべての学科で 5 月ごろまでに個人・グループ面談などの機会を設けて、適切な学習指導を行なっている。また、『文学部講義概要（シラバス）』の教員紹介ページに全教員がオフィスアワーを掲載することで、個々の学生への学習相談に対応している。

2 年生以上に対しては、ゼミ（演習）において学生の主体的な調査力とプレゼンテーション力を養成し、卒業論文作成への継続性を持たせている。必修の卒業論文については、『履修の手引き』に加えて、2013 年度からは科目としての説明を『文学部講義概要（シラバス）』の学科ごとのページの冒頭に掲載し、年間を通しての研究計画や評価基準を学生に周知徹底している。指導教員を定めて、一対一のきめ細かい指導を行ない、口頭試問で詳しい総評を個別に与えている。指導教員は個々の学生の学習状況を丁寧に把握し、様々な相談にも応じている（各学科の項目も参照）。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・「文学部講義概要（シラバス）」 各学科の項目も参照	
③学生の学習時間（予習・復習）を確保するための方策を行なっていますか。	A ☒ B C
（～400 字程度まで）※取り組み概要を記入。 2012 年度入学者より、2 年次以降は履修登録科目の上限（CAP 制）を、再履修単位を含めて最高 49 単位と厳格化し、計画的な単位履修の指導にあわせ、学生が授業時間外の学習時間を確保できるように配慮している。個別の科目については、担当教員が各回の「授業計画」および「授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）」をシラバスに記載し、予習・復習の時間を設けるよう適切に指示・指導している（各学科の項目も参照）。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『文学部履修の手引き』、『文学部講義概要（シラバス）』	
④教育上の目的を達成するため、新たな授業形態の導入に取り組んでいますか。	☒ A B C
【具体的な科目名および授業形態・内容等】 ※箇条書きで記入（取組例：PBL、アクティブラーニング、オンデマンド授業等）。 ・各学科の当該項目を参照。各学科でアクティブラーニング等、新たな取り組みがなされている。 ・2015 年度は、シラバス第三者チェックの際、アクティブラーニングを実践している授業について情報共有を行なった。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『文学部講義概要（シラバス）』	
3.2 シラバスに基づいて授業が展開されているか。	
①シラバスが適切に作成されているかの検証を行っていますか。	☒ はい いいえ
【検証体制および方法】 ※箇条書きで記入（取組例：執行部（〇〇委員会）による全シラバスチェック等）。 ・教学改革委員会委員によるシラバス第三者チェックを実施している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・「文学部教学改革委員会議事録」、当該議題資料	
②授業がシラバスに沿って行われているかの検証を行っていますか。	☒ はい いいえ
【検証体制および方法】 ※箇条書きで記入（取組例：後シラバスの作成、相互授業参観、アンケート等）。 ・「学生による授業改善アンケート」の確認項目	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
3.3 成績評価と単位認定は適切に行われているか。	
①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。	A ☒ B C
【確認体制および方法】 ※箇条書きで記入。 ・成績評価の方法や単位認定の基準については、『文学部講義概要（シラバス）』の「成績評価の方法と基準」欄に明示している。 ・成績評価は担当科目の教員が行なう。訂正がある場合は理由、証拠、再発防止策を付して教授会に提出し、教授会は厳格に審議・検討して可否を決定している。 ・卒業論文については、文学部共通の提出および面接審査の日時を設定し、公正かつ透明性のある成績評価を行なったうえで、文学部教授会において単位認定している。 ・学科の当該項目も参照	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『文学部講義概要（シラバス）』、「文学部教授会議事録」	
②他大学等における既修得単位の認定を適切な学部（学科）内基準を設けて実施していますか。	☒ はい いいえ
（～400 字程度まで）※取り組み概要を記入。 留学から帰国した学生や転編入学生の単位認定については、必要な場合には他大学からシラバスを取り寄せ、学科会議において精査したうえで、教授会で審議・検討し、厳密に行なっている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
③厳格な成績評価を行うための方策を行っていますか。	A ☒ B C
（～400 字程度まで）※取り組み概要を記入。	

留学から帰国した学生や転編入学生の単位認定については、必要な場合には他大学からシラバスを取り寄せ、学科会議において精査したうえで、教授会で審議・検討し、厳密に行なっている。科目毎に成績評価結果に偏りが出ないよう教育開発支援機構FD推進センターが作成したGPCA集計結果（学部ごとの分布表）が全教員にフィードバックされている。文学部では、講義科目においては、「A+」の評価は単位認定の20%以内を目処とするガイドラインが設けられており、極端に偏った成績評価がなされないよう配慮されている。各学科の当該項目も参照。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・「文学部教授会議事録」

3.4 教育成果について定期的な検証を行い、その結果を教育課程や教育内容・方法の改善に結びつけているか。

①教育成果の検証を学部（学科）ごとに定期的に行っていますか。

A ☒ B C

【検証体制および方法】※箇条書きで記入。

- ・春学期末・秋学期末に「学生による授業改善アンケート」を実施し、各教員がそれを授業内容にフィードバックすることで、授業内容とシラバスの整合性を、学生の学びの立場に立ってチェックする体制をとっている。
- ・毎年、「卒業生アンケート」を実施し、成果を確認している。「卒業生アンケート」については、2013年度よりdesknet'sに掲示し、常時閲覧できるようにし、教育成果の検証に役立てている。

なお、各学科の当該項目も参照。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。

A ☒ B C

【利用方法】※箇条書きで記入。

- ・教学改革委員会および各学科において、同アンケート・各種報告資料を参考にして、授業内容および方法の改善を図っている。
- ・必要時には各学科の判断により、学科ごとの「自由記述欄」のデータを提供し、現状把握に努めている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

（2）特記事項

※上記点検・評価項目における2015年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・基本的に前年度からの継続であり、特記事項は特になし。	

（3）現状の課題・今後の対応等（必須項目）

※（1）～（2）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。

- ・カリキュラムマップ（ツリー）等によるカリキュラム改革とそれに呼応する教育方法の見直し

【この基準の大学評価】

文学部では学科によっては、春学期開始後数週間の頃に専任教員が分担して新入生全員を対象にグループ面談を行っており、その努力・工夫は高く評価できる。文学部全体として、このような面談が導入可能かどうか、今後、検討が進められることを期待したい。

各学科とも、新たな授業形態導入について、概ね、積極的な取り組みがなされており評価できる。授業外学習は、ゼミの課題や講義小テストの準備として学生に課しており、適切である。

少人数指導という形態は、学生にとっては望ましいと言える。日本文学科の記述の中で「20名程度の少人数クラス」とある。可視化する時に数字は一つの基準になるものであり、「20名」が妥当かどうかは別にして、他の学科も数字で明確化することが望まれる。

シラバスは適切に作成され、教学改革委員会委員により第三者チェックが行われており、適切である。シラバスと授業との検証は「学生による授業改善アンケート」の項目で確認しており、評価される。授業改善アンケートは適切に行われており、その結果が「FD研修会」や「学科会議」などで検討されている。例えば、心理学科では授業改善アンケートからの「気づき」を全教員が各自A4で1枚に記述し、学生が読める場所に掲示するとしており、可視化されていることは評価できる。

成績評価と単位認定の適切性については、その努力が評価できる。ただし、多学科にわたるだけに、客観化の手法の困難さも相まって、文学部全体としての方向性について、今後、検討が進められることが期待される。

4 成果

【2016 年 5 月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

【学位授与方針】	
「文学部の理念・目的」に記されているような教育目標をかがげ、その実現を目指したカリキュラムを各学科で編成している。各学科の専門科目において、自己と世界を客観的に捉える方法を学ぶと同時に、それをもとにゼミナールにおいては自ら問題を分析・総合する思考力とともに他者の論点や批評・批判を理解しうる能力を涵養する。さらに卒業論文の執筆によって論理的かつ独創的な表現力を鍛錬する。上記のような一連の学問的修養を通して、独自の個性として「自己」を確立し、社会の中で自分をいかしながら他者に配慮できる人材、特に「言葉の力」の可能性を理解し最大限に発揮できる人材を育成する。	
4.1 教育目標に沿った成果が上がっているか。	
①学生の学習成果を測定していますか。	A ☒ B C
(～400 字程度まで) ※取り組みの概要を記入 (習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用状況等)。 文学部の比較的多くの授業では定期試験・レポート試験のほかに、小テスト、リアクションペーパーなどを行なっている。少人数制のゼミでは頻繁に研究発表やプレゼンを課している。これらの機会をととして学習成果を測定している。また、学びの集大成として、文学部では全学科で卒業論文提出が義務付けられており、卒論作成を念頭におきながら、ゼミ等をととして、早期からの指導・チェック体制がとられている。なお、<u>各学科の当該項目も参照</u>。 【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『文学部講義概要 (シラバス)』	
②成績分布、進級などの状況を学部 (学科) 単位で把握していますか。	☒ はい いいえ
【データの把握主体・把握方法・データの種類の等】 ※箇条書きで記入。 ・教授会執行部が GPCA 集計結果の学部別データ、学科別のデータを申請・入手し、各学科に配布している。なお、<u>各学科の当該項目を参照</u>。 【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
③学習成果を可視化していますか。	A ☒ B C
【学習成果可視化の取り組み】 ※取り組みを箇条書きで記入 (取組例：専門演習における論文集や報告書の作成、統一テストの実施、学生ポートフォリオ等)。 ・<u>各学科の取り組みを参照</u>。 【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・<u>各学科の当該項目を参照</u>。	
4.2 学位授与 (卒業・修了認定) は適切に行われているか。	
①学生の就職・進学状況を学部 (学科) 単位で把握していますか。	☒ はい いいえ
【データの把握主体・把握方法、データの種類の等】 ※箇条書きで記入。 ・キャリアセンター、学部長会議にて資料を入手し、教授会構成員全員に資料を公開している。 【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・上記に言及した資料	

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・基本的に前年度からの継続であり、特記事項は特になし。	

(3) 現状の課題・今後の対応等 (必須項目)

※（１）～（２）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について簡条書きで記入。

・学生の資質・能力等の変化により、限界はあるが、よりきめの細かい教育成果の検証・測定が必要である。

【この基準の大学評価】

文学部全学科で卒業論文提出が義務付けられている点、学習成果の大きな測定方法として、学部の一体性を担保しているものと評価できる。ただし、卒業論文に関しては、不合格の場合、それ以前の学年の成績との関連性について明確に分かる方法と、過去の卒業論文からの剽窃がもし存在した場合の対策について、今後の検討が望まれる。

学習成果の可視化については、卒業論文の発表会や、英文学科のように優秀論文を学内誌に掲載するなど、学生にとっても励みになるものであり評価できる。また、学科によっては前年度の卒業論文のタイトル一覧を在学生に公表したり、史学科では『法政史学』に論文名を掲載したりしているのも評価できる。

地理学科の必修科目である「現地研究」では、報告書の作成だけではなく、ウェブサイトでの公表を義務付けているのは、一つの試みとして高く評価できる。

就職・進学状況については、キャリアセンターからの資料を教授会構成員全員に公開しているとあるが、学科によっては、ゼミの教員が学生から直接情報を得ているところもあるので、各学科で検討し、改善が望まれる。

5 学生の受け入れ

【2016年5月時点の点検・評価】

（１）点検・評価項目における現状

【学生の受け入れ方針】

学位授与の方針についての目的や目標にそって、一つの固定した視点にとらわれず、様々な視点から物事を学ぼうという意欲と能力のある学生を求めている。入学前に習得しておくべき知識の内容・水準は学科によって異なるが、偏らず幅広い読書体験を有し、様々な分野に対して生き生きとした興味・関心を持っていることが望ましい。学生募集の形態は、入学センター試験利用入試、二種類の一般試験入試、自己推薦入試、付属校推薦入試、指定校推薦入試、社会人入試と多岐にわたる方法がとられ、それによって、一定の能力を持ちつつも多様な個性の学生が入学することを目指す。また通信教育では、生涯学習の要望へも対応すべく、幅広い年齢層の学生を受け入れる。

5.1 適切な定員を設定し、学生を受け入れるとともに、在籍学生数を収容定員に基づき適正に管理しているか。

①定員の超過・未充足に対し適切に対応していますか。

はい いいえ

（～200字程度まで）※入学定員・収容定員の充足状況をどのように捉えているかを記入。

毎年、定員の超過率・充足率については教授会で報告しており、次年度の対策については教授会執行部（入試委員）と入学センターおよび担当理事が協議を行ない、また必要に応じて学科とも相談のうえ、慎重に合格者数を決定している。また2015年度入試までについて言えば、定員充足率は1～1.2倍の範囲にある。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・「入試委員会資料」（入試査定資料）

定員充足率（2011～2015年度）

（各年度5月1日現在）

種別\年度	2011	2012	2013	2014	2015	5年平均
入学定員	605名	605名	655名	655名	655名	
入学者数	620名	675名	651名	700名	627名	
入学定員充足率	1.02	1.12	0.99	1.07	0.96	1.03
収容定員	2,420名	2,420名	2,470名	2,520名	2,570名	
在籍学生数	2,827名	2,852名	2,846名	2,867名	2,834名	
収容定員充足率	1.17	1.18	1.15	1.14	1.10	1.15

5.2 学生募集および入学者選抜は、学生の受け入れ方針に基づき、公正かつ適切に実施されているかについて、定期的に検証を行っているか。

①学生募集および入学者選抜の結果について検証していますか。

A B C

【検証体制および検証方法】※簡条書きで記入。

- ・毎年5月に入学センターの担当者と学部執行部とが検証し、教授会に報告する。
- ・特別入試に関しては6学科の委員からなる「入試小委員会」において検討し、教授会で審議・了承を得ている。

- ・一般入試については各学科において、それぞれ選抜方法や募集人数について検討し、教授会で審議・了承を得ている。
- ・また入試制度の見直しに際しては、全学入試委員会で配布された資料が入試小委員会および教授会で配布され、検討されている。
- ・在学生の GPA 追跡調査や「入学経路別 男女別 卒業生成績データ」などの資料も入試小委員会、教授会で配布され、適宜参照されている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・「入学センター資料」

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特別入試において「国際バカロレア利用自己推薦入試」「グローバル体験公募推薦入試」を導入した（哲学科、英文学科）。 ・指定校推薦入試において日本語学校に推薦枠を広げた（哲学科、日本文学科、英文学科、史学科）。	

(3) 現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※（１）～（２）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

- ・2016 年度入学者数が定員を大幅に超過したため、今後も入学定員充足率に留意する。

【この基準の大学評価】

文学部では学生の受け入れについては、入学センターの担当者と学部執行部とが検証し、概ね、問題ないものと認められる。入学定員充足率は、ほぼ定員に近い数で良好と思われるが、2016 年度に大幅に超過した学科があるので、学生教育の質を落とさないように努力することを期待したい。

学生募集の形態は、入学センター試験利用入試、二種類の一般試験入試、自己推薦入試、付属校推薦入試、指定校推薦入試、社会人入試と多岐にわたり、学科によって相違はあるものの、全体としては、特別入試に積極的な対応がなされており評価できる。

入試経路別の学生成績については、学科会議で情報を共有し、検討している学科があり、大変優れた取り組みと評価できる。その経験を全学科で共有し、入試制度の絶えざる改善を目指すことが期待される。

6 学生支援

【2016 年 5 月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

6.1 学生への修学支援は適切に行われているか。	
①卒業・卒業保留・留年者および休・退学者の状況を学部（学科）単位で把握していますか。	☒ はい ☐ いいえ
【データの把握主体・把握方法・データの種類の種類等】※箇条書きで記入。 ・2 月に卒業判定教授会を開催し、資料とともに各学科で確認した 4 年生の卒業・留級について報告を受け、教授会として正式に判定している。 ・4 月の教授会にて、卒業、卒業保留、退学状況について各学科に報告している。 ・退学については、春学期・秋学期の学費未納による除籍、病気や一身上の都合による退学など、適宜、学科会議を経て教授会で承認している。 各学科の当該項目も参照。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・各種事務資料、『文学部講義概要（シラバス）』	
②成績が不振な学生に対し適切に対応していますか。	☒ A ☐ B ☐ C
【成績不振学生への対応体制および対応内容】※箇条書きで記入。 ・各学科で対応している（各学科の当該項目を参照）。 ・特に問題がある場合は教授会で報告されている。	

・2013 年度より、毎年 9 月に 6 学科主任と教授会執行部による「留級者・休学者・成績不振者の情報交換会」を開催し（学科主任会議）、現状把握や各学科の対応について情報の共有をはかり（GPA の低い学生をピックアップして各学科に通知するなど）、今後の取り組みに生かしている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・「学科主任会議資料」	
③学部（学科）として外国人留学生の修学支援について適切に対応していますか。	A ☒ B ☐ C ☐
（～400 字程度まで）※外国人留学生の修学支援に関する取り組みの概要を記入。 目下のところ外国人留学生の数が少ないので、学科ごとに対応している。 <u>各学科の当該項目を参照。</u>	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	

（２）特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、簡条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・基本的に前年度からの継続であり、特記事項は特になし。	

（３）現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※（１）～（２）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について簡条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・成績不振者に対するさらに効果的な指導方法の確立

【この基準の大学評価】

文学部では卒業保留、留年者、そして休・退学者については、各学科で対応されているが、まずは具体的な数値を把握しないと、その後の適切な対策が討議できないと思われる。ただし、成績不振学生への対応として、学部執行部・学科で緊密な連絡体制が図られていることは評価できる。この点では、先進的な取り組みをしている学科がある。例えば、地理学科では成績や GPA を常に注視し成績が極端に下がることがあれば呼び出して状況を把握しており、心理学科では対象となる学生に往復はがきを郵送して知らせている。このような学科の経験を全学科・学部全体として共有し、発展させることが望まれる。

外国人留学生の修学支援については、現時点では問題のないものと考えられる。現在の留学生在籍者数は 71 名であるが、今後留学生の増加が予測されるので、大学全体と連携しながら、検討されることが望まれる。

7 内部質保証

【2016 年 5 月時点の点検・評価】

（１）点検・評価項目における現状

7.1 内部質保証システム（質保証委員会）を適切に機能させているか。	
①質保証委員会は適切に活動していますか。	☒ はい ☐ いいえ
【2015 年度質保証委員会の構成、開催日、議題等】 ※簡条書きで記入。 ・質保証委員会第 1 回：2015 年 4 月 22 日（水）12 時 40 分～、場所 80 年館 7 階 丸会議室、テーマ＝昨年度の委員会活動報告（シラバスチェックの方法再考、年度の課題等）、参加者＝全学科質保証委員 6 名、執行部 2 名（オブザーバー）、計 8 名。 ・同委員会第 2 回：2015 年 11 月 11 日（水）12 時 40 分～、場所 80 年館 7 階 丸会議室、テーマ＝2015 年度自己点検・評価活動（教学部門）の確認、課題検討、春学期の教員による授業参観のまとめ 参加者＝全学科質保証委員 6 名、執行部 2 名（オブザーバー）、計 8 名。 ・同委員会第 3 回：2016 年 3 月 9 日（水）12 時 40 分～ 場所：80 年館 7 階 丸会議室、テーマ＝自己点検・評価活動年度末報告、2015 年度教員による授業相互参観報告、参加者＝全学科質保証委員 6 名、執行部 2 名（オブザーバー）、計 8 名。	

（２）特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・基本的に前年度からの継続であり、特記事項は特になし。	

【この基準の大学評価】

文学部質保証委員会は 2015 年度には 3 回開催されている。参加者は全学科質保証委員 6 名とオブザーバーとして学部執行部 2 名の合計 8 名である。質保証委員会委員は全学科、毎年交代している。体制としては、特に問題はないものと評価されるが、学科数が多いので、今後共、内部質保証における、各学科と学部の有機的連関体制の工夫・発展の検討が期待される。

また、特記事項に「基本的に前年度からの継続であり」とあるが、毎年、継続を繰り返す場合、それが慢性化し、改革から遠ざかる可能性があるため、新しい教員の意見や他学部の方策なども参考にし、改善できるものは改善するように、質保証委員会自体のあり方の検討を期待したい。

【大学評価総評】

文学部は 6 学科からなっており、文学部としての教育理念はあるが、各学科とも専門教育や教育方針の目標を独自に掲げている。その点、6 学科を一つの学部として総評するのは難しいが、全体としては少人数教育を重視し、幅広く深い教養と総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育を目指している点は高く評価できる。

「2015 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況」については、全体としては、共通して少人数教育の重視とそれを目指した丁寧な指導が窺えるものの、このようなきめ細かな指導により教員個々の負担が重いのではないかという懸念が残り、その解消策の持続的な検討が今後も必要であろうと思われる。

さらに、全般的に文学部の記述には、学生教育への努力は認められるものの、現状の問題点を可視化することが少ないように思われる。さらに一歩踏み込んで、さまざまな視点から文学部、そして各学科を客観的に見直し、問題点を明確にし、問題点への対策を実施することが期待されるとともに、よりきめの細かい教育成果の検証と測定を期待したい。他学部や、文学部の中でも新しい学科の好ましい対策や方策を、今後の文学部改革に導入していってもらいたいと期待している。

文学部哲学科

I 2012 年度認証評価 努力課題に対する改善計画（報告）書

該当なし

II 2015 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2015 年度大学評価結果総評】

文学部では、その教育理念やカリキュラムの概要が学部パンフレットや HP などに明確に示されている。また『文学部 2016 GUIDE BOOK』の内容も（専任教員の顔写真を掲載するなど親しみやすい作りになっていることも含めて）簡潔かつ分かりやすいものになっている。

学科ごとに独自の学問分野や教育方針を掲げながらも、共通して少人数教育を重視しており、学生が主体的に学んでいくことを促進・媒介する仕組みとなっている可能性が高いといえることができる。

このようなきめ細かな指導は、その他の学務（とりわけ日本文学科と史学科と地理学科の場合は通信教育部の仕事）とあいまって、教員個々の負担増につながりうることに懸念される。少人数教育の強みをより一層生かすためにも、教員の負担増を減らす措置・工夫が望まれる。

なお、教授会規程、内規、細則等の整備を指摘された認証評価・努力課題に対する対応が適切になされた結果、具体的な改善点としては、特段に記載することはない。

【2015 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400 字程度まで）

きめの細かい学生指導は継続して行われ、学科会議の議論を通じて改善が図られている。総評に指摘のある教員の負担増の問題については、今後学科会議での議論を始めたい。

III 自己点検・評価

1 教員・教員組織

【2016 年 5 月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

【教員像および教員組織の編制方針】（2011 年度自己点検・評価報告書より） 専門研究者としての実績、すぐれた教育指導力、そして高潔な人格を兼ね備えた人材が本学科の求める教員像である。 また、本学科の教育課程は、西洋哲学を中心とした幅広い分野を網羅していることに大きな特色がある。この教育課程に 即して、その主要部分を担当できる専任教員ならびにその他の部分を担当するに適した兼任講師をもって教員組織を編制 する。							
1.1 学部等として求める教員像および教員組織の編制方針を明確にしているか。							
①採用・昇格の基準等において、法令に定める教員の資格要件等を踏まえて、教員に求める能力・ 資質等を明らかにしていますか。						はい いいえ	
【根拠資料】 ※教員に求める能力・資質等を明らかにしている規程・内規等の名称を記入。 ・「文学部教授会規定内規」、「哲学科 人事に関する内規」							
②組織的な教育を実施する上において必要な役割分担、責任の所在を明確にしていますか。						はい いいえ	
【学部執行部の構成、学部内の基幹委員会の名称・役割、責任体制】 ※箇条書きで記入。 (1) 文学部全体のシートを参照。 (2) 年度ごとに学科主任一名を選出し、役割を分担している。 (3) 学科会議において学科所属教員の学内・学部・学科内の役割分担を決定している。 (4) それを分担表に明示し責任の所在を明確化している。							
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・2016 年度各種委員会名簿（文学部教授会資料）							
③教員組織の編制において大学院教育との連携を考慮していますか。						はい いいえ	
（～400 字程度まで）※教員組織の編制において大学院教育との連携にあたりどのようなことが考慮されているか概要を 記入。 哲学科 12 名の専任教員の内、11 名が大学院教育を担当し、学部・大学院相互の連携を図っている。また、学部学生に 大学院科目の受講を認めることによって、学部教育との連携が図られている。 定例学科会議の後で定例専攻会議を開き、両者の連携を図っている。							
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『大学案内』、『大学院案内』							
1.2 教育課程に相応しい教員組織を整備しているか。							
①学部（学科）のカリキュラムにふさわしい教員組織を備えていますか。						はい いいえ	
（～400 字程度まで）※教員像および教員組織の編制方針、カリキュラムとの整合性等の観点から教員組織の概要を記入。 哲学科のカリキュラムは、古代ギリシア哲学から、近代の英米系・フランス系・ドイツ系の哲学・倫理学、そして、現 代の言語分析哲学、哲学的解釈学、法哲学、数理哲学、さらに社会思想、日本思想、東洋思想、比較文化に至るまで、学 生の多様な関心に対応できるように、幅広い学問分野を網羅し、それに相応しい教員組織を備えている。専任教員は、古 代ギリシア哲学 1 名、英米系哲学 1 名、フランス系哲学・思想 2 名、ドイツ系哲学・思想 5 名、数理哲学 1 名、法哲学 1 名、比較文化 1 名であり、主要な分野にバランスよく配置されている。専任教員ではカバーできない科目については兼任 教員に担当してもらうが、担当教員については、カリキュラムのバランスと候補者の専門性、教育経歴を慎重に審査した 上で人事を提起し、人事委員会および教授会の承認を得て決定している。							
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『文学部案内』							
2015 年度専任教員数一覧 (2015 年 5 月 1 日現在)							
学部・学科	教授	准教授	講師	助教	合計	設置基準上 必要専任教 員数	うち教授数
哲	11	1	0	0	12	6	3
専任教員 1 人あたりの学生数（2015 年 5 月 1 日現在）：27.8 人							
②特定の範囲の年齢に著しく偏らないように配慮していますか。						はい いいえ	

【特記事項】（～200 字程度まで）※ない場合は「特になし」と記入。

直近の過去の退職教員の後任人事の際に、40 歳代前半の教員を採用することによって、年齢構成上の問題は一定程度改善されている。

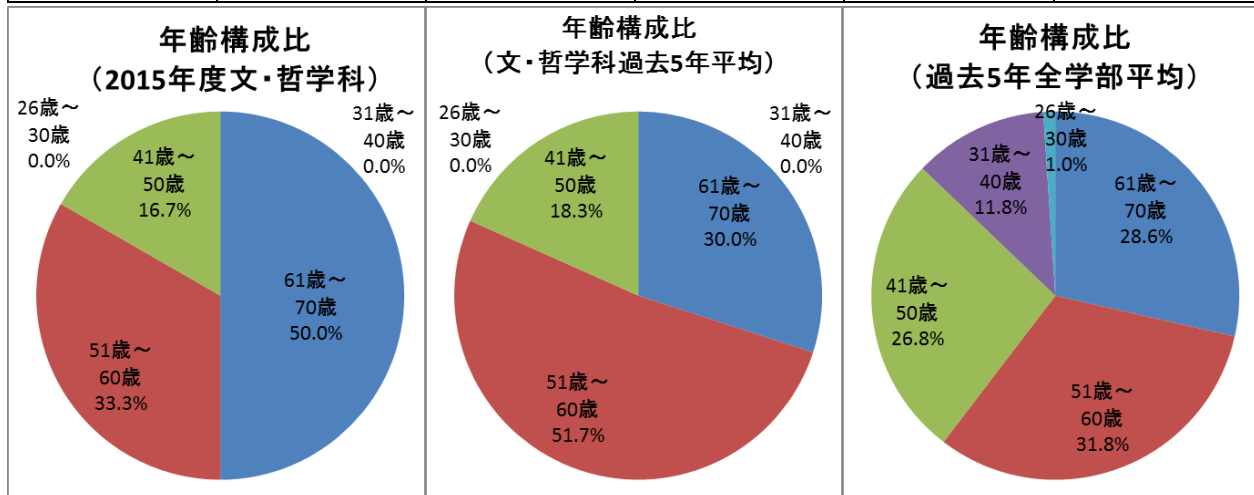
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

年齢構成一覧

(2015 年 5 月 1 日現在)

年度\年齢	26～30 歳	31～40 歳	41～50 歳	51～60 歳	61～70 歳
2015	0 人	0 人	2 人	4 人	6 人
	0.0%	0.0%	16.7%	33.3%	50.0%



1.3 教員の募集・任免・昇格は適切に行われているか。

①各種規程は整備されていますか。

☒ はい ☐ いいえ

【根拠資料】※教員の募集・任免・昇格に関する規程・内規等の名称を箇条書きで記入。

- (1)「文学部教授会規定内規」
- (2)「哲学科 人事に関する内規」

②規程の運用は適切に行われていますか。

☒ はい ☐ いいえ

【募集・任免・昇格のプロセス】※箇条書きで記入。「上記根拠資料の通り」と記載し、内規等（非公開）を添付することでも可。

- (1) 教員の募集・任免・昇格に際しては、人事関連規定に則り、学科内で審議・検討の上、人事委員会へ発議し、教授会で審議・承認というプロセスを採っている。
- (2) 教員の募集は公募を原則とし、書類選考、面接、模擬授業による厳格で適正な採用方針に則って行われている。

1.4 教員の資質向上を図るための方策を講じているか。

①学部（学科）内のFD活動は適切に行なわれていますか。

A ☒ B ☐ C

【FD活動を行うための体制】※箇条書きで記入。

- (1)「相互授業参観」のために授業を公開する。
- (2) 教員が「相互授業参観」に参加する。
- (3) FD 推進センターが主催する各種セミナーへの参加。

【2015 年度のFD活動の実績（開催日、場所、テーマ、内容（概要）、参加人数等）】※箇条書きで記入。

- (1) 哲学科では 2015 年度において、「相互授業参観」のために、月曜 2 限、火曜 3 限、5 限、水曜 2 限の計 4 つの専門科目を公開した。
- (2) 哲学科の専任教員 4 名が、文学部の「相互授業参観」のための公開専門科目を参観した。
- (3) これらを学科会議の議を経るなかで行った。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・2015 年度第 10 回教学改革委員会資料 3

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 現状の課題・今後の対応等 (任意項目)

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・前年度の実績を踏まえて「相互授業参観」への取り組みを進める。

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照

2 教育課程・教育内容

【2016 年 5 月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

【教育課程の編成・実施方針】 教育課程編成・実施にあたっては、とくに次の点に留意する。初年次教育を充実することにより、高校教育との連続性をはかり、大学での最初の学習へスムーズに移行できるようにする。哲学科専門科目の概論科目・哲学史科目および基礎演習から始めて、特講科目、演習（ゼミ）科目を経て、卒業論文に至るという発展的な教育課程により、哲学科卒業に相応しい学力を段階的に身につけられるようにする。また、語学関連の科目、教養関連の科目等も幅広く受講できるようにし、国際的な幅広い知識を得ることができ、広い視野でものごとを考えられる能力の養成を目指す。	
2.1 教育課程の編成・実施方針に基づき、授業科目を適切に開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	
① 学生の能力育成の観点からカリキュラムの順次性・体系性を確保していますか。	A ☒ B C
(～400 字程度まで) ※カリキュラム上、どのように学生の順次的・体系的な履修への配慮が行われているか概要を記入。 ゼミ形式の授業科目に関しては、1 年次の基礎ゼミ、2 年次の「基礎演習」、3・4 年次「哲学演習」と、4 年間で段階的に継続した能力形成が可能となるように配置している。また、1・2 年次に概論科目を履修・修得させ、2・3 年次には「基礎演習」・「哲学演習」と並行して特殊講義、選択科目で専門性および視野の拡大を図り、4 年次には、広い教養に支えられた専門性の習得の証として、卒業論文の提出を課している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『文学部案内』、『2016 年度文学部講義概要（シラバス）』、文学部哲学科ホームページ http://www.i.hosei.ac.jp/~tetugaku/rinen.html	
② 幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程が編成されていますか。	A ☒ B C
(～400 字程度まで) ※カリキュラム上、どのように教養教育等が提供されているか概要を記入。 哲学科では、哲学という学問の性格上、学生が教育課程全体にわたり、幅広く深い教養および総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養するための授業科目を開設し、体系的に編成している。その際に、教養科目と総合科目を有効に活用している。これらの一部は専門科目としても指定されている。特殊講義科目のなかに、フランス・ドイツでの短期滞在を課す「国際哲学特講」を設置し、国際的な教養を培う機会を提供している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『文学部案内』、『2016 年度文学部講義概要（シラバス）』	
2.2 教育課程の編成・実施方針に基づき、各課程に相応しい教育内容を提供しているか。	
① 学生の能力育成のための教育課程・教育内容が適切に提供されていますか。	A ☒ B C
(～400 字程度まで) ※学生に提供されている教育課程・教育内容の概要を記入。 各課程に相応しい教育内容を提供している。1 年次の「基礎ゼミ」、1・2 年次の概論科目、2 年次の「基礎演習」、2・3 年次の「哲学特講」、3・4 年次の「哲学演習」と、4 年間で段階的に継続した能力形成が可能となるように配置し、4 年次には、広い教養に支えられた専門性の習得の証として、卒業論文の提出を課している。専門科目の中心に位置付けられる哲学特講および哲学演習については、各担当教員の専門分野を生かしながら、幅広い分野にわたる授業内容を提供している。「哲学特講」については、半期で担当教員を代え、学生の多様な問題関心に対応するように、教育内容に多様性をもた	

せている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『文学部案内』、『2016 年度文学部講義概要（シラバス）』	
②初年次教育、キャリア教育は適切に提供されていますか。	A ☒ B C
（～400 字程度まで）※学生に提供されている初年次教育、キャリア教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。 初年次教育に「基礎ゼミ」を開講し、リテラシー能力、プレゼンテーション能力、ディスカッション能力の向上を図っている。キャリア教育については、文学部独自の共通科目として、2011 年度より「文学部生のキャリア形成」、「現代のコモンセンス」が開講されている。これらの科目は、就業力の形成、社会人としての常識・倫理の涵養というキャリア教育を目的としており、哲学科の学生にもその履修を奨励している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『文学部案内』、『2016 年度文学部講義概要（シラバス）』、『2016 年度文学部履修の手引き』	
③学生の国際性を涵養するための教育内容は適切に提供されていますか。	A ☒ B C
（～400 字程度まで）※学生に提供されている国際性を涵養するための教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。 2011 年度（秋学期）から「国際哲学特講」を開設した。この「国際哲学特講」は、国内外に類を見ない、ユニークな科目であり、フランス・ドイツの思想を現地の学生と共に考えるという、特別の性格をもつ。学生は、まず実地研修の準備として、「講義と演習の融合授業」を受講する。最終段階で、フランス・アルザス地方にある国際提携施設で、国際交流を兼ねた研修を行う。学生は、異文化（西ヨーロッパ文化）に直に触れ、大きな刺激を受けることになる。この科目は、受講学生に異文化への興味と関心を抱く機会を与え、国際性の涵養に貢献している。またこの間、交換留学生の受け入れを始め、教育環境の一層の国際化を図っている。今年度からは、大学院のエラスムス・ムンドゥス科目を学部生が受講可能にすることの検討を始めている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『文学部案内』、『2016 年度文学部講義概要（シラバス）』、『2016 年度文学部履修の手引き』	

（２）特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

（３）現状の課題・今後の対応等（必須項目）

※（１）～（２）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。

（１）これまでの取り組みを踏まえ、各年次の学生の履修状況をより詳細に把握し問題点の検討・対応を行う。
--

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照

３ 教育方法

【2016 年 5 月時点の点検・評価】

（１）点検・評価項目における現状

3.1 能力育成の観点から教育方法および学習指導は適切か。	
①学生の履修指導を適切に行っていますか。	A ☒ B C
【履修指導の体制および方法】 ※箇条書きで記入。 ・新年度開始の 4 月初めに次を実施している。(1) 新入生オリエンテーション、(2) 在学生ガイダンス、(3) スポーツ推薦入学者ガイダンス、(4) 4 年生に対しては在学生ガイダンス時に卒論ガイダンスも併せて実施している。その際、履修上の誤りが生じないようにするため、演習履修上、卒業論文作成上の留意事項等の資料を配布して、丁寧に指導している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。	

・『2016 年度文学部履修の手引き』	
②学生の学習指導を適切に行っていますか。	A ☒ B C
(～400 字程度まで) ※取り組み概要を記入。 2010 年度から、新入生全員に対して専任教員が面接を行い、大学での学習において留意すべきポイントを指導し、履修上のミスマッチが生じないよう学習上の問題点の早期発見と適切な対応に努めている。また、「基礎ゼミ」の開講時に、当該科目の授業内容のみならず、4 年間の学生生活を視野に入れながら、特に受講科目の「登録」について注意すべき事柄などを含めて学習の指針を与えるようにしている。2 年生には、「基礎演習」授業を中心に、卒業に至るまでの専門科目の効果的で継続性のある学習方法について、注意を喚起している。3・4 年生には、「哲学演習」の授業時間などに演習指導や卒論指導と併せて、学生たちの学習全般にわたって各専任教員がきめ細かく指導している。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
③学生の学習時間（予習・復習）を確保するための方策を行なっていますか。	A ☒ B C
(～400 字程度まで) ※取り組み概要を記入。 授業外における学生の予習または復習を効果的に確保するために、シラバスや授業内において紹介された参考文献等の授業前および授業後の読解や「レポート課題」を課している。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2016 年度文学部講義概要（シラバス）』	
④教育上の目的を達成するため、新たな授業形態の導入に取り組んでいますか。	A ☒ B C
【具体的な科目名および授業形態・内容等】※箇条書きで記入（取組例：PBL、アクティブラーニング、オンデマンド授業等）。 (1) 各教員は、指定教科書や参考文献の活用以外に、必要に応じてパワーポイントや OHP、毎回のリアクション・ペーパーを利用して、教育上の目的を達成できるよう努めている。 (2) 一部の哲学演習では、受講生の発表をパワーポイントによるプレゼンテーション形式で実施し、哲学の内容を概念図に変換する能力を養成している。 (3) 受講生が 100 名前後の中規模教室の授業では、授業中に適宜、教員と学生だけでなく、学生間の質疑応答を行なわせ、アクティブラーニングを実施するなど、新たな授業形態の導入に積極的に取り組んでいる。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
3.2 シラバスに基づいて授業が展開されているか。	
①シラバスが適切に作成されているかの検証を行っていますか。	☒ はい いいえ
【検証体制および方法】※箇条書きで記入（取組例：執行部（〇〇委員会）による全シラバスチェック等）。 (1) シラバスは、各教員による作成後、教学改革委員が点検し、フィードバックしている。 (2) シラバスには、「テーマ」、「授業の到達目標」、「授業の概要と方法」、「各回の授業計画」、「授業外に行うべき学習活動（準備学習等）」、「テキスト」、「参考書」、「成績評価基準」、「授業改善アンケートからの気づき」が記載されているが、各項目についての記述の適正さが点検されている。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・2015 年度第 10 回教学改革委員会資料 3「2016 年度シラバス第三者チェック実施報告」	
②授業がシラバスに沿って行われているかの検証を行っていますか。	☒ はい いいえ
【検証体制および方法】※箇条書きで記入（取組例：後シラバスの作成、相互授業参観、アンケート等）。 (1) 授業がシラバスに沿って行われているかどうかは、学生による授業改善アンケートなどによって検証している。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
3.3 成績評価と単位認定は適切に行われているか。	
①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。	A ☒ B C
【確認体制および方法】※箇条書きで記入。 (1) 「成績評価基準」は、評価方法を含めてすべてシラバスに明示されており、各担当教員はそれにもとづいて公正かつ適切に評価している。 (2) 学生がその評価に疑問をもった場合には、学務部事務課を通じて成績調査を依頼することができる。	

(3) 成績訂正が必要な場合には、その理由を明らかにし、教授会の議を経て行う。	
(4) 「哲学演習」として開設されている 11 の演習科目では、単位認定および成績評価の基準を学科内で統一して、成績評価と単位認定の適切性を確保している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2016 年度文学部講義概要（シラバス）』、『2016 年度文学部履修の手引き』	
②他大学等における既修得単位の認定を適切な学部（学科）内基準を設けて実施していますか。	はい ☒ いいえ
（～400 字程度まで）※取り組み概要を記入。 転編入試験により哲学科に所属することとなった学生の既修得単位の認定は、学部および学科内で基準を設けて、それに従って、厳格に実施している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2016 年度文学部履修の手引き』	
③厳格な成績評価を行うための方策を行っていますか。	A ☒ B ☐ C ☐
（～400 字程度まで）※取り組み概要を記入。 厳格な成績評価を行うために、シラバスに明示した成績評価基準に従って、また、最初の授業で成績評価基準と努力目標を説明した上で、試験・レポートの出来具合、受講態度・参加などを総合的に評価している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2016 年度文学部講義概要（シラバス）』	
3.4 教育成果について定期的な検証を行い、その結果を教育課程や教育内容・方法の改善に結びつけているか。	
①教育成果の検証を学部（学科）ごとに定期的に行っていますか。	A ☐ B ☒ C ☐
【検証体制および方法】 ※箇条書きで記入。 (1) 月一回開催される学科会議において、哲学科の学生の履修状況、成績等に関する資料、ならびに、教員相互の情報交換などにより、教育成果の検証を行っている。 (2) 対処すべき問題が生じた場合には、学科会議の議により対処を決定し、実施している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・文学部哲学科学科会議資料	
②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。	A ☐ B ☒ C ☐
【利用方法】 ※箇条書きで記入。 (1) 学生による授業改善アンケート結果については、各セメスター終了後、アンケート調査表を各教員が確認し、そのアンケートからの「気づき」にもとづいて次年度の授業改善に活用している。 (2) 学科会議では、適宜、改善可能な点を検討し学科全体で組織的に活用するよう努めている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 現状の課題・今後の対応等（必須項目）

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。

・これまでの履修指導、学習指導の実績を踏まえて、年度ごとの固有の課題に対応したきめの細かい指導のあり方を学科会議で検討してゆく。
--

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照

4 成果

【2016 年 5 月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

【学位授与方針】	
哲学科の学士の学位授与にあたっては、とくに次の能力を有していることを重視する。第一に、哲学的専門性を備えた知識を有するとともに国際的な広い視野をもつこと。第二に、論理的な理解力や表現力を持ち、説得力のある仕方での発表や文章表現ができること。第三に、ディスカッション等において哲学的教養に裏打ちされた豊かなコミュニケーション能力を示せること。第四に、西洋を中心とする古今の哲学者のテキストを正しく読解でき、同時に哲学的知見を現代の諸問題に応用する力をもつこと。第五に、哲学的な問題発見能力、独創的な発想力を持つこと。	
4.1 教育目標に沿った成果が上がっているか。	
①学生の学習成果を測定していますか。	A ☒ B C
(～400 字程度まで) ※取り組みの概要を記入 (習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用状況等)。 講義形式の科目では、習熟度達成テスト、レポートの評価、小テストの評価などを通じて、学生の学習成果を測定している。2 年次の「基礎演習」では、毎回の提出される小論文の添削指導、プレゼン実践の評価などを通じて、3・4 年次の「哲学演習」では、プレゼン実践・討論実践の評価、レポートの評価などを通じて、学生の学習成果を測定している。これらを踏まえて、卒業論文の評価が、学習成果の総合的な測定となる。学習成果の測定は、定量化・数値化しにくいところがあるが、その方法が教員間で検討され、一定程度共有されるようになっている。また、卒業生アンケートを学科会議で回覧し、教授活動にフィードバックしている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2016 年度文学部講義概要 (シラバス)』	
②成績分布、進級などの状況を学部 (学科) 単位で把握していますか。	☒ はい いいえ
【データの把握主体・把握方法・データの種類の等】 ※箇条書きで記入。 (1) 学科会議で提示される学生に関する資料 (事務部作成) から、成績分布、試験放棄、進級・留級状況などを、学科内で把握している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・文学部哲学科学科会議資料	
③学習成果を可視化していますか。	A ☒ B C
【学習成果可視化の取り組み】 ※取り組みを箇条書きで記入 (取組例：専門演習における論文集や報告書の作成、統一テストの実施、学生ポートフォリオ等)。 (1) 1 年次の基礎ゼミ・必修科目、2 年次の基礎演習・必修科目、3・4 年次の哲学演習・特殊講義では、授業内アンケートや質問用紙の回収とそれへの授業内での回答を通じて学習成果を可視化している。 (2) 4 年次の卒業論文指導では、構想発表会等を通じて、学習成果を可視化している。 (3) 卒業論文に関しては、4 月初めの在学生ガイダンスの際に、前年度のタイトルの一覧を在学生に公表している。 (4) 一部の哲学演習では、ゼミ発表と配布資料をすべて DVD に収録し、受講学生に配布して、学習成果を可視化するようにしている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・2015 年度哲学科卒業論文タイトル一覧	
4.2 学位授与 (卒業・修了認定) は適切に行われているか。	
①学生の就職・進学状況を学部 (学科) 単位で把握していますか。	☒ はい いいえ
【データの把握主体・把握方法、データの種類の等】 ※箇条書きで記入。 (1) 学生の就職・進学状況 (実数や企業の業種等) については、専任教員が担当する各ゼミの卒業生の就職状況が年度末や年度初めの学科会議において報告され、その実態を把握している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
----	---------

・特になし	
-------	--

(3) 現状の課題・今後の対応等 (必須項目)

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。

・これまでの取り組みを踏まえて、学習成果の測定を行い、成果の可視化を進める。
--

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照

5 学生の受け入れ

【2016 年 5 月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

【学生の受け入れ方針】 入学者受入れの方針は、多様な入試方法により、一定の能力をそなえた上でさまざまな個性を持つ者が入学できることである。そこで、この方針に沿った目的や目標は以下になる。一般入試およびセンター入試利用入試では、大学での学習のための一般的基礎学力の高い者を選抜する。指定校推薦入試、付属校推薦入試、スポーツに優れた者への特別推薦入試、帰国生入試、転編入試、外国人留学生入試では、平均的に高い学力を持つものの中から、とくに哲学に関心をもつ者を選抜する。																																																							
5.1 適切な定員を設定し、学生を受け入れるとともに、在籍学生数を収容定員に基づき適正に管理しているか。																																																							
①定員の超過・未充足に対し適切に対応していますか。						はい ☒ いいえ ☐																																																	
(～200 字程度まで) ※入学定員・収容定員の充足状況をどのように捉えているかを記入。 2012 年度から 2015 年度までの平均入学定員充足率は、1.06 であり適正に管理されている。したがって、定員の超過および未充足については特段の対応はしていない。																																																							
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・2016 年度第 1 回文学部教授会資料 2・資料 3																																																							
定員充足率 (2011～2015 年度) (各年度 5 月 1 日現在) <table border="1"> <thead> <tr> <th>種別\年度</th> <th>2011</th> <th>2012</th> <th>2013</th> <th>2014</th> <th>2015</th> <th>5 年平均</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>入学定員</td> <td>70 名</td> <td>70 名</td> <td>77 名</td> <td>77 名</td> <td>77 名</td> <td></td> </tr> <tr> <td>入学者数</td> <td>71 名</td> <td>81 名</td> <td>83 名</td> <td>81 名</td> <td>73 名</td> <td></td> </tr> <tr> <td>入学定員充足率</td> <td>1.01</td> <td>1.16</td> <td>1.08</td> <td>1.05</td> <td>0.95</td> <td>1.05</td> </tr> <tr> <td>収容定員</td> <td>280 名</td> <td>280 名</td> <td>287 名</td> <td>294 名</td> <td>301 名</td> <td></td> </tr> <tr> <td>在籍学生数</td> <td>339 名</td> <td>340 名</td> <td>347 名</td> <td>342 名</td> <td>334 名</td> <td></td> </tr> <tr> <td>収容定員充足率</td> <td>1.21</td> <td>1.21</td> <td>1.21</td> <td>1.16</td> <td>1.11</td> <td>1.18</td> </tr> </tbody> </table>							種別\年度	2011	2012	2013	2014	2015	5 年平均	入学定員	70 名	70 名	77 名	77 名	77 名		入学者数	71 名	81 名	83 名	81 名	73 名		入学定員充足率	1.01	1.16	1.08	1.05	0.95	1.05	収容定員	280 名	280 名	287 名	294 名	301 名		在籍学生数	339 名	340 名	347 名	342 名	334 名		収容定員充足率	1.21	1.21	1.21	1.16	1.11	1.18
種別\年度	2011	2012	2013	2014	2015	5 年平均																																																	
入学定員	70 名	70 名	77 名	77 名	77 名																																																		
入学者数	71 名	81 名	83 名	81 名	73 名																																																		
入学定員充足率	1.01	1.16	1.08	1.05	0.95	1.05																																																	
収容定員	280 名	280 名	287 名	294 名	301 名																																																		
在籍学生数	339 名	340 名	347 名	342 名	334 名																																																		
収容定員充足率	1.21	1.21	1.21	1.16	1.11	1.18																																																	
5.2 学生募集および入学者選抜は、学生の受け入れ方針に基づき、公正かつ適切に実施されているかについて、定期的に検証を行っているか。																																																							
①学生募集および入学者選抜の結果について検証していますか。						A ☐ B ☒ C ☐																																																	
【検証体制および検証方法】 ※箇条書きで記入。 (1) 哲学科では、毎年、入学センターから提供される資料に基づき、学生募集定員と受験者実数との関係や入学者の学力等を精査して、当該年度の入学者選抜の結果について妥当性を検証している。 (2) 当該年度の入学者の入学経路や成績分布等も検証することによって、翌年度の学生募集定員や推薦入学指定校の見直しを行なっている。																																																							
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし																																																							

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
----	---------

(1) 入学者の超過に伴う今後4年間の増コマなどを含む教育上の対処法の検討と実施。	
---	--

(3) 現状の課題・今後の対応等 (任意項目)

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

(1) 入学者の超過に伴う今後4年間の増コマなどを含む教育上の対処法の検討と実施。(2) 入学定員超過の問題を全学的な分析を踏まえて学科としての対処を検討する。
--

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照

6 学生支援

【2016年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

6.1 学生への修学支援は適切に行われているか。	
①卒業・卒業保留・留年者および休・退学者の状況を学部（学科）単位で把握していますか。	☒ はい ☐ いいえ
【データの把握主体・把握方法・データの種類の等】 ※箇条書きで記入。 (1) 卒業、卒業保留、退学状況については、事務部作成の資料をもとに、教授会、学科会議においても確認し、その実態を把握している。 (2) 学科主任や卒業論文指導教員による面談や連絡を通じて、実態の具体的把握を行っている。 (3) 問題が生じた場合は、学科会議で検討し対処を決定している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・文学部哲学科学科会議資料	
②成績が不振な学生に対し適切に対応していますか。	A ☒ B ☐ C
【成績不振学生への対応体制および対応内容】 ※箇条書きで記入。 (1) 成績不振者には、基礎ゼミ、基礎演習、必修科目、哲学演習等の授業において、また卒業論文の個人指導の機会等に、適宜、成績向上のためのアドバイスや指導を行なっている。 (2) 必要に応じて、学科主任による面談を実施している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
③学部（学科）として外国人留学生の修学支援について適切に対応していますか。	A ☒ B ☐ C
(～400字程度まで)※外国人留学生の修学支援に関する取り組みの概要を記入。 新入生全員に対する個人面談の際に、学修に関する問題を取り上げ、支援を行っている。また、基礎ゼミ、基礎演習、必修科目、哲学演習等の授業、卒業論文の個人指導の機会等に、適宜、学修上のアドバイスや支援を行なっている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における2015年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 現状の課題・今後の対応等 (任意項目)

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・留学生を含め、個人面談、授業、卒論指導を通して個々の学修状況の把握、支援をきめ細かく行ってゆく。

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照

7 内部質保証

【2016年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

7.1 内部質保証システム（質保証委員会）を適切に機能させているか。

①質保証委員会は適切に活動していますか。

はい いいえ

【2015年度質保証委員会の構成、開催日、議題等】※箇条書きで記入。

・「文学部全体」のシート参照。

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照

【大学評価総評】

※文学部全体の大学評価総評を参照

文学部日本文学科

I 2012年度認証評価 努力課題に対する改善計画（報告）書

該当なし

II 2015年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2015年度大学評価結果総評】（2011年度自己点検・評価報告書より）

文学部では、その教育理念やカリキュラムの概要が学部パンフレットや HP などに明確に示されている。また『文学部 2016 GUIDE BOOK』の内容も（専任教員の顔写真を掲載するなど親しみやすい作りになっていることも含めて）簡潔かつ分かりやすいものになっている。

学科ごとに独自の学問分野や教育方針を掲げながらも、共通して少人数教育を重視しており、学生が主体的に学んでいくことを促進・媒介する仕組みとなっている可能性が高いといえることができる。

このようなきめ細かな指導は、その他の学務（とりわけ日本文学科と史学科と地理学科の場合は通信教育部の仕事）とあいまって、教員個々の負担増につながりうることに懸念される。少人数教育の強みをより一層生かすためにも、教員の負担増を減らす措置・工夫が望まれる。

なお、教授会規程、内規、細則等の整備を指摘された認証評価・努力課題に対する対応が適切になされた結果、具体的な改善点としては、特段に記載することはない。

【2015年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400字程度まで）

教員個々の負担を軽減するため、2015年度に助教1名を採用し、現在は学科専任教員16名で種々の業務を分担している。また専任教員が増えたことにより、初年次教育科目の全てのクラスを専任教員で担当できることとなり、よりきめ細やかな指導が可能となった。

III 自己点検・評価

1 教員・教員組織

【2016年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

【教員像および教員組織の編制方針】 日本文学科はその目的を実現するため、日本の文学・言語・芸能の歴史と現状についての先鋭で多様な研究を可能にする、自立的な研究者・専門家からなる教員組織を編制する。教員にはその学風の礎となる研究活動への積極的な取り組みと、その研究成果を生かした教育活動への熱意ある取り組み、また教員組織を効果的に機能させる学科運営および学部・大学運営への主体的な関与が求められる。							
1.1 学部等として求める教員像および教員組織の編制方針を明確にしているか。							
①採用・昇格の基準等において、法令に定める教員の資格要件等を踏まえて、教員に求める能力・資質等を明らかにしていますか。						☒ はい ☐ いいえ	
【根拠資料】 ※教員に求める能力・資質等を明らかにしている規程・内規等の名称を記入。 ・「日本文学科の人事についての内規」							
②組織的な教育を実施する上において必要な役割分担、責任の所在を明確にしていますか。						☒ はい ☐ いいえ	
【学部執行部の構成、学部内の基幹委員会の名称・役割、責任体制】 ※箇条書きで記入。 ・文学部全体のシートを参照。 ・学科の責任体制としては以下のとおり。 (1) 日本文学の各時代および中国文学・言語学・日本の芸能を専門にする研究者・専門家をバランスよく配置、全員が専門科目の授業を担当し、学科主任を中心に組織的な教育を実施している。 (2) 1年次の教育については、初年次教育科目「大学での国語力」「ゼミナール入門」担当教員チームを組織し、チームリーダーを置く。 (3) 2年次以降については、文学・言語・文芸各コースのゼミ担当教員が中心となり、横断的に必要な役割を担う							
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし							
③教員組織の編制において大学院教育との連携を考慮していますか。						☒ はい ☐ いいえ	
(～400 字程度まで) ※教員組織の編制において大学院教育との連携にあたりどのようなことが考慮されているか概要を記入。 日本文学科の専任教員の大部分は、人文科学研究科日本文学専攻および国際日本学インスティテュートで大学院教育にも携わっており、連帯はきわめて緊密である。							
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし							
1.2 教育課程に相応しい教員組織を整備しているか。							
①学部（学科）のカリキュラムにふさわしい教員組織を備えていますか。						☒ はい ☐ いいえ	
(～400 字程度まで) ※教員像および教員組織の編制方針、カリキュラムとの整合性等の観点から教員組織の概要を記入。 専任教員全16名のうち、文学コース12名、言語コース2名、文芸コース2名という配分となっている。学生の各コースへの所属を示すゼミナールの数では文学コース12、言語コース4、文芸コース5となり、カリキュラムの体系性にふさわしい教員組織である。科目と担当教員の適合性は学科会議で判断した上で、人事委員会および教授会に審議・決定を委ねている。							
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2016 年度文学部履修の手引き』36～54 頁							
2015 年度専任教員数一覧						(2015 年 5 月 1 日現在)	
学部（学科）	教授	准教授	講師	助教	合計	設置基準上 必要専任教員数	うち教授数
日本文	14	1	0	1	16	9	5
専任教員 1 人あたりの学生数 (2015 年 5 月 1 日現在) : 50.1 人							
②特定の範囲の年齢に著しく偏らないように配慮していますか。						☒ はい ☐ いいえ	
【特記事項】 (～200 字程度まで) ※ない場合は「特になし」と記入。 2016 年 5 月時点においては、26～30 歳が 0 人 (0%)、31～40 歳が 1 人 (6%) である一方、41～50 歳が 8 人 (50%) と、年齢構成に若干の偏りが見られるが、教員の採用に際しては、適切なバランスとなるよう配慮もしている。							
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。							

・特になし					
年齢構成一覧 (2015年5月1日現在)					
年度\年齢	26～30歳	31～40歳	41～50歳	51～60歳	61～70歳
2015	0人	2人	7人	4人	3人
	0.0%	12.5%	43.8%	25.0%	18.8%

年齢構成比
(2015年度文・日本文学科)

年齢構成比
(文・日本文学科過去5年平均)

年齢構成比
(過去5年全学部平均)

1.3 教員の募集・任免・昇格は適切に行われているか。

①各種規程は整備されていますか。	はい ☒ いいえ ☐
------------------	---

【根拠資料】※教員の募集・任免・昇格に関する規程・内規等の名称を箇条書きで記入。

- ・「文学部人事委員会細則」
- ・「日本文学科の人事についての内規」

②規程の運用は適切に行われていますか。	はい ☒ いいえ ☐
---------------------	---

【募集・任免・昇格のプロセス】※箇条書きで記入。「上記根拠資料の通り」と記載し、内規等（非公開）を添付することでも可。

- ・募集については、原則として公募制を採用し、学科会議での発議を受けて学科主任、大学院専攻主任、採用しようとする教員の専門に関連する分野を専攻する複数の教員から構成される小委員会を組織し、応募者の業績を精査したうえで再び学科全体で審議を行う。最終的に面接等による審査を経て、学科として採用候補者を決定し、文学部人事委員会および教授会に審議・決定を委ねている。なお、文芸や芸能など特殊な分野において余人をもって代え難い人材を採用する場合には、公募によらず選考を行うことがある。
- ・任免については、学科会議で発議し、審議・承認のうえ文学部人事委員会および文学部教授会に審議・決定を委ねる。
- ・昇格については、学科会議で発議し、十分な教育経験および研究業績を有しているか審議を行う。承認された後、文学部人事委員会および文学部教授会に審議・決定を委ねる。

1.4 教員の資質向上を図るための方策を講じているか。

①学部（学科）内のFD活動は適切に行なわれていますか。	A ☐ B ☒ C ☐
-----------------------------	---

【FD活動を行うための体制】※箇条書きで記入。

- ・教員が全学および文学部のFD活動に積極的に参加し、定例学科会議で報告を行っている。
- ・「文学部専任教員相互授業参観」に各教員が主体的にかかわり、組織的な研修および研究に結びつく環境を整えている。
- ・教学改革委員による全シラバスチェックの報告をもとに、授業運営上、注意すべき問題や有益な事柄等については教員で情報を共有し、学科会議で討論等を行っている。
- ・学科独自の取り組みとして、必修科目「大学での国語力」・選択科目「ゼミナール入門」を担当する教員が学期開始前・学期末に検討会・反省会を行い、次年度の教育内容および方法の改善に結びつけている。

【2015年度のFD活動の実績（開催日、場所、テーマ、内容（概要）、参加人数等）】※箇条書きで記入。

- ・文学部専任教員授業相互参観 公開科目数7科目
- ・「大学での国語力」「ゼミナール入門」検討会・反省会 2015年9月14日実施（参加者10名）、2016年3月2日実施（参加者9名）

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・文学部専任教員授業相互参観公開科目資料
- ・「大学での国語力」「ゼミナール入門」検討会・反省会資料
- ・日本文学科シラバス第三者チェック報告

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 現状の課題・今後の対応等 (任意項目)

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

- ・1.2②に示したように、教員の年齢構成のバランスがやや悪い。今後、教員新規採用の際には、その点についても配慮する。

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照

2 教育課程・教育内容

【2016 年 5 月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

【教育課程の編成・実施方針】

日本文学科の教育課程は、他学部・他学科と共通の基礎科目と専門科目によって構成され、とくに日本文学科独自の専門科目においてはその専門性を広く把握すると同時に深く追求するため、文学・言語・文芸の三コース制を採用する。

文学コースでは、古代から近現代までの歴史的な見通しのなかで日本文学について学び、さらに中国文学・音楽芸能史・能楽などの隣接領域も視野に入れた上で、特定の時代や特定の領域の文学を専門的に研究することを目指す。言語コースでは、古典語の用法から現代日本語の変容までを含む広い領域で日本語について学び、さらに方言・外国語と日本語の関係・理論言語学などの多角的な視点も理解した上で、特定の主題を通じて言語の本質を専門的に考察することを追求する。文芸コースでは、近現代の文学を中心に過去に蓄積されて来たあらゆる作品を創作者の視点から研究し、現代という時代状況のなかで言語が生む効果を専門的に学ぶことで、言語能力を錬磨して自らが感受する生の諸相を的確に表現することを目指す。

それぞれのコースは必修科目と選択科目の組みあわせによって関連づけられ、学生は2・3年次以降いずれかのコースに籍を置いて少人数制のゼミナールに所属し、4年次にはその研鑽の成果を発揮する卒業論文（文芸コースは創作）に取り組む。なお卒業論文は、日本文学科の教育課程における集大成と位置づけられる。

2.1 教育課程の編成・実施方針に基づき、授業科目を適切に開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

①学生の能力育成の観点からカリキュラムの順次性・体系性を確保していますか。

A ☒ B ☐ C ☐

(～400 字程度まで) ※カリキュラム上、どのように学生の順次的・体系的な履修への配慮が行われているか概要を記入。

1年次に春学期必修科目「大学での国語力」を置き、大学での学習に必須である国語基礎力の養成を、1クラス 20 名程度という少人数授業で徹底して行っている。秋学期には2年次以降科目「ゼミナール」の導入として、選択科目「ゼミナール入門」を置き、より専門的な資料作成能力や文献探索能力、プレゼンテーション能力、ディスカッション能力の養成を少人数授業で行っている。

2年次からは、文学・言語・文芸の3コース制をとる。コースは「ゼミナール」（選択必修科目、2年間の継続履修、各学年7～10名定員）の所属ゼミによって決定し、各コース共通の必修科目3科目を土台とし、コース別必修科目2科目をそれぞれの専門性の柱とする体系化が施されている。選択必修科目には専門性を深く掘り下げる科目、選択科目・自由科目には各コースにおける研究の可能性の幅を広げ多様な興味に応えられる科目が用意されており、こうした教育課程で身につけた総合的な学力を検証するものとして、必修科目「卒業論文」が4年次に配置されている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・『2016 年度文学部履修の手引き』36～54 頁

②幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程が編成されているか。	A ☒ B C
(～400 字程度まで) ※カリキュラム上、どのように教養教育等が提供されているか概要を記入。 1 年次では、市ヶ谷基礎科目を中心に履修できるよう配慮し、人文科学、社会科学、自然科学、語学、体育の各分野について幅広く教養を習得できるようにしている。その一方、学生が早い段階からより深い学識が得られるよう、専門科目の履修も、科目の限定はしているが、可能としている。 2 年次以降も、基礎科目の履修により幅広く教養を身につけることができる。専門科目においても、日本文学・言語研究に関する科目以外に、美術、思想、言語心理学、認知科学等、隣接した学問領域の科目を選択科目として履修可能としているほか、総合科目、他学部公開科目、電算実習科目等を自由科目として 8 単位以上取得することとし、さまざまな学問領域をより深く学び、総合的な教養を修得できるよう教育課程を編成している。また、「ゼミナール」では少人数教育を行っており、担当教員の個性を生かした、豊かな人間性と専門的能力を涵養する場となっている。 上記の教育によって得られた深い教養と専門的知識をベースに、4 年次では卒業論文・卒業制作に取り組み、さらに総合的な判断力を培っていくこととなる。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2016 年度文学部履修の手引き』36～54 頁 ・『2016 年度文学部講義概要（シラバス）』69～154 頁	
2.2 教育課程の編成・実施方針に基づき、各課程に相応しい教育内容を提供しているか。	
①学生の能力育成のための教育課程・教育内容が適切に提供されていますか。	A ☒ B C
(～400 字程度まで) ※学生に提供されている教育課程・教育内容の概要を記入。 1 年次では、大学での学習に必須の国語基礎力を養成するため「大学での国語力」(必修科目)を、そして「ゼミナール」を履修する上で基礎的な能力を養成するため「ゼミナール入門」(選択科目)を開講している。2 年次以降は所属コース必修科目と「ゼミナール」および各コース共通で履修できる選択科目を通し、諸領域にわたる幅広い知識を身につける。 すなわち、初年次教育から専門的教育へと順次段階的に知識と理解を深め、蓄積しつつ、専門科目 やゼミナールでの演習によって自ら問題を発見・思考・調査し、プレゼンテーションすることを通して、自己の研究課題や創作テーマを見出すとともに、それらの方法論を学ぶ。その過程において各ゼミナールの教員は的確・厳密に学生の能力の向上を図り、その集大成としての卒業論文・卒業制作執筆の指導に当たる。毎年多くの優れた卒業論文・卒業制作が提出されるところから、これらの教育内容の適切性を判断しうる。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2016 年度文学部履修の手引き』36～54 頁 ・『2016 年度文学部講義概要（シラバス）』69～154 頁	
②初年次教育、キャリア教育は適切に提供されていますか。	A ☒ B C
(～400 字程度まで) ※学生に提供されている初年次教育、キャリア教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。 初年次教育として、大学での学習に必須の国語基礎力を養成するため「大学での国語力」(必修科目)を春学期に、「ゼミナール」履修上基礎的な能力を養成するため「ゼミナール入門」(選択科目)を秋学期に開講している。 キャリア教育に関しては、文学部共通科目「現代のコモンセンス」「文学部生のキャリア形成」のほか、学科独自の取り組みとしては、「メディアと社会」、「編集理論 A・B」、「編集実務 A・B」、「表現と著作権」(以上、選択科目)はキャリア教育としての意味も担っている。また「古文・漢文の基礎」(選択科目)は古典読解の前提となる内容をあつかうが、受講対象者には、教育実習で古文漢文を教えることになる学生も含んでおり、教職志望学生のためのキャリア教育的役割も担っている。 カリキュラム外でも毎年「教職をめざす学生のための特別講座」を開催するほか、就職支援行事「日文科生のための就活力」を日本文学科学学生委員会との共催で開き、4 年生の就職活動状況を把握したり、3 年生への情報提供を行ったりしている。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2016 年度文学部履修の手引き』36～54 頁 ・『2016 年度文学部講義概要（シラバス）』69～154 頁 ・「教職をめざす学生のための特別講座」案内チラシ ・「日文科生のための就活力」案内チラシ ・文学部日本文学科公式サイト http://nichibun.ws.hosei.ac.jp/wp/	

③学生の国際性を涵養するための教育内容は適切に提供されていますか。	☒ A B C
(～400 字程度まで) ※学生に提供されている国際性を涵養するための教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。 国際化に対応した教育内容として、日本文学科は日本文学に興味をもつ海外からの留学生（主に中国・韓国）を積極的に受け入れるとともに、ゼミナールから選択必修科目、選択科目までを含む中国文学に関する科目が学生の国際性を涵養するための重要な柱となっており、教育課程において日本文学を相対化してとらえる視点を提供している。 また、ESOP 科目、グローバル・オープン科目、ERP 科目等のグローバル教育センター設置科目を自由科目として履修できるようにしており、グローバルな視点を養う教育プログラムも積極的に導入している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2016 年度文学部履修の手引き』 36～54 頁 ・『2016 年度文学部講義概要（シラバス）』 69～154 頁	

（２）特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

（３）現状の課題・今後の対応等（必須項目）

※（１）～（２）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。

・2015 年度に、暫定版ではあるが、「カリキュラム・マップ」を作成した。作成作業の中で、現行のディプロマ・ポリシーやカリキュラムポリシーと実際のカリキュラムとの間に、これまで認識しえなかった、やや不適合の点等を見出すことができたので、今後、是正していくための対策をとる予定である。

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照

3 教育方法

【2016 年 5 月時点の点検・評価】

（１）点検・評価項目における現状

3.1 能力育成の観点から教育方法および学習指導は適切か。	
①学生の履修指導を適切に行っていますか。	☒ A B C
【履修指導の体制および方法】 ※箇条書きで記入。 ・新入生オリエンテーション ・学科内留学生サポート小委員会による「1 年次留学生履修相談会」の開催 ・1 年次後半のゼミナール選抜に関する指導 ・2 年次在学ガイダンス ・コースや研究分野に対応した 5 つの履修モデルを日本文学科公式サイトにて公開 ・4 年次への進級や卒業履修要件の充足を目指し、履修状況の確認を学生各自で行う「3 年次履修チェックリスト」を日本文学科公式サイトにて公開	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・日本文学科新入生オリエンテーション資料 ・留学生サポート小委員会履修相談資料 ・日本文学科在学ガイダンス資料 ・「専門科目の履修モデル」（文学コース、言語コース、文芸コース） ・3 年次履修チェックリスト（2016 年度） ・文学部日本文学科公式サイト http://nichibun.ws.hosei.ac.jp/wp/	
②学生の学習指導を適切に行っていますか。	A ☒ B C
(～400 字程度まで) ※取り組み概要を記入。	

当学科の教育方法の特徴は双方向授業による一貫した少人数指導である。1 年次春学期「大学での国語力」（必修科目）、1 年次秋学期「ゼミナール入門」（選択科目）、2～3 年次「ゼミナール」（選択必修科目）はいずれも受講者数が 20 名前後の少人数クラスで、担当教員がきめ細やかな教育を行っており、学生にとっても教員に質問しやすい学習環境を構築している。また、4 年次「卒業論文」（必修科目）はゼミナール担当の教員が指導教員となるため、2 年次から 4 年次まで、教員が学生の学習段階を常に把握し、互いに信頼関係を築きつつ、密度の濃い学習指導を行うことが可能となっている。 各教員ともオフィスアワーを設定しているが、1 年次入学直後の新入生歓迎会において、教員の研究室の案内をして懇談会を開き、学科全体で学生が学習相談をしやすい環境を築いており、オフィスアワーの活用を促している。		
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2016 年度文学部履修の手引き』36～54 頁 ・『2016 年度文学部講義概要（シラバス）』69～154 頁、439～445 頁		
③学生の学習時間（予習・復習）を確保するための方策を行なっていますか。	A	☒ B C
（～400 字程度まで）※取り組み概要を記入。 学生の学習時間は、シラバスに記載された「授業外に行うべき学習活動（準備学習等）」という項目によって予習・復習を促し、成績評価にかかわる課題の提出や試験の実施によって復習を行わせることで、適切に確保するようにしている。2015 年度シラバスから「授業外に行うべき学習活動（準備学習等）」の内容を、より具体的に記載することによって、学生が取り組みやすくなるよう、工夫を施した。成績評価の基準もシラバスに明記されているが、主にシラバスで必要な情報を公開することによって、学生に自主的な学習を促している。		
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2016 年度文学部講義概要（シラバス）』69～154 頁		
④教育上の目的を達成するため、新たな授業形態の導入に取り組んでいますか。	A	☒ B C
【具体的な科目名および授業形態・内容等】※箇条書きで記入（取組例：PBL、アクティブラーニング、オンデマンド授業等）。 ・下記の科目等ではアクティブラーニングを導入している。 「大学での国語力」「ゼミナール入門」…「ゼミナール」の導入的基礎的内容。 「ゼミナール」…各コースの研究分野に関する知識を習得するほか、問題発見・解決能力、複数で調査や考察を行うグループワークの能力、さらにはその結果をプレゼンテーションする発表能力を修得する。 「編集実務 A・B」…DTP ソフトを使用し、書籍や雑誌の誌面デザインを行う。小冊子の作製や課題のプレゼンテーションを行う。		
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2016 年度文学部講義概要（シラバス）』69～154 頁		
3.2 シラバスに基づいて授業が展開されているか。		
①シラバスが適切に作成されているかの検証を行っていますか。		☒ はい いいえ
【検証体制および方法】※箇条書きで記入（取組例：執行部（〇〇委員会）による全シラバスチェック等）。 ・教学改革委員による全シラバスチェック - 日本文学科主催全科目について、教学改革委員（一部、学科主任が分担）がシラバス各項目の検証を行っている。例年、ほぼ適切に作成されているが、もし不適切な記述等があれば、担当教員に修正を依頼している。		
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・日本文学科シラバス第三者チェック報告		
②授業がシラバスに沿って行われているかの検証を行っていますか。		☒ はい いいえ
【検証体制および方法】※箇条書きで記入（取組例：後シラバスの作成、相互授業参観、アンケート等）。 ・各教員によるリアクションペーパーの積極的な利用や授業改善アンケート結果の確認 ・文学部専任教員授業相互参観の実施 ・「大学での国語力」「ゼミナール入門」反省会の実施		
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・文学部専任教員授業相互参観公開科目資料 ・「大学での国語力」「ゼミナール入門」検討会・反省会資料		
3.3 成績評価と単位認定は適切に行われているか。		
①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。	A	☒ B C

【確認体制および方法】※箇条書きで記入。 - 成績評価の方法と基準はシラバスに明示されており、また FD 推進センターから授業ごとに GPCA および成績分布が通知されるので、各教員がそれを参考に成績評価を適切に行っている。 - 単位認定については、シラバスに記載されている成績評価基準に則って、各教員が厳密かつ適正に行っている。 - 複数教員によるオムニバス科目「日本文学概論 A・B」(必修科目)については、平常点(リアクションペーパーの提出を兼ねる)と、授業担当者が出題する定期試験の点数を 5 段階で数値化したものを、各学期末に学科会議で検討して、A+の割合やD評価の割合なども勘案しつつ、厳密かつ適正な単位認定を行っている。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 日本文学科会議資料	
②他大学等における既修得単位の認定を適切な学部(学科)内基準を設けて実施していますか。	はい ☒ いいえ
(～400 字程度まで) ※取り組み概要を記入。 留学生や転編入生の既修得単位認定については、申請のあった科目について学科会議で関係書類を精査して審議し、そののち教授会で承認を得ることで適切に行っている。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 特になし	
③厳格な成績評価を行うための方策を行っていますか。	A ☒ B C
(～400 字程度まで) ※取り組み概要を記入。 成績評価は原則的に各教員の裁量に委ねられているが、たとえばオムニバス授業である「日本文学概論 A・B」では適切・厳格な評価を行うために、成績評価基準について試験ごとに学科会議で検討を行っている。また「大学での国語力」「ゼミナール入門」についても、開講前と終了後に担当者によって検討会と反省会が行われているが、そのようなやりとりを通して、学科において共有すべき成績評価基準が明確になっていると考えられる。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 「大学での国語力」「ゼミナール入門」検討会・反省会資料 - 日本文学科会議資料	
3.4 教育成果について定期的な検証を行い、その結果を教育課程や教育内容・方法の改善に結びつけているか。	
①教育成果の検証を学部(学科)ごとに定期的に行っていますか。	A ☒ B C
【検証体制および方法】※箇条書きで記入。 - 卒業論文(文学コース・言語コース)、卒業制作(文芸コース)を教員が評価することにより、学科の教育成果の検証を行う。文学コースと言語コースでは、卒業論文ループブリックを作成し、教育成果評価の基準を明確化している。 - 優秀な卒業論文や作品があれば、教員から、学科が発行する学術雑誌『日本文学誌要』と文芸雑誌『法政文芸』への投稿が推薦される。各雑誌編集委員が原稿の査読を行い、掲載の可否を決定するため、こうした形でも検証が行われることとなり、また教育成果は公表されることとなる。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 『日本文学誌要』第 92 号 『法政文芸』第 11 号 - 日本文学科卒業論文ループブリック(文学コース、言語コース)	
②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。	A ☒ B C
【利用方法】※箇条書きで記入。 - アンケート結果は、各教員によって継続的に授業の改善に利用している。 - アンケート結果を学科会議で確認し、問題があれば検討する。 - シラバス必須項目「学生による授業改善アンケートからの気づき」を通して、各教員がアンケートの結果を学生にフィードバックしている。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 - 日本文学科会議資料 『2016 年度文学部講義概要(シラバス)』69～154 頁	

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・4年次への進級要件を満たせず3年次に留級する学生を減らすため、「3年次履修チェックリスト」を作成し、2016年度履修登録期間に公開した。	3.1①
・卒業論文ルーブリックの作成は文学コースのみであったが、2015年度に言語コースでも作成し、卒業論文指導、卒業論文の評価に役立てた。	3.4①

(3) 現状の課題・今後の対応等 (必須項目)

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。

・新たな授業形態について、授業の工夫等について情報共有し、導入を検討する。 ・授業改善アンケート結果の、より有効な利用について検討する。

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照

4 成果

【2016年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

【学位授与方針】 日本文学科は、「日本の文学・言語・芸能の歴史と現状を専門的に学び」「自らの見解を自らの言葉で的確に発信できる人材を育成する」という教育目標を達成することを目指し、必要となる専門科目を配置して適切な教育課程を編成する。その課程を修了した者に学士の学位が授与されるためには、 1. 日本の文学・言語・芸能の歴史と現状についての基本的な知識 2. 所属する文学・言語・文芸の三コースいずれかの領域における正確な読解力 3. 自ら問題を発見し、その問題について考察を深められる思考力（文学・言語コース） 自ら主題を発見し、その主題について構想を深められる想像力（文芸コース） 4. 自らの研究や発想の成果を的確に伝えられる日本語の表現力 以上のような資質・能力を身につけていることが求められる。	
4.1 教育目標に沿った成果が上がっているか。	
①学生の学習成果を測定していますか。	A ☒ B ☐ C ☐
(～400字程度まで) ※取り組みの概要を記入(習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用状況等)。 2012年度以降入学者については、必修科目「大学での国語力」2単位・「日本文芸学概論 A・B」各2単位・「日本言語学概論 A・B」各2単位および選択必修科目「ゼミナール」卒業要件8単位のうち4単位分を修得しなければ4年次に進級できないという規程によって、カリキュラムの基礎的な内容における3年次までの学習成果を測定している。 教育目標「自らの見解を自らの言葉で的確に発信できる」については、卒業論文(文芸コースは制作)によって確かめられている。とくに優秀な卒業論文・作品は、学科発行雑誌『日本文学誌要』『法政文芸』に掲載されており、学科の教育成果が高水準にあることを示している。 また、大学評価室卒業生アンケートを活用し、教育内容に関する学生の満足度を確認している。2014年度の結果によれば、当学科は「専門課程の教育」については「満足」「やや満足」の合計が89.6%、「ゼミナール」については同合計が87%で、全学集計のそれぞれ78.5%、76.1%を大きく上回っており、学生にも学習成果が実感できていることを示す指標の一つとして受け取ることができる。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『日本文学誌要』第92号 ・『法政文芸』第11号 ・法政大学大学評価支援システム 大学便覧リポート 17 卒業生アンケート(教育内容に関する満足度)	
②成績分布、進級などの状況を学部(学科)単位で把握していますか。	☒ はい ☐ いいえ
【データの把握主体・把握方法・データの種類の等】 ※箇条書きで記入。 ・成績分布や試験放棄については当該科目の担当教員がその実績を把握し、ケースによっては学科で対応策について議論している。	

・進級については、教授会回覧・配布資料により学科として実績を把握している。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。	
・文学部教授会資料	
③学習成果を可視化していますか。	☒ A B C
【学習成果可視化の取り組み】 ※取り組みを箇条書きで記入（取組例：専門演習における論文集や報告書の作成、統一テストの実施、学生ポートフォリオ等）。	
- 卒業論文・卒業制作には、4年間の教育・学習によって蓄積された読解力・思考力・調査力・表現力・文章作成能力の全てが表れる。文学コースでは2014年度に、言語コースでは2015年度に卒業論文ルブリックを作成し、大学での教育で身につけた資質・能力を測るための項目を設定して、4段階評価にて学習成果の可視化を行っている。 - 優秀卒業論文・卒業制作は学科発行の学術雑誌『日本文学誌要』・文芸雑誌『法政文芸』に掲載し、学生の学習成果を公表している。 - ゼミによっては、年度ごとに「ゼミナールレポート集」「卒業論文集」を作成し、学習成果を可視化している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。	
- 日本文学科卒業論文ルブリック（文学コース、言語コース） 『日本文学誌要』第92号 『法政文芸』第11号 - ゼミ作成「レポート集」「卒業論文集」	
4.2 学位授与（卒業・修了認定）は適切に行われているか。	
①学生の就職・進学状況を学部（学科）単位で把握していますか。	☒ はい いいえ
【データの把握主体・把握方法、データの種類の等】 ※箇条書きで記入。	
- 各ゼミナール担当教員による学生からの聞きとり等で把握、集計している。 - 学部から配布されるキャリアセンターからの資料によって把握している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。	
・特になし	

（2）特記事項

※上記点検・評価項目における2015年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・卒業論文ルブリックの作成は文学コースのみであったが、2015年度に言語コースでも作成し、学習成果の可視化を行うことができた。	4.1③

（3）現状の課題・今後の対応等（必須項目）

※（1）～（2）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。

大学評価室卒業生アンケート結果は学習成果の一つの指標となり得るが、やや主観的であるため、今後、GPA等を利用し、より客観的な指標による成果の確認を検討する。
--

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照

5 学生の受け入れ

【2016年5月時点の点検・評価】

（1）点検・評価項目における現状

【学生の受け入れ方針】 日本文学科は、その目的に基づいた教育目標を達成するため、日本の文学・言語・芸能について関心をもち、日本文学科の専門的な教育を受ける上で十分な適性をもつ者を広く受け入れる。 その適性で重視されるのは国語の学力だが、日本文学科における文学・言語の研究や文芸創作に必要なものは、高等学校までの教育課程で学ぶ国語を基礎としながらも知識・読解力・思考力・表現力全般にわたる、より多様でより奥深い人間的な学力である。それらの資質を的確に判断して学生を受け入れるため、学力試験のない指定校推薦入試を含めて多

様な入試経路を用意する。また社会人特別入試や外国人留学生特別入試も実施し、日本文学科で学ぶのにふさわしい者に広く門戸を開放する。

5.1 適切な定員を設定し、学生を受け入れるとともに、在籍学生数を収容定員に基づき適正に管理しているか。

①定員の超過・未充足に対し適切に対応していますか。

☒ はい ☐ いいえ

(～200 字程度まで) ※入学定員・収容定員の充足状況をどのように捉えているかを記入。

2012 年度の入学生は定員の 130% と大幅に超過したが、以後は、2013 年度・2014 年度ともに 97%、2015 年度は 92% と推移し、5 年平均では入学定員充足率 1.04 倍となっており、適切な入学者数を受け入れてきている。

また、収容定員超過率も、2012 年度は 1.21 倍であったが、2013 年度は 1.18 倍、2014 年度には 1.15 倍と、2015 年度には 1.1 倍と推移し、5 年平均では 1.1 倍となり、在籍学生数も適正化している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・法政大学大学評価支援システム 大学便覧リポート 28 入学定員超過率
- ・法政大学大学評価支援システム 大学便覧リポート 29 収容定員超過率

定員充足率 (2011～2015 年度)

(各年度 5 月 1 日現在)

種別\年度	2011	2012	2013	2014	2015	5 年平均
入学定員	170 名	170 名	187 名	187 名	187 名	
入学者数	176 名	221 名	182 名	181 名	172 名	
入学定員充足率	1.04	1.30	0.97	0.97	0.92	1.04
収容定員	680 名	680 名	697 名	714 名	731 名	
在籍学生数	796 名	824 名	820 名	819 名	801 名	
収容定員充足率	1.17	1.21	1.18	1.15	1.10	1.10

5.2 学生募集および入学者選抜は、学生の受け入れ方針に基づき、公正かつ適切に実施されているかについて、定期的に検証を行っているか。

①学生募集および入学者選抜の結果について検証していますか。

A ☒ B ☐ C

【検証体制および検証方法】※箇条書きで記入。

- ・それぞれの入試結果が判明したあとに学科会議で報告を行い、その都度審議・検討している。
- ・年度ごとの入試体制、推薦入試の在り方等についても志願者・指定校等の動向に注目し、入試小委員会および学科会議で定期的に検証を行っている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・日本文学科会議資料

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 現状の課題・今後の対応等 (任意項目)

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

- ・2016 年度入学者数は、2012 年度入学者数を上回ったため、今後数カ年にわたり、入学定員充足率を注視していく必要がある。

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照

6 学生支援

【2016 年 5 月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

6.1 学生への修学支援は適切に行われているか。	
①卒業・卒業保留・留年者および休・退学者の状況を学部（学科）単位で把握していますか。	☒ はい ☐ いいえ
【データの把握主体・把握方法・データの種類の種類等】 ※箇条書きで記入。 ・卒業・卒業保留・留年者および休・退学者の数については、教授会回覧・配布資料によって、学科として実績を把握している。 ・学科会議で、成績不振学生の状況についての報告を行ったり、GPAの確認を行ったりしている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・文学部教授会資料	
②成績が不振な学生に対し適切に対応していますか。	A ☒ B ☐ C
【成績不振学生への対応体制および対応内容】 ※箇条書きで記入。 ・1年次は「大学での国語力」「ゼミナール入門」、2年次以降は「ゼミナール」および「卒業論文」の担当教員が一人一人の学生に目を配り、細かく指導する場となっているため、成績が不振な学生に対しては担当教員が個別に対応している。 ・特に成績が不振な学生や不登校の学生については、学科会議で情報を共有し、学科として対応を協議する場合もある。 ・留学生に関しては、各授業担当教員と学科内留学生サポート小委員会が中心となり、対応する場合もある。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・日本文学科会議資料	
③学部（学科）として外国人留学生の修学支援について適切に対応していますか。	A ☒ B ☐ C
（～400字程度まで）※外国人留学生の修学支援に関する取り組みの概要を記入。 2014年度以降、学科内に独自に設置した留学生サポート小委員会が中心になり、修学支援をしている。 1年次では「大学での国語力」「ゼミナール入門」クラスの担当教員、2年次以降はゼミ担当教員と小委員会が連携し、留学生の修学状況を把握している。問題が認められる場合には、学科会議で報告がなされ、学科として対応を行う。2015年度からは、1年次生に対して、小委員会が履修相談会を開催し、履修上や生活上の悩みに対応している。 また、学科会議で定期的に留学生のGPAを確認し、対応が必要であれば検討を行っている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・留学生サポート小委員会履修相談資料 ・日本文学科会議資料	

（2）特記事項

※上記点検・評価項目における2015年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・1年次留学生に対して、履修相談会を開催した。	6.1③

（3）現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※（1）～（2）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・特になし

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照

7 内部質保証

【2016年5月時点の点検・評価】

（1）点検・評価項目における現状

7.1 内部質保証システム（質保証委員会）を適切に機能させているか。	
①質保証委員会は適切に活動していますか。	☒ はい ☐ いいえ
【2015年度質保証委員会の構成、開催日、議題等】 ※箇条書きで記入。 ・「文学部全体」のシート参照。 ・学科の内部質保証については、学科主任を中心に、学科会議とメールによる情報共有を組み合わせ運営している。学	

科の目的および教育目標を具現化するため、教員組織を効果的に機能させて適切な現状分析を行い、その現状分析に基づいて教員それぞれの主体的な関与が期待できる方針・到達目標を設定する。目標が達成された後も、さらなる改善のため検証作業を行っている。

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照

【大学評価総評】

※文学部全体の大学評価総評を参照

文学部英文学科

I 2012 年度認証評価 努力課題に対する改善計画（報告）書

該当なし

II 2015 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2015 年度大学評価結果総評】

文学部では、その教育理念やカリキュラムの概要が学部パンフレットや HP などに明確に示されている。また『文学部 2016 GUIDE BOOK』の内容も（専任教員の顔写真を掲載するなど親しみやすい作りになっていることも含めて）簡潔かつ分かりやすいものになっている。

学科ごとに独自の学問分野や教育方針を掲げながらも、共通して少人数教育を重視しており、学生が主体的に学んでいくことを促進・媒介する仕組みとなっている可能性が高いといえることができる。

このようなきめ細かな指導は、その他の学務（とりわけ日本文学科と史学科と地理学科の場合は通信教育部の仕事）とあいまって、教員個々の負担増につながりうることも懸念される。少人数教育の強みをより一層生かすためにも、教員の負担増を減らす措置・工夫が望まれる。

なお、教授会規程、内規、細則等の整備を指摘された認証評価・努力課題に対する対応が適切になされた結果、具体的な改善点としては、特段に記載することはない。

【2015 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400 字程度まで）

少人数教育を教員の負担増なしに実現できる措置・工夫を考えていく。

III 自己点検・評価

1 教員・教員組織

【2016 年 5 月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

【教員像および教員組織の編制方針】（2011 年度自己点検・評価報告書より）

本学科の教員は、学科の理念・目的を実現するため、またさまざまな能力やバックグラウンドを持つ学生の教育指導に対応するため、さらには後の項目で述べる教育目標ならびにディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーを踏まえて研究・教育に取り組めるよう、専門分野における高度な知識や研究能力、研究実績、教育技能を有することはもちろんのこと、学生の全人的な成長にも配慮できる人間性と高いコミュニケーション能力を持つことが求められる。

教員組織としては、社会や時代の変化によって変わっていく学生の教育・研究ニーズに対応できるように、幅広い専門がカバーできるような教員集団であることが望ましい。しかしながら、そうした現在の教育ニーズは必ずしも専任教員だけでカバーできるものではない。したがって、高い専門性を備えた専任教員の保持とともに、学内・学外での研究・教育者

の人材確保のためのネットワークを有する教員組織をつねに目指している。							
1.1 学部等として求める教員像および教員組織の編制方針を明確にしているか。							
①採用・昇格の基準等において、法令に定める教員の資格要件等を踏まえて、教員に求める能力・資質等を明らかにしていますか。	☒ はい ☐ いいえ						
【根拠資料】 ※教員に求める能力・資質等を明らかにしている規程・内規等の名称を記入。 ・「英文学科 人事に関する内規」							
②組織的な教育を実施する上において必要な役割分担、責任の所在を明確にしていますか。	☒ はい ☐ いいえ						
【学部執行部の構成、学部内の基幹委員会の名称・役割、責任体制】 ※箇条書きで記入。 ・学部執行部の構成については、学部全体のシートを参照する。 ・英文学科の専任教員は交代で学科主任を担当し、学科全体の教育体制を認識・把握している。 ・英文学科主任は定期的に学科会議を召集・開催し、学科の運営について適宜審議を行っている。 ・英文学科会議では必要な審議、承認、報告を行い、学科の教育全体を専任教員全員が共有している。 ・英文学科主任は文学部学科主任会議・文学部教学改革委員会に出席し、学部・学科の審議報告案件を学科に持ち帰り、情報を共有している。 ・英文学科では、派遣留学制度（SA）や英文学科生で構成される組織（LINKS）の指導などの個別の役割ごとに担当者を決めており、それらの多様な委員を交代で務めることによって、個別の職掌を理解・遂行すると同時に、全体的・俯瞰的視野も得られるようにしている。							
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・「文学部教授会規程内規」、「文学部各種委員一覧」							
③教員組織の編制において大学院教育との連携を考慮していますか。	☒ はい ☐ いいえ						
（～400 字程度まで） ※教員組織の編制において大学院教育との連携にあたりどのようなことが考慮されているか概要を記入。 英文学科・英文学専攻の専任教員人事は、別個ではなく協働でおこない、採用人事の際には将来の大学院担当を考慮する。また、大学院の授業担当専任教員は英文学科専任教員から選ばれる。現在、14 名の専任教員全員が学部教育に携わり、そのうち 11 名が大学院英文学専攻の教員として授業ならびに専攻の運営に携わっており、学部教育と大学院教育の連繋が十分に図られている。それに加えて、専任教員が担当する大学院科目を学部の 3・4 年生も履修できるようにしており、大学院入学前から学部生が大学院の授業を体験できるようになっている。							
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『文学部履修の手引き』							
1.2 教育課程に相応しい教員組織を整備しているか。							
①学部（学科）のカリキュラムにふさわしい教員組織を備えていますか。	☒ はい ☐ いいえ						
（～400 字程度まで） ※教員像および教員組織の編制方針、カリキュラムとの整合性等の観点から教員組織の概要を記入。 2016 年 4 月 1 日現在、専任教員 14 名のうち、専門科目を中心に担当する教員 9 名、基礎科目を中心に担当する教員 5 名である。また分野的には、英米文学 7 名、英語学・言語学 5 名、ドイツ文学・比較文学 2 名という配分である。これらの専任教員により、基礎科目・総合科目の英語や英語圏の文化・社会の科目およびドイツ語やドイツ語圏の文化・社会の科目の担当、また専門科目に関しては、幅広い分野の主要講義科目のみならず、1 年次の「基礎ゼミ」や 2 年次の「2 年次演習」に加え、3・4 年次の演習や必修科目である卒論の指導も含め、学科の掲げる諸分野の担当のすべてを網羅している。							
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『文学部講義概要（シラバス）』、『文学部履修の手引き』							
2015 年度専任教員数一覧 （2015 年 5 月 1 日現在）							
学部・学科	教授	准教授	講師	助教	合計	設置基準上 必要専任教 員数	うち教授数
英文	10	3	0	0	13	7	4
専任教員 1 人あたりの学生数（2015 年 5 月 1 日現在）：41.9 人							
②特定の範囲の年齢に著しく偏らないように配慮していますか。	☒ はい ☐ いいえ						
【特記事項】 （～200 字程度まで） ※ない場合は「特になし」と記入。 2016 年度より 30 代新任教員を新規に採用し、年齢構成のバランスがさらに改善されている。							

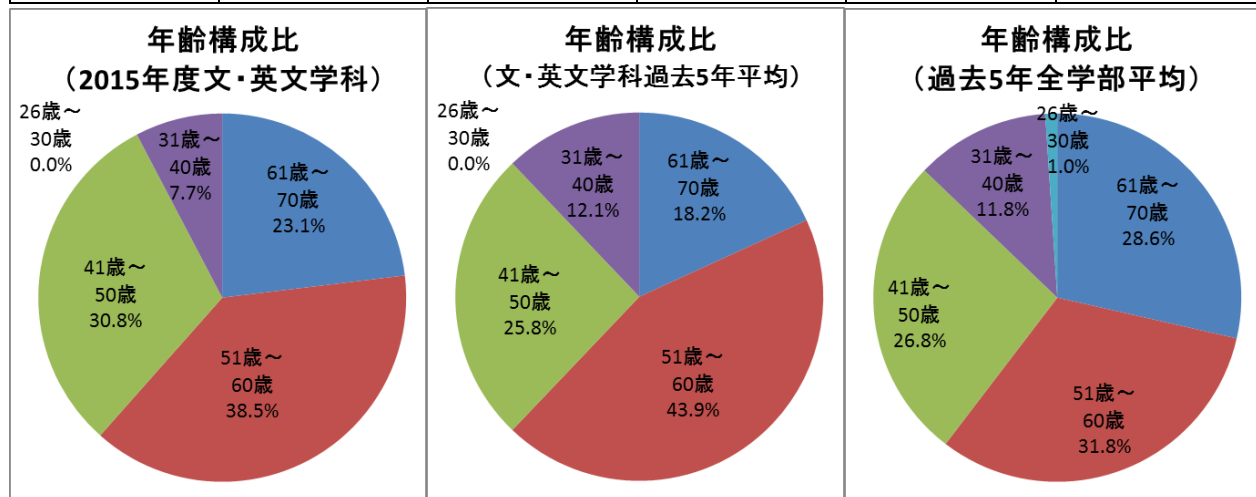
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・『文学部講義概要（シラバス）』

年齢構成一覧

(2015年5月1日現在)

年度\年齢	26～30歳	31～40歳	41～50歳	51～60歳	61～70歳
2015	0人	1人	4人	5人	3人
	0.0%	7.7%	30.8%	38.5%	23.1%



1.3 教員の募集・任免・昇格は適切に行われているか。

①各種規程は整備されていますか。

☒ はい ☐ いいえ

【根拠資料】※教員の募集・任免・昇格に関する規程・内規等の名称を箇条書きで記入。

・「文学部教授会規程」「文学部教授会規程内規」「英文学科 人事に関する内規」

②規程の運用は適切に行われていますか。

☒ はい ☐ いいえ

【募集・任免・昇格のプロセス】※箇条書きで記入。「上記根拠資料の通り」と記載し、内規等（非公開）を添付することでも可。

- ・教員の募集は公募を原則としている。
- ・公募文書の内容や伝達媒体は学科会議で承認を必要とし、また人事委員会、教授会でも報告、承認を得ている。
- ・選考人事に際しては、専任教員から構成される人事選考委員会を設け、規定・内規に沿って人事選考を進めている。
- ・審査においては、最終選考に際して模擬授業を課し、それとともに面接と業績審査を厳正に行ない、研究者および教育者としての候補者の資質を考慮している。模擬授業と面接では学科の専任教員全員が参加する仕組みを作り上げている。
- ・昇格に関しては、学科会議にて内規に照らして有資格者を推薦し、人事委員会で検討されたのち、教授会で投票によって承認される。

1.4 教員の資質向上を図るための方策を講じているか。

①学部（学科）内のFD活動は適切に行なわれていますか。

☒ A ☐ B ☐ C

【FD活動を行うための体制】※箇条書きで記入。

- ・教育活動の面で教育技術、学生とのコミュニケーション技術を上げることについては、教育開発支援機構FD推進センター開催の研修会・セミナー等が主催するセミナーや講演会があり、教員が各自参加し、効果を上げている。
- ・英文学専攻・英文学科独自のFD活動として、適宜、学期後に、文学系と言語学系とに分かれてFD研修会を開催している。

【2015年度のFD活動の実績（開催日、場所、テーマ、内容（概要）、参加人数等）】※箇条書きで記入。

- ・2015年度より英文学科FD相互研修会を開催している（7月22日、80年館6階資料室、今学期授業の反省、12名）。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・英文学科FD相互研修会プログラム

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における2015年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 現状の課題・今後の対応等 (任意項目)

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・特になし

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照

2 教育課程・教育内容

【2016年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

【教育課程の編成・実施方針】	
1年次においては、基礎ゼミで導入教育を行ない、同時に概説科目を配置してさまざまな分野への導入を行なう。2年次においては、少数教育としての2年次演習、SpeakingやWritingなどの実践的な科目とともに、専門科目を配置し学生各自の興味やテーマをかき立てるようにしている。そして3年次では少人数制のゼミを配置し、併設されている専門科目に合わせて、専門的な知識が深められるよう工夫している。そして4年次においては、担当教員の手厚い指導により、学生各自の選んだ研究テーマを卒業論文としてまとめさせている。いっぽう、4年間の学生生活を通して、海外の提携大学への短期・中期の留学制度も設定して、幅広い英語力の獲得や文化交流をこころがけている。	
2.1 教育課程の編成・実施方針に基づき、授業科目を適切に開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	
①学生の能力育成の観点からカリキュラムの順次性・体系性を確保していますか。	A B C
(～400字程度まで) ※カリキュラム上、どのように学生の順次的・体系的な履修への配慮が行われているか概要を記入。 高校から大学へ学生が円滑に移行するために必要な初年次教育を、「基礎ゼミ」として1年次春学期に開設し、原則として全員が履修するように指導している。また、1年次から履修可能な英米文学、英語学、言語学の基礎的な講義科目を経て、2年次より履修可能な専門的内容を持つ講義科目へと順次性を持った科目配置がなされている。同時に、英文学科生にとって不可欠である英語力を集中的に育成するために、2年次より実践的な英語表現演習科目を複数履修できるようにしている。また、2年次春学期には、3年次からのゼミ所属への導入科目として「2年次演習」を開設し、原則として全員が履修するように指導している。3年次からは学生をゼミに所属させ、英米文学、言語学、英語学、英語教育学等の各分野における学問の専門性を高めながら学生の能力育成を図り、4年次に必須の卒業論文執筆に向けた学生指導がなされている。また、2015年度には学科のカリキュラムマップ・カリキュラムツリーを作製し、体系的なカリキュラム編成の実現に向けて改善を行なった。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『文学部履修の手引き』、「カリキュラムマップ」、「カリキュラムツリー」、「ナンバリングに関する各種資料」	
②幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程が編成されているか。	A B C
(～400字程度まで) ※カリキュラム上、どのように教養教育等が提供されているか概要を記入。 英文学科では、英米文学、英語学、言語学、英語教育学という異なる諸分野における科目が設置されている。「基礎ゼミ」では、大学生としての学習の基礎的な技能と教養が養成されるように工夫がなされ、1・2年次で学ぶ専門科目では、リベラル・アーツ科目とも連動しつつ、広い教養に加えて学問の専門性が加味されるように、互いに相乗的な効果が期待されている。さらに英文学科では、学科認定した総合科目の一部を学部専門科目の選択科目として、他の総合科目を自由科目として卒業所要単位に入れている。また、学生は、文学を学ぶことによって自分や他者、世界についてのより深い理解を養うことができ、また、英語その他の言語を科学的な手法で分析する英語学、言語学を学ぶことによって論理的思考力が培われる。以上、英文学科では、異なる諸分野の学問に接することによって、高い倫理性と論理性を備えた総合的な判断力を持ち、かつ深い教養と豊かな人間性を備えた人間が育成される教育課程が編成されている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『市ヶ谷基礎科目・総合科目講義概要（シラバス）』、『文学部講義概要（シラバス）』	
2.2 教育課程の編成・実施方針に基づき、各課程に相応しい教育内容を提供しているか。	

①学生の能力育成のための教育課程・教育内容が適切に提供されていますか。	A ☒ B C
(～400 字程度まで) ※学生に提供されている教育課程・教育内容の概要を記入。 英文学科で開設している英米文学、英語学、言語学の授業科目は、「英語という言語が基礎にある学科」という特徴を活かすために、英米文学から言語科学の領域までが学べるように工夫されている。教育課程の編成・実施方針に基づいて、現有スタッフと現コマ数の中で各専門分野に最大限に相応しい教育内容を提供している。 英文学科派遣留学制度 (SA) を設けて国際化に対応し、また、英米文学、英語学、言語学、英語教育学のいずれの分野でも、「英語」を使用し、あるいはデータ分析を行うことで、国際社会に貢献しうる能力を持った人材を育成している。 【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『文学部履修の手引き』、『文学部講義概要 (シラバス)』、『文学部英文学科 Study Abroad Program』(学生への配布パンフレット)	
②初年次教育、キャリア教育は適切に提供されていますか。	A ☒ B C
(～400 字程度まで) ※学生に提供されている初年次教育、キャリア教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。 初年次の「基礎ゼミ」は、高校教育と大学教育を接続する役割を担っている。そのために 1 年次の春学期に配置され、複数の専任教員が担当して、大学における学習の仕方の基本事項を身につけるための導入役を果たしている。また、英米文学、英語学、言語学、英語教育学のいずれの分野でも、国際社会に貢献しうる能力を持った人材の育成という、キャリア教育を視野に入れた教育を展開している。文学部共通科目「文学部生のキャリア形成」には、英文学科の卒業生も講師として招き、また、2 年次生を対象としたゼミ紹介の機会には、卒業生に大学のゼミと現在の仕事とを関連付けた講演を依頼するなどして、在校生に対して実践的に役立つキャリア教育を行っている。 【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『文学部履修の手引き』、『共通科目各種資料』(共通科目委員会)	
③学生の国際性を涵養するための教育内容は適切に提供されていますか。	☒ A B C
(～400 字程度まで) ※学生に提供されている国際性を涵養するための教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。 英文学科の科目は、そもそも国際性を涵養する科目がほとんどであるが、「比較文化論」「比較文学」や 2016 年度からの新設科目として“Comparative Culture”といった幅広い視点を養う科目を学生に提供している。また、英文学科では、国際化への対応として独自の派遣留学制度 (SA) を設け、1 年次からの参加を積極的に勧めている。この SA 制度には、米国フロンツボン大学 (長期)、アイルランド・ダブリン大学 (夏季短期、長期) というプログラムがある。毎年開かれるプログラム終了後の SA 報告会には、SA 参加学生のみならず、多くの学生が参加し、学科全体にも大きな成果をもたらしている。留学先で得た単位は、審議を経た上で、SA 認定科目として単位認定される。 【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『文学部英文学科 Study Abroad Program』(学生への配布パンフレット)	

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 現状の課題・今後の対応等 (必須項目)

※ (1) ～ (2) の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。

・経済的負担のより少ない地域 (例：アジア圏など) への SA プログラムの展開の可能性を検討する準備を始める。 ・SA への関心を維持するための広報活動を続ける。

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照

3 教育方法

【2016 年 5 月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

3.1 能力育成の観点から教育方法および学習指導は適切か。		
①学生の履修指導を適切に行っていますか。	☒ A	☐ B ☐ C
【履修指導の体制および方法】※箇条書きで記入。 ・全授業科目について、授業のテーマ・到達目標・授業概要と方法・授業計画等を『文学部講義概要（シラバス）』において公開している。 ・4月に「新入生オリエンテーション」「在学生ガイダンス」において全学生を対象に履修指導を実施している。 ・5月に全専任教員が手分けして1年生全員を対象にしたグループごとの「新入生面談」を行ない、履修状況を把握し、必要に応じて個別に追跡調査を行っている。 ・11月～12月に、1年生を対象に「2年次演習」説明会、2年生を対象にゼミ制度説明会、3年生を対象に卒論説明会を実施するなど、各学年に適切な履修指導の説明会を実施している。 ・個々の学生の履修上の問題については、授業（講義、ゼミ）での状況を学科会議で話し合い、情報を共有し、学科で対応している。 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『文学部講義概要（シラバス）』、「新入生オリエンテーション」「在学生ガイダンス」配布資料		
②学生の学習指導を適切に行っていますか。	A	☒ B ☐ C
(～400字程度まで) ※取り組み概要を記入。 文学系、言語系ともに、教育方法および学習指導は適切に行なわれている。言語系、特に実験系の研究分野については、実験室や設備が整備されていないという施設面の事情による不十分さがあるが、講義科目と実践科目とのバランスはうまく取れている。 1年次の「基礎ゼミ」、2年次の「2年次演習」、3年次からの選抜制度に基づくゼミ所属制度により、少人数教育が確立しており、4年次の卒論指導と合わせて、教員と学生との距離を近づけることにより個々の学生に適合した学習指導が行われている。また、剽窃等の研究倫理についての指導も1年次より適宜、継続的に行っている。 教員のオフィスアワーを積極的に活用する学生が多く、加えて合宿も盛んに行われている。これらを通じて、専任教員が個々の学生の学習状況を丁寧に把握することが可能になっているため、講義においても概ね双方向型授業が実現している。 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『文学部履修の手引き』、『文学部講義概要（シラバス）』、「剽窃について」（ガイダンス配布資料）		
③学生の学習時間（予習・復習）を確保するための方策を行なっていますか。	A	☒ B ☐ C
(～400字程度まで) ※取り組み概要を記入。 時間外に行うべき学習活動（準備学習等）は、シラバスに具体的に明示している。授業支援システムなどを利用して、受講者に授業の資料を公開している。また、リアクション・ペーパーを活用して学生の理解度や反応を把握し、次の授業の内容に反映させている。また、毎回の授業に必要な事前学習を予告する、授業内発表を担当させる、理解度チェックのための小テストを行う等により、学生の予習・復習を動機づけている。ゼミによっては、グループ発表の機会を設けており、学生がグループごとに自主的に学習する契機となっている。 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『文学部講義概要（シラバス）』		
④教育上の目的を達成するため、新たな授業形態の導入に取り組んでいますか。	☒ A	☐ B ☐ C
【具体的な科目名および授業形態・内容等】※箇条書きで記入（取組例：PBL、アクティブラーニング、オンデマンド授業等）。 ・「英語表現演習（speaking）」「英語表現演習（writing）」のうち6つをクラス指定の授業としてクラス指定制度の徹底を図り、クラス指定授業の履修を希望する学生は、全員受講できるように保証している。 ・上記クラス指定の授業は少人数授業が基本であり、1人1人が意見表明できる環境作りによってアクティブラーニングが実践されている。また、「英語表現演習（speaking)(writing)」以外の演習科目（「英米文学演習」「英語学演習」「言語学演習」）においてもアクティブラーニングの取り組みが行われている。 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし		
3.2 シラバスに基づいて授業が展開されているか。		

①シラバスが適切に作成されているかの検証を行っていますか。	☒ はい ☐ いいえ
【検証体制および方法】 ※箇条書きで記入（取組例：執行部（〇〇委員会）による全シラバスチェック等）。 ・学科授業科目の全シラバスを専任教員全員が割当制でチェックし、第3者によるチェック体制を整えている。 ・シラバスチェックしたものを教員にフィードバックし、修正期間を設定した上で、さらに修正を加える体制を整えている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
②授業がシラバスに沿って行われているかの検証を行っていますか。	☒ はい ☐ いいえ
【検証体制および方法】 ※箇条書きで記入（取組例：後シラバスの作成、相互授業参観、アンケート等）。 ・学期末に実施される全学の「学生による授業改善アンケート」の確認項目により検証されている。 ・学生からの授業改善アンケートを学期末に限らずに任意で実施するシステム（期首・期中アンケート）により、学期途中でも随時、検証されている。 ・相互授業参観の実施によりつねに検証を行うことが可能な体制を維持している。 ・シラバスの授業計画は、各教員が授業の進み具合やリアクションペーパーなどに基づき、授業後に調整することもある。学生の理解度も把握しながらの授業展開が望ましいと考えている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
3.3 成績評価と単位認定は適切に行われているか。	
①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。	A ☒ B ☐ C
【確認体制および方法】 ※箇条書きで記入。 ・各科目の成績評価基準をシラバスに明記している。 ・シラバス記載項目に基づき、各教員が適切に成績評価を行っている。 ・D、E評価についてはガイダンスにおいて、履修しないことを決めた科目の取り消しの仕方を説明している。 ・単位認定の意味については、ガイダンスにおいて、また各教員の授業において説明している。 ・評価結果についての問い合わせ制度について、学生に説明している。 ・成績評価に訂正の必要が確認された場合には、調査の上、教授会での報告・承認を経て、訂正がなされる。 ・卒業論文の成績評価については、口頭試問を実施し、適切な評価を行なっている。 ・オムニバス形式の授業においては、担当者間で協議し、公正な評価を下している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
②他大学等における既修得単位の認定を適切な学部（学科）内基準を設けて実施していますか。	☒ はい ☐ いいえ
（～400字程度まで）※取り組み概要を記入。 転編入者の既修得の単位認定、派遣留学、認定留学、英文学科派遣留学制度（SA）参加者の単位認定制度が確立しており、学科会議での審議後、教授会での承認手続きを行なっている。他大学の単位認定については、学科会議でシラバスを慎重に検討した上で、教授会に提案している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
③厳格な成績評価を行うための方策を行っていますか。	☒ A ☐ B ☐ C
（～400字程度まで）※取り組み概要を記入。 シラバスの成績評価基準欄に、試験、課題などの評価率を具体的な割合（％）で予め学生に明示し、透明性を保持しながら厳格に成績評価する方策をとっている。卒業論文の評価についても、必要に応じて複数の教員で口頭試問する制度を整備して適正におこなっている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
3.4 教育成果について定期的な検証を行い、その結果を教育課程や教育内容・方法の改善に結びつけているか。	
①教育成果の検証を学部（学科）ごとに定期的に行っていますか。	A ☒ B ☐ C
【検証体制および方法】 ※箇条書きで記入。 ・時間割編成時期に、非常勤講師が適切な教育成果を上げているかどうかを学科会議にて検討した上で、次年度の担当を	

決定している。 ・同一科目を複数の担当で受け持っている場合は（例：基礎ゼミ、二次演習など）、相互に教育成果を確認し、問題があれば学科会議にて検討している。 ・4年間の教育成果の可視化として卒業論文の提出を必修化しており、教員はその評価を通じて教育成果の定期的な検証を行なっている。 ・優れた卒業論文は、英文学科生で構成される団体「Links」の発行する英文学科誌『SMILE』に掲載し、学科における教育成果を学生と教員間で常に共有し、また全教員によるさらなる教育内容の改善に役立てている。		
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・英文学科誌『SMILE』		
②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。		A B C
【利用方法】※箇条書きで記入。 ・原則として全科目について、全学の「学生による授業改善アンケート」と教員独自の授業アンケート（面談による聞き取り調査を含む）を実施している。 ・アンケート結果を教員に適宜フィードバックし、翌年度のシラバスに反映させて授業の改善につなげている。 ・シラバスの「学生による授業改善アンケートからの気づき」欄の記入により問題点の把握、授業改善の具体策の提示を行なっている。		
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし		

（2）特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

（3）現状の課題・今後の対応等（必須項目）

※（1）～（2）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。

・現在のレベルを維持するための方策を考案する。

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照

4 成果

【2016 年 5 月時点の点検・評価】

（1）点検・評価項目における現状

【学位授与方針】 以下の能力・知識を身につけた者に、学士の学位を授与する方針である。 [1] 論理的な日本語力・英語力とそれに基づく高度なコミュニケーション能力 [2] 批判的・論理的思考力とそれに基づく課題発見力・課題解決力 [3] 自らの文化や言語を、グローバルな文脈の中で相対化・客観化して捉える能力 [4] 英米文学・文化研究または科学的な英語学・言語学研究の基礎的な知識 [5] 1つの課題の解決のために、様々な知識を有機的に結びつける能力		
4.1 教育目標に沿った成果が上がっているか。		
①学生の学習成果を測定していますか。		A B C
（～400 字程度まで）※取り組みの概要を記入（習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用状況等）。 学生の学習成果は一律に数値化することはできないが、シラバスに明記した「成績評価基準」に基づいて適切に評価を行なっている。英文学科では、ゼミにおいて観察される専門分野の知識、ディスカッション能力・プレゼンテーション能力の向上や、卒業論文に表れる専門分野の知識、問題発見能力、情報収集能力、批判的読解力、論理的思考力、文章作成能力を判断指標として用いているが、とりわけ、学習成果が最大に現われる「卒業論文」については、ゼミでの教育・指		

導、原則として 11 月段階における予備版の提出、最終的な論文の完成、口述試験による学習成果の確認と評価という綿密な個人指導のプロセスを経て、その学習成果が詳細に測定されている。現段階では、教育目標に沿った成果が上がっていると考えられる。また、学生の学習意欲の向上のために GPA 値がその動機づけとなるような配慮をしている。

さまざまな領域に就職、進学する卒業生が寄せる言葉や「卒業生アンケート」からも、学科のカリキュラムに対する満足度がうかがえる。優秀な卒業論文は、学科の学生団体が発行する学内誌『SMILE』に掲載されており、学科の教育水準を示している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・英文学科誌『SMILE』

②成績分布、進級などの状況を学部（学科）単位で把握していますか。

☒はい ☐いいえ

【データの把握主体・把握方法・データの種類の等】※箇条書きで記入。

- ・成績分布については学部で把握している。
- ・試験放棄については、「春学期で所要単位を満たしたがゆえの秋学期の試験放棄」と「単位が不足している状況での秋学期の試験放棄」との区別等を含めて、各教員が科目ごとに把握し、問題があれば学科会議において情報を共有し対策を検討している。
- ・学生の進級状況については学部・学科で把握している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・文学部事務作成進級状況資料、教員による報告レポート

③学習成果を可視化していますか。

A ☒B ☐C

【学習成果可視化の取り組み】※取り組みを箇条書きで記入（取組例：専門演習における論文集や報告書の作成、統一テストの実施、学生ポートフォリオ等）。

- ・必修科目としての卒業論文が最も端的に可視化された学習成果の集大成である。
- ・卒業論文の指導過程で原則として 11 月に卒業論文予備版が提出される。
- ・各分野の卒業論文のうち優秀論文が年度末発行の学内誌『SMILE』に掲載される。
- ・学科生の団体 LINKS においてゼミでの学習状況発表等の学生による発表が行われる。
- ・学科 SA 報告会において海外留学の成果発表が行われる。
- ・専門の演習科目において課題発表をしている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・英文学科誌『SMILE』

4.2 学位授与（卒業・修了認定）は適切に行われているか。

①学生の就職・進学状況を学部（学科）単位で把握していますか。

☒はい ☐いいえ

【データの把握主体・把握方法、データの種類の等】※箇条書きで記入。

- ・学生の就職状況（実数・業種）などについては学部単位および学科単位で把握しており、毎年、学科会議において業種ごとの実数・経年的変化等の詳細について情報を共有している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・文学部教授会資料、就職センター作成資料

（2）特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

（3）現状の課題・今後の対応等（必須項目）

※（1）～（2）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。

- ・現在、ほぼ理想的な状況だが、現状を維持しつつ新たに学習の成果を発表できる場を考案したい。

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照

5 学生の受け入れ

【2016 年 5 月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

【学生の受け入れ方針】 学位授与の方針についての目的や目標にそって、一つの固定した視点にとらわれず、様々な視点から物事を学ぼうという意欲と能力のある学生を求めている。とりわけ、英語への関心、文学作品や演劇への興味をもつ学生、または外国語教育や言語理論の研究に必要な科学的思考を養う意欲のある学生を受け入れたいと考えている。学生募集の形態は、入学センター試験入試、二種類の一般試験入試、付属校推薦入試、指定校推薦入試と多岐にわたる方法がとられ、それによって、一定の能力を持ちつつも多様な個性の学生が入学することを目指す。						
5.1 適切な定員を設定し、学生を受け入れるとともに、在籍学生数を収容定員に基づき適正に管理しているか。						
①定員の超過・未充足に対し適切に対応していますか。						はい ☒ いいえ ☐
(～200 字程度まで) ※入学定員・収容定員の充足状況をどのように捉えているかを記入。 在籍学生数の定員の超過・未充足に対しては、適切に把握し、対応している。事実上の必修科目である演習科目では、学生数に応じて適切なクラス数を準備している。大幅に定員超過した年度の場合は、増コマ要求をして適切な数の授業運営を心がけている。						
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし						
定員充足率 (2011～2015 年度) (各年度 5 月 1 日現在)						
種別\年度	2011	2012	2013	2014	2015	5 年平均
入学定員	115 名	115 名	126 名	126 名	126 名	
入学者数	124 名	119 名	117 名	143 名	132 名	
入学定員充足率	1.08	1.03	0.93	1.13	1.05	1.04
収容定員	460 名	460 名	471 名	482 名	493 名	
在籍学生数	515 名	510 名	515 名	538 名	545 名	
収容定員充足率	1.12	1.11	1.09	1.12	1.11	1.11
5.2 学生募集および入学者選抜は、学生の受け入れ方針に基づき、公正かつ適切に実施されているかについて、定期的に検証を行っているか。						
①学生募集および入学者選抜の結果について検証していますか。						A ☒ B ☐ C ☐
【検証体制および検証方法】 ※箇条書きで記入。 ・学生募集は大学全体で行なっている。 ・入学者選抜の結果については学科会議で情報を共有している。 ・入学試験の種類とその定員配分については、学科会議で協議の上で決定している。 ・入試経路別の学生の成績については、学科会議で情報を共有し、検討している。 ・新しく導入した「英文学科グローバル体験公募推薦」制度の入学した学生の学習状況をフォローし、学科会議で報告し、全員で情報を共有している。						
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし						

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 現状の課題・今後の対応等 (任意項目)

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・2016 年度の英文学科への入学者数は 20 名の定員超過を起こしているため、次年度以降、学年進行とともに、増コマ要

求等により、演習科目で小人数教育が適切に行われるように対応する必要がある。

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照

6 学生支援

【2016 年 5 月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

6.1 学生への修学支援は適切に行われているか。	
①卒業・卒業保留・留年者および休・退学者の状況を学部（学科）単位で把握していますか。	☒ はい ☐ いいえ
【データの把握主体・把握方法・データの種類の等】 ※箇条書きで記入。 ・卒業については、卒業に関わる単位数を学科会議において確認し、卒業判定は教授会において所定の手続きを経た上で適切になされている。 ・退学、留級については、学科会議・学部教授会でその実態を正確に把握し、対策が必要な場合には学科会議で適切に検討がなされている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・文学部教授会資料	
②成績が不振な学生に対し適切に対応していますか。	☐ A ☒ B ☐ C
【成績不振学生への対応体制および対応内容】 ※箇条書きで記入。 ・「新入生オリエンテーション」「在学生ガイダンス」において、英文学科作成の文書「成績不振者について」を配布し、学科学生に対して成績が不振の場合には保証人に通知の上、面談を行なう旨の説明をしている。 ・実質的な全員履修科目 [1 年次：「基礎ゼミ」、2 年次：「2 年次演習」、3・4 年次「所属ゼミ」] において、各教員が担当学生の学習態度、意欲、成績を 4 年間にわたって継続して把握、管理できる体制を整えており、学科会議において情報を共有し対策を検討している。 ・すべての科目にまたがって欠席などが多い学生に対しては、学科主任、ゼミ担当教員等が個別に呼び出し、面談するなど状況に応じた対応を実施し、学科会議においてその情報を共有し、改善策などを検討している。場合によっては、保護者・保証人との話し合い、学生相談室との連携も図っている。 ・2015 年度から成績が不振な学生に対して大学が全体として行う学修指導制度が導入されている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・「成績不振者について」（新入生オリエンテーション、在学生ガイダンス配布資料）	
③学部（学科）として外国人留学生の修学支援について適切に対応していますか。	A ☒ B ☐ C
（～400 字程度まで）※外国人留学生の修学支援に関する取り組みの概要を記入。 留学生については、各授業の担当者が把握して、勉学上、または心理上の問題については、国際交流センター国際交流課や学生相談室などを紹介している。また、大学全体の留学生受け入れ体制についても説明している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※（１）～（２）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・2015 年度から開始された成績不振者への対応をより向上させる。

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照

7 内部質保証

【2016年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

7.1 内部質保証システム（質保証委員会）を適切に機能させているか。

①質保証委員会は適切に活動していますか。

はい いいえ

【2015年度質保証委員会の構成、開催日、議題等】※箇条書きで記入。

- ・「文学部全体」のシート参照。
- ・文学部の質保証委員会と連携しつつ、問題があれば学科会議で審議し、改善策を同委員会および文学部教学改革委員会に諮り、最終的には教授会に提案して承認を得ている。
- ・大学評価委員会からの指摘事項についても、学科内で共有し、学科の努力で改善できる項目については改善策を検討し、それらの事項を質保証委員会に提案している。

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における2015年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照

【大学評価総評】

※文学部全体の大学評価総評を参照

文学部史学科

I 2012年度認証評価 努力課題に対する改善計画（報告）書

該当なし

II 2015年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2015年度大学評価結果総評】（2011年度自己点検・評価報告書より）

文学部では、その教育理念やカリキュラムの概要が学部パンフレットやHPなどに明確に示されている。また『文学部2016 GUIDE BOOK』の内容も（専任教員の顔写真を掲載するなど親しみやすい作りになっていることも含めて）簡潔かつ分かりやすいものになっている。

学科ごとに独自の学問分野や教育方針を掲げながらも、共通して少人数教育を重視しており、学生が主体的に学んでいくことを促進・媒介する仕組みとなっている可能性が高いといえることができる。

このようなきめ細かな指導は、その他の学務（とりわけ日本文学科と史学科と地理学科の場合は通信教育部の仕事）とあいまって、教員個々の負担増につながりうることが懸念される。少人数教育の強みをより一層生かすためにも、教員の負担増を減らす措置・工夫が望まれる。

なお、教授会規程、内規、細則等の整備を指摘された認証評価・努力課題に対する対応が適切になされた結果、具体的な改善点としては、特段に記載することはない。

【2015年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400字程度まで）

理念・目的の作成・周知では、所定の目標を達成している。

教員・教員組織では、全教員が通学・通信・大学院の教育・運営と二つの入試工場の業務に従事し、一部教員はILACや国際日本学の業務も負担している。2015年度に任期付助教1名を採用したが、校務負担に大きな制約があり、直面する危機的状況は解決していない。学位論文のコマ化も含め、過重負担の解決を継続的に法人に求めている。

教学では、大学院科目の履修を学部生にも可能にし、成果を収めている。カリキュラムマップでは、試案を策定した。卒論では、ガイダンスで全学生の意識向上に努め、留年者・卒業保留者の問題では、多様化する事案に対応するため定例・特別学科会議で教員間の情報共有を進めている。また、留学生入試の改善を行い、連年留学生を受け入れている。

内部質保証では、特別学科会議で教学の質向上に努め、シラバスでは第三者チェックの後、問題点を全専任教員で共有している。なお、国際性の涵養を目指し中国の龍門石窟や少林寺と学術・教育協定を締結した。

III 自己点検・評価

1 教員・教員組織

【2016年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

【教員像および教員組織の編制方針】

自らの専門領域で独創的で最先端の研究に従事するのみならず、個々の学生が学科の教育目標を達成できるよう自らの研究に基づき細やかな教育指導を行ない、さらに学科・学部運営や入試業務等の大学全体に関わる校務にも積極的に関わる教員が求められる。教員にはまた、地方自治体との連携や学会活動等を通じて、自らの研究成果を社会に還元する努力も求められよう。

教員組織としては、専任教員の半数を日本史分野、半数を外国史（東洋史・西洋史）分野とし、学科の教育目標の達成が可能となる編制を目指す。また、現状では年齢構成が偏っているが、徐々にバランスの取れた年齢構成になるようにしていく。

1.1 学部等として求める教員像および教員組織の編制方針を明確にしているか。

①採用・昇格の基準等において、法令に定める教員の資格要件等を踏まえて、教員に求める能力・資質等を明らかにしていますか。

☒ はい ☐ いいえ

【根拠資料】※教員に求める能力・資質等を明らかにしている規程・内規等の名称を記入。

- ・「文学部史学科 人事に関する内規」（2011年7月20日学科会議決定、2012年5月16日一部修正、2014年3月12日一部修正）
- ・「文学部史学科 昇格人事に関する申し合わせ事項」（2011年7月20日学科会議決定）

②組織的な教育を実施する上において必要な役割分担、責任の所在を明確にしていますか。

☒ はい ☐ いいえ

【学部執行部の構成、学部内の基幹委員会の名称・役割、責任体制】※箇条書きで記入。

- ・文学部全体のシートを参照。
- ・学科主任は文学部人事委員および教学改革委員も兼ね、両委員会に対し学科からの発議を行うほか、文学部としての検討事項等を学科に持ち帰り、学科会議の審議に付す役割も担う。
- ・学科主任以外の専任教員もすべて学科会議で調整のうえ役割分担、責任の所在を明確にしているが、大学院専攻主任、通教主任、各種委員会委員のほか入試工房長・委員など複数の校務を兼ねなければならない。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

③教員組織の編制において大学院教育との連携を考慮していますか。

☒ はい ☐ いいえ

(～400字程度まで) ※教員組織の編制において大学院教育との連携にあたりどのようなことが考慮されているか概要を記入。

大学院教育に携わることのできない助教1名を除き、専任教員10名はみな学部教育と大学院教育の両方に携わっている。

また、2013年度より大学院人文科学研究科史学専攻の25科目について史学科学部生の履修を可能にし、大学院との連携による高度な専門的教育を史学科学部生が受ける機会を設けた。さらに東洋史の分野で2014年度には8科目、2015年度には1科目が新たに加わったことで、日本史・東洋史・西洋史の全分野で、大学院レベルの高度な教育を受けられる場が設けられた。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・『2016年度文学部履修の手引き』（p.87）

1.2 教育課程に相応しい教員組織を整備しているか。

①学部（学科）のカリキュラムにふさわしい教員組織を備えていますか。

☒ はい ☐ いいえ

(～400字程度まで) ※教員像および教員組織の編制方針、カリキュラムとの整合性等の観点から教員組織の概要を記入。
日本史分野では従来からの5名の教員（考古学・古代史・中世史・近世史・近現代史）と2015年度採用の助教1名（近

世史)の計6名の専任教員を配置し、東洋史分野では2名(文献史料・物質資料各1名)、西洋史分野では3名(前近代史2名・近現代史1名)の専任教員を配置している。

専任教員ではカバーできない科目については兼任教員に担当してもらうが、担当教員については、該当分野の専任教員の推薦に基づき履歴書・業績一覧を学科会議で審査した上で、人事委員会および教授会の承認を得て決定している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・『2016年度文学部講義概要(シラバス)』(pp.454-458)

2015年度専任教員数一覧

(2015年5月1日現在)

学部・学科	教授	准教授	講師	助教	合計	設置基準上 必要専任教 員数	うち教授数
史	6	3	1	1	11	6	3

専任教員1人あたりの学生数(2015年5月1日現在):39.0人

②特定の範囲の年齢に著しく偏らないように配慮していますか。

☒はい ☐いいえ

【特記事項】(～200字程度まで)※ない場合は「特になし」と記入。

現状では専任教員の年齢構成が50歳以上に大きく偏っている。これは2003年度以降、以前は別個に採用人事を行っていた第一教養部に所属していた教員が史学科に移籍した結果で、やむをえない面がある。2013年度には2名の専任教員の退職に伴い新たに2名の新任教員を迎え、さらに2015年度には1名の任期付助教を採用した。これにより、年齢構成は一定程度是正された。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・「文学部教授会規程」(規定第5号、昭和37年10月3日一部改正、昭和56年12月16日一部改正、2001年7月27日一部改正、2007年4月1日一部改正、2010年7月26日一部改正、2014年4月1日一部改正、2015年4月1日一部改正)

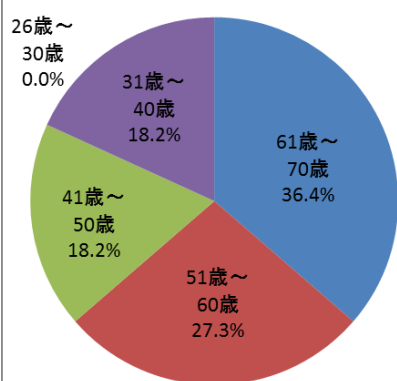
・「文学部教授会規程内規」(昭和44年教授会決定、昭和57年3月26日一部改正、1996年3月22日一部改正、2009年9月30日一部改正、2014年4月1日一部改正、2015年4月1日一部改正)

年齢構成一覧

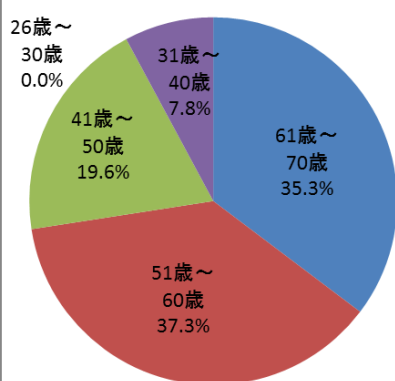
(2015年5月1日現在)

年度\年齢	26～30歳	31～40歳	41～50歳	51～60歳	61～70歳
2015	0人 0.0%	2人 18.2%	2人 18.2%	3人 27.3%	4人 36.4%

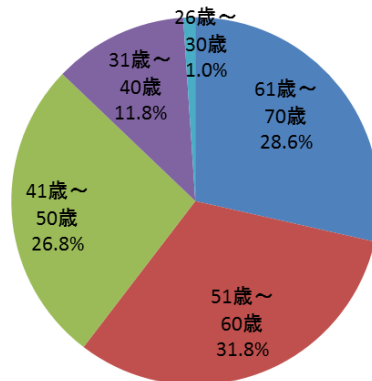
年齢構成比
(2015年度文・史学科)



年齢構成比
(文・史学科過去5年平均)



年齢構成比
(過去5年全学部平均)



1.3 教員の募集・任免・昇格は適切に行われているか。

①各種規程は整備されていますか。

☒はい ☐いいえ

【根拠資料】※教員の募集・任免・昇格に関する規程・内規等の名称を箇条書きで記入。

・「文学部教授会規程」(規定第5号、昭和37年10月3日一部改正、昭和56年12月16日一部改正、2001年7月27日一部改正、2007年4月1日一部改正、2010年7月26日一部改正、2014年4月1日一部改正、2015年4月1日一部改正)

・「文学部教授会規程内規」(昭和44年教授会決定、昭和57年3月26日一部改正、1996年3月22日一部改正、2009

年 9 月 30 日一部改正、2014 年 4 月 1 日一部改正、2015 年 4 月 1 日一部改正） ・「文学部人事委員会細則」（1986 年 11 月 19 日教授会承認、2012 年 5 月 16 日教授会承認、2013 年 9 月 18 日教授会承認） ・「文学部人事委員マニュアル」（2014 年 6 月 18 日確定） ・「文学部史学科 人事に関する内規」（2011 年 7 月 20 日学科会議決定、2012 年 5 月 16 日一部修正、2014 年 3 月 12 日一部修正） ・「文学部史学科 昇格人事に関する申し合わせ」（2011 年 7 月 20 日学科会議決定）	
②規程の運用は適切に行われていますか。	☒ はい ☐ いいえ
【募集・任免・昇格のプロセス】 ※箇条書きで記入。「上記根拠資料の通り」と記載し、内規等（非公開）を添付することでも可。 ・上記根拠資料の通り。 ・2013 年度の専任教員 2 名、2015 年度の助教 1 名の採用人事、2013 年度 1 件・2014 年度 2 件・2015 年度 2 件の定年延長人事、2013 年度の名誉教授推薦は上記諸規程・内規等に従って進めた。	
1.4 教員の資質向上を図るための方策を講じているか。	
①学部（学科）内の F D 活動は適切に行なわれていますか。	A ☒ B ☐ C ☐
【F D 活動を行うための体制】 ※箇条書きで記入。 ・春学期（前期）末・秋学期（後期）末の特別学科会議 【2015 年度の F D 活動の実績（開催日、場所、テーマ、内容（概要）、参加人数等）】 ※箇条書きで記入。 ・春学期（前期）末特別学科会議：2015 年 9 月 9 日（水）13:30～15:00、BT6 階 G 会議室、専任教員全員が参加。基礎ゼミの運営方法や留年者・休学者・成績不振者への各教員の対応の報告。 ・秋学期（後期）末特別学科会議：2016 年 2 月 3 日（水）13:30～15:00、BT6 階 G 会議室、専任教員全員が参加。ゼミでの授業外学習の実施状況、学部生による大学院科目の履修・参加状況、卒業保留の原因・卒業論文作成支援ツールの作成、シラバス・「振り返りシート」を利用した授業内容の検討、シラバスの第三者チェック報告。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	

（2）特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

（3）現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※（1）～（2）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・2015 年度より助教 1 名を採用したものの、助教の分担可能な校務が少なく、負担は軽減されていない。
--

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照

2 教育課程・教育内容

【2016 年 5 月時点の点検・評価】

（1）点検・評価項目における現状

【教育課程の編成・実施方針】 史学科のカリキュラムは、教育目標と学位授与方針に沿って、次のように体系的な構成をとっている。 1. 新入生にとって、大学の授業は戸惑うことが多い。そのため、1 年生を対象に「基礎ゼミ」を設け、大学教育への円滑な導入を図る。 2. 国際的な視野と幅広い知識を身につけるため、1 年次には教養教育に加え、日本史・東洋史・西洋史の概説を履修する。 3. 2 年次以降、教養教育に加え、歴史学の専門的教育に入る。まず 2 年次に方法論の概要を学ぶ考古学概論・史学概論

のいずれかを履修する。同時に、学生は2年次から各専任教員が担当する演習（ゼミ）のいずれかに必ず所属し、発表・討論を通じ少人数での専門的教育指導を受ける。さらに、日本史・東洋史・西洋史の各時代史や専門的なテーマの特殊講義、日本史分野での史料活用方法を訓練する古文書学や時代別史料学、東洋史・西洋史分野での外書講読等、多彩な開講科目の履修を通じて、史学科が学位授与方針とする種々の見識・能力を習得する。 4.4 年生は所属ゼミ担当教員の指導のもと、一つの研究課題に取り組み、卒業論文を作成する。卒業論文は学生の学業の集大成として位置づけられる。		
2.1 教育課程の編成・実施方針に基づき、授業科目を適切に開設し、教育課程を体系的に編成しているか。		
①学生の能力育成の観点からカリキュラムの順次性・体系性を確保していますか。	A	☒ B C
(～400 字程度まで) ※カリキュラム上、どのように学生の順次的・体系的な履修への配慮が行われているか概要を記入。 1 年次には、導入教育科目「基礎ゼミ」で大学での学習方法を、市ヶ谷基礎科目では学習の基礎となる幅広い知識を習得させる。また、専門基礎科目の日本史・東洋史・西洋史の各概説で、多角的・国際的視野を身につけさせる。 2 年次には専門基礎科目「史学概論」「考古学概論」で、歴史学・考古学の基本的な方法論を習得させる。 2 年次以降の専攻系（時代史）講義科目では、専攻分野（日本史・東洋史・西洋史）の知識を深化させ、より専門性の高い特講系講義科目と有機的に結びつくようにしている。史資料の扱い方や外国語論文読解力習得の実習系科目も、選択必修科目として開設している。 教養教育では ILAC の「総合科目」が2年次以降に履修できる。 学習の集大成として卒業論文を必修とし、演習（ゼミ）担当教員の指導を通じて、自らが設定したテーマで卒業論文を完成させられるよう指導している。 より高度な教育を求める学生には、3 年次から大学院史学専攻の科目の履修を可能にしている。		
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2016 年度文学部履修の手引き』（pp. 68-87）		
②幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程が編成されているか。	A	☒ B C
(～400 字程度まで) ※カリキュラム上、どのように教養教育等が提供されているか概要を記入。 幅広く深い教養を培うため1年次から市ヶ谷基礎科目を履修する編成となっている。また1年次には、日本史・東洋史・西洋史の各概説系科目を各4単位履修することが求められており、歴史学への関心が特定分野に偏ることのないような編成となっている。 2 年次からは日本史・東洋史・西洋史の各専攻に分かれるが、各自の専攻とは異なる専攻の科目を履修することを義務づけている。これにより専攻を超えて幅広く歴史を学ぶことができる。また総合科目、文学部共通科目、文学部内他学科公開科目、他学部公開科目、情報系科目などの科目を自由科目として8単位以上履修することを義務づけており、加えて哲学・文芸・美術史を含む選択科目も履修可能であり、歴史にとどまらず多様な学問分野を学び、豊かな人間性の涵養を促す編成となっている。 これらの教養を土台として、2 年次には専攻、演習（ゼミ）を選択し、4 年次には卒業論文のテーマを決めるが、その機会を通して総合的な判断力を培うことが可能となっている。		
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2016 年度文学部履修の手引き』（pp. 68-87） ・『2016 年度市ヶ谷基礎科目・総合科目講義概要（シラバス）』（p. 4）		
2.2 教育課程の編成・実施方針に基づき、各課程に相応しい教育内容を提供しているか。		
①学生の能力育成のための教育課程・教育内容が適切に提供されていますか。	A	☒ B C
(～400 字程度まで) ※学生に提供されている教育課程・教育内容の概要を記入。 1 年次の春学期に履修させる「基礎ゼミ」および主として1年次に履修させる市ヶ谷基礎科目、1 年次開設の日本史・東洋史・西洋史の各概説と2 年次開設の「史学概論」「考古学概論」という専門基礎科目、2 年次以降に履修させる専攻系科目・特講科目群、実習系科目群、演習（ゼミ）という専門科目、さらに高度な教養科目である総合科目、3 年次までに培われた能力や教養を自分で結実させる場である4 年次の卒業論文というように、年次進行と学生の知識・能力の深化に合わせた教育内容を提供している。これらはまた、史資料分析のための方法論、歴史像を構築するための理論と知識を、包括的且つ実践的に習得することを可能にするものであり、「歴史を見る眼」を培うという史学科の理念・目的にかなう十分な特徴を備えている。		
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2016 年度文学部講義概要（シラバス）』（pp. 243-293）		

・『2016 年度市ヶ谷基礎科目・総合科目講義概要（シラバス）』（p. 4）	
②初年次教育、キャリア教育は適切に提供されていますか。	A ☒ B C
（～400 字程度まで）※学生に提供されている初年次教育、キャリア教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。 初年次教育としての「基礎ゼミ」は 2011 年度から 4 コマを全て春学期（前期）に集中させ、必ず専任教員が担当して、初回授業で史学科の教育理念や到達目標を周知させると共に初年次春学期に基礎的なアカデミック・スキルを学ぶ意義を理解させて、大学教育への円滑な導入を図っている。 キャリア教育については、2011 年度から開講された文学部共通科目の「文学部生のキャリア形成」「現代のコモンセンス」を履修できるよう、学科開設科目の時間割編成の際に配慮し、受講を勧めている。加えて市ヶ谷基礎科目には「キャリアデザイン入門」「キャリアデザイン演習」が設置されている。 さらに 2013 年度から基礎ゼミの一部に試験的にキャリアセンターのガイダンスを取り入れており、初年次教育とキャリア教育との融合を試みている。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2016 年度市ヶ谷基礎科目・総合科目講義概要（シラバス）』（p. 4） ・『2016 年度文学部履修の手引き』（p. 110） ・『2016 年度文学部講義概要（シラバス）』（pp. 19-20）	
③学生の国際性を涵養するための教育内容は適切に提供されていますか。	☒ A B C
（～400 字程度まで）※学生に提供されている国際性を涵養するための教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。 専攻に関わらず、外国史（東洋史・西洋史）の科目の履修が 1 年次から義務づけられている。外国史に関する科目は、東・内陸アジア、インド・イスラム、西・南・東ヨーロッパ、ロシアと多様な地域について、内容も政治・経済・考古学・宗教・芸術など多様な分野に亘っており、国際性の基底をなす異文化理解の促進を十分に可能にするカリキュラム編成となっている。 高度な外国語運用能力の育成に向け、東洋史専攻・西洋史専攻の各演習（ゼミ）の授業で外国語の原書を読むことを義務づけている。また、1 年次から基礎科目として多様な言語の学習機会が用意されており、史学科の科目である「東洋史外書講読」「西洋史外書講読」では、日本史専攻の学生も履修することが出来るようになっている。 留学促進のため、基礎ゼミではグローバル教育センターの留学ガイダンスへの参加を呼びかけ、また国際性の涵養を目指して、中国の龍門石窟（2014 年度）および少林寺（2015 年度）と学術・教育面での協定を締結した。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2016 年度文学部講義概要（シラバス）』（pp. 243-293） ・『2016 年度文学部履修の手引き』（pp. 68-87）	

（2）特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
- 第 14 回学科会議（2016 年 1 月 15 日）において、文学部執行部より提示された科目ナンバリング枝番の暫定案（2015 年度は 2 桁のみ）についての検討を行い、承認を得た。 - カリキュラムマップについては、第 6 回学科会議（2015 年 7 月 1 日）に試案を提示し、学科内で検討、修正ののち、8 月に文学部執行部に史学科独自のものを提出した。 - 前年度同様 1 つの基礎ゼミでキャリアセンターの職員によるプログラムを実施した。また、2 つのゼミでキャリアセンターによるゼミ別就職セミナーを開催した。 - グローバル教育センターとは中国少林寺との学術提携を進め、協定書の調印にこぎつけた。 - 外部の教育プログラムへの参加も奨励し、文化庁主催の文化財担当者養成セミナーにも 2 名の学生が参加している。	

（3）現状の課題・今後の対応等（必須項目）

※（1）～（2）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。

・文学部全体の方針の決定に応じ、カリキュラムマップ（試案）とナンバリング・コード（暫定案）のさらなる整備を進
--

める。

- ・キャリアセンターによるプログラムは4つある基礎ゼミのすべてでは実施しておらず、2016年度には確実にこれを実施し、前年度との比較において、その効果を継続的に観察していく必要がある。また、2015年度より就職活動の時期がずれたことから学生に戸惑いが生じているため、キャリアセンターの積極的な活用を推奨していく。

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照

3 教育方法

【2016年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

3.1 能力育成の観点から教育方法および学習指導は適切か。

① 学生の履修指導を適切に行っていますか。

A ☒ B C

【履修指導の体制および方法】※箇条書きで記入。

- ・学生全体への履修指導については、4月に新入生オリエンテーション、在学生ガイダンスを行い、履修上の注意・指導を行っている。
- ・1年生には基礎ゼミと、5月に行われる全ての1年生を対象とした新入生面談とにおいて、2年生以上にはそれぞれが所属する演習（ゼミ）において、専任教員が直接、履修上の注意を行うとともに、学生からの履修上の相談にも応じている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・「文学部史学科・新入生オリエンテーション」「史学科の理念・目的、教育目標と学位授与、カリキュラム構成について」（新入生オリエンテーション配布資料）
- ・「文学部史学科・履修ガイダンス」（在学生ガイダンス配布資料）
- ・「史学科卒業論文の提出と評価について」「卒業論文作成心得」（卒業論文ガイダンス配布資料）

② 学生の学習指導を適切に行っていますか。

A ☒ B C

（～400字程度まで）※取り組み概要を記入。

学習指導については、春学期開始後数週間の頃に専任教員が分担して新入生全員を対象にグループ面談を行い、不適応等の問題が起きていないかの確認に努めると同時に、学習相談にも応じている。さらに「基礎ゼミ」を通して、1年生にも専任教員の学習指導が行き届きやすくなった。演習（ゼミ）に所属することになる2年次以降の学習指導は、ゼミ担当教員が授業の内外できめ細かく行っている。4年生に対しては在学生ガイダンス時に卒論ガイダンスを行うほか、ゼミ担当教員が授業時以外にも卒論指導面談を行うなどして、きめ細かく指導している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・「史学科卒業論文の提出と評価について」「卒業論文作成心得」（卒業論文ガイダンス配布資料）

③ 学生の学習時間（予習・復習）を確保するための方策を行なっていますか。

A ☒ B C

（～400字程度まで）※取り組み概要を記入。

学生の授業外学習については、各科目につきシラバスで指示している。2年次以上の学習の中心である演習（ゼミ）や史学科の学習を特徴づけている実習系科目群では、教員からの課題を通じて十分な授業外学習が要求されている。また、授業内容を離れた学生間の相互学習やサブゼミも盛んに行われており、各自の専門分野に関しては、授業外の学習時間は十分に確保されている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・『2016年度文学部講義概要（シラバス）』（pp. 243-293）

④ 教育上の目的を達成するため、新たな授業形態の導入に取り組んでいますか。

A ☒ B C

【具体的な科目名および授業形態・内容等】※箇条書きで記入（取組例：PBL、アクティブラーニング、オンデマンド授業等）。

- ・一般的に言われるPBL、アクティブラーニングの定義に従うのであれば、従来から行っている実習系科目群、演習（ゼミ）、基礎ゼミにおける授業形態はすでにそれらの要件を満たしている。
- ・史学科の学習は卒論作成を最終的な目標としているが、問題提起から論文の完成までの全ての過程で学生の能動性を前提としている卒論作成は、PBL、アクティブラーニングの究極的な形と考えられる。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2016 年度文学部講義概要（シラバス）』（pp. 243-293） ・『2016 年度市ヶ谷基礎科目・総合科目講義概要（シラバス）』（p. 4）	
3.2 シラバスに基づいて授業が展開されているか。	
①シラバスが適切に作成されているかの検証を行っていますか。	☒ はい ☐ いいえ
【検証体制および方法】 ※箇条書きで記入（取組例：執行部（〇〇委員会）による全シラバスチェック等）。 ・シラバスには各授業のテーマと到達目標、授業の概要と方法、毎回の授業計画、テキストと参考書、授業外に行うべき学習活動、成績評価基準が記載されており、適切に作成されている。 ・2016 年度シラバスについては、シラバスの第三者チェックの際に、日本史・東洋史・西洋史の三分野ごとにシラバスのチェックを行い、不適切な記述については訂正した。 ・シラバス執筆上の問題点を集約し、第 2 回特別学科会議（2016 年 2 月 3 日）で検証し情報を共有した。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2016 年度文学部講義概要（シラバス）』（pp. 243-293）	
②授業がシラバスに沿って行われているかの検証を行っていますか。	☒ はい ☐ いいえ
【検証体制および方法】 ※箇条書きで記入（取組例：後シラバスの作成、相互授業参観、アンケート等）。 ・2012 年度から秋学期（後期）末の第 2 回特別学科会議において、FD 推進センターが提供する「振り返りシート」を利用して、専任教員担当授業についてはシラバスの内容と齟齬がないことを確認している。 ・年二回（春学期末と秋学期末）の特別学科会議では、相互授業参観の状況報告を行っている。 ・第 1 回特別学科会議（2015 年度は 2015 年 9 月 9 日）では、基礎ゼミについて情報共有を行っている。 ・第 2 回特別学科会議（2015 年度は 2016 年 2 月 3 日）では、授業スケジュールがシラバス通りには進まなかったケースについて、その理由（受講生の理解度を確認しながら進めたこと、シラバス作成時期の問題で次年度の授業計画を十分に練る時間的余裕が無く、学生による授業改善アンケートの内容も反映させられないなど）の検証を行っている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
3.3 成績評価と単位認定は適切に行われているか。	
①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。	A ☒ B ☐ C ☐
【確認体制および方法】 ※箇条書きで記入。 ・各科目の成績評価に関する基準はシラバスに明記されており、単位の認定は適切に行われていると考える。学生の申請に基づく成績再調査の制度も学部全体で保証されている。 ・学科として成績評価と単位認定の適切性を組織的に確認する全面的な作業はこれまで行っていない。史学科の授業は、それぞれが扱う分野・史資料に根ざした多様性を有しており、画一的な適切性の基準を設けることは必ずしも現実的ではない。よって、それぞれの授業において学生への説明責任を果たすことが、適切性の獲得につながるものと考えている。 ・4 年間の学習成果を測る重要な指標である卒業論文の審査基準については、分野による違いが大きいものの、2012 年度に学科として最低限要求すべき最大公約数的な審査基準を作成し、2013 年度から 4 月の在学生ガイダンスにおいて 2～4 年次生に文書と口頭で提示している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2016 年度文学部講義概要（シラバス）』（pp. 243-293） ・「史学科卒業論文の提出と評価について」「卒業論文作成心得」（卒業論文ガイダンス配布資料）	
②他大学等における既修得単位の認定を適切な学部（学科）内基準を設けて実施していますか。	☒ はい ☐ いいえ
（～400 字程度まで）※取り組み概要を記入。 留学生や転編入生の既修得単位認定については、学科会議において関連書類（既修得単位に関するシラバス等）を精査して、成績も合わせて認定するか、修得単位数のみ卒業所要単位の中に組み入れる認定方法（R 認定）が適切かなど、学部に基準に則って判断し、適切に行っている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
③厳格な成績評価を行うための方策を行っていますか。	A ☒ B ☐ C ☐
（～400 字程度まで）※取り組み概要を記入。	

2012 年度から秋学期（後期）末の特別学科会議において、FD 推進センター提供の「振り返りシート」を利用し、各専任教員がシラバスに提示された成績評価基準に則った成績評価を行っているかを、相互に確認している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

3.4 教育成果について定期的な検証を行い、その結果を教育課程や教育内容・方法の改善に結びつけているか。

①教育成果の検証を学部（学科）ごとに定期的に行っていますか。

A ☒ B C

【検証体制および方法】※箇条書きで記入。

- ・4 年間の教育成果を検証するための重要な指標である卒業論文については、合格者数（卒業者数）を毎年度確認し、2011 年度からは秋学期（後期）末の特別学科会議で卒業保留となった者の原因分析も行っている。
- ・長期欠席者・留年者についても学科会議および特別学科会議で原因の把握に努めている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。

A ☒ B C

【利用方法】※箇条書きで記入。

- ・5 段階評価をやめたこと、「授業を履修して感じたこと」「授業の進め方」に関する項目で複数回答を認めていること等から、教育課程や教育内容・方法の組織的改善のためには活用しにくいという意見が多く、十分な活用に至っていない。
- ・「授業改善アンケートからの気づき」がシラバスの必須項目となったこともあり、当面は自由記述欄の内容を踏まえた個々の教員による利用に委ねることとなり、現在に至っている。
- ・WEB によるアンケートの回答率が低く、実態もつかみにくくなっていることから、回答率の向上について検討する必要がある。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・『2016 年度文学部講義概要（シラバス）』（pp. 243-293）

（2）特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

（3）現状の課題・今後の対応等（必須項目）

※（1）～（2）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。

- ・多くの講義系科目については新しい授業形態が積極的に導入されているとはいえず、2014 年度末に文学部教授会懇談会で紹介されたような PBL やアクティブラーニングの手法を、どのように各自の講義に取り入れているか、あるいは今後取り入れていくか、特別学科会議等で情報共有することを検討中である。

【この基準の大学評価】

※上記（1）～（3）の記載内容に基づき基準全体の評価を記入。

※文学部全体の大学評価を参照

4 成果

【2016 年 5 月時点の点検・評価】

（1）点検・評価項目における現状

【学位授与方針】

史学科における教育は、学生が卒業するまでに以下のような見識・能力を修得していることを目標とする。

1. 国際的な視野と、政治・経済・社会・文化などにわたる幅広い歴史知識を得ることによって、現代社会の問題を見る眼を養い、未来を展望する見識。
2. 史料の批判的考察から体系的理解に至る歴史学の分析方法を習得して思考力・判断力を培い、自主的・自立的に問題を発見・追究・検証する能力。
3. 発表・討論の訓練を通して、自分の意見を論理化・体系化して相手に伝え、かつ相手の意見を理解するコミュニケー

ション能力。 4. 文化遺産を調査・保存・啓発し、また、次世代の教育に歴史学の成果を生かすことのできる能力。	
4.1 教育目標に沿った成果が上がっているか。	
①学生の学習成果を測定していますか。	A ☒ B C
(～400 字程度まで) ※取り組みの概要を記入 (習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用状況等)。 学習成果の測定については、授業ごとにそれぞれのやり方で行っている。学生一人一人について学科として測定するのであれば、単位修得状況や GPA によることになり、留年者・卒業保留者についてはこれを行っているが、順調に進級している学生については学科としての学習成果の測定・把握は行っていない。 卒業論文については卒業論文審査基準に基づき、卒業論文面接諮問において各担当教員が達成度を確認し評価している。 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
②成績分布、進級などの状況を学部 (学科) 単位で把握していますか。	☒ はい いいえ
【データの把握主体・把握方法・データの種類の等】※箇条書きで記入。 ・メンタル面での問題を抱えている学生については、試験放棄を含む成績分布や単位修得状況を学科として確認している。 ・1 年生については、12 月に判明する 2 年次以降の所属ゼミ希望調査用紙の未提出者について、履修状況・単位修得状況と成績を確認し、学科主任が本人や保証人に連絡して原因を調査し、相談に応じている。また、必要に応じて学生相談室とも連携して対処している。 ・2 年次以降については、所属ゼミの指導教員が長期欠席者や単位修得状況不良の学生について学科会議で報告し、対応策を検討するようにしている。 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
③学習成果を可視化していますか。	A ☒ B C
【学習成果可視化の取り組み】※取り組みを箇条書きで記入 (取組例：専門演習における論文集や報告書の作成、統一テストの実施、学生ポートフォリオ等)。 ・史学科での学習の最大の成果である卒業論文については、卒業論文審査基準を作成する過程で、学科会議においてそれぞれの情報を交換している。 ・不合格とした卒業論文の抱える問題点については、学科会議で明らかにし、2013 年からは 4 月の在学生ガイダンスにおいて諸々の問題点を学生に明示している。 ・合格した卒業論文については、学科内学会の雑誌である『法政史学』に論文名を掲載し、学生が在籍中の学習成果によりどのような関心、問題意識を持つに至ったかを明示している。 ・個々の学生の単位修得状況及び GPA の把握や可視化はまだ行っていない。 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・「史学科卒業論文の提出と評価について」「卒業論文作成心得」(卒業論文ガイダンス配布資料) ・『法政史学』85 号 (2016 年 3 月) 修士・卒業論文題目一覧 (2015 年度)	
4.2 学位授与 (卒業・修了認定) は適切に行われているか。	
①学生の就職・進学状況を学部 (学科) 単位で把握していますか。	☒ はい いいえ
【データの把握主体・把握方法、データの種類の等】※箇条書きで記入。 ・個々の学生の進路については、全学生の詳細な情報を網羅するまでには至っていないが、学科会議での所属ゼミの指導教員からの報告を通じて、大凡の状況は学科単位で把握している。 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『法政大学文学部 2016』(文学部案内) (p. 26)	

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・4 月の卒論ガイダンスで配布した「史学科卒業論文の提出と評価について」「卒業論文作成心得」を卒業支援ツールの基本として各ゼミで指導を進めた。 ・11 月のゼミ専攻説明会にも専任教員からゼミ教育に関するコメントが提示され、また第 2 回特	

別学科会議（2016 年 2 月 3 日）において、各教員からゼミの活動状況の報告を受け、また卒論の指導方針を集約した。 ・ゼミ活動の一端は『法政史学』に掲載している（『法政史学』85 号、2016 年 3 月、p. 40-51）。	
---	--

（3）現状の課題・今後の対応等（必須項目）

※（1）～（2）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。

・各ゼミで適切な指導環境が整備されているかを、定期的に検証する機会を設ける必要がある。

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照

5 学生の受け入れ

【2016 年 5 月時点の点検・評価】

（1）点検・評価項目における現状

【学生の受け入れ方針】 史学科の入学受入れ方針は、その教育理念・目標に基づき、多様な資質・能力の可能性をもった学生の入学に期待をかけており、そのために入学選抜方法も多様化を図ってきた。即ち、一般選抜の中にセンター試験入試を導入し、また、推薦入試や編入学・転入学試験も実施するなど、さまざまな経路から学生を集めているが、それは学生相互に良い影響を及ぼしており、今後もこの方針を継続する予定である。																																																							
5.1 適切な定員を設定し、学生を受け入れるとともに、在籍学生数を収容定員に基づき適正に管理しているか。																																																							
①定員の超過・未充足に対し適切に対応していますか。						☒ はい ☐ いいえ																																																	
（～200 字程度まで）※入学定員・収容定員の充足状況をどのように捉えているかを記入。 史学科定員は 100 名であるが、近年の入学者は 2011 年度が 100 名、2012 年度が 95 名、2013 年度が 99 名、2014 年度が 105 名、2015 年度が 95 名と概ね適正を保っており、これまでは特別な対応を必要としていない。																																																							
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし																																																							
定員充足率（2011～2015 年度） （各年度 5 月 1 日現在） <table border="1" style="width: 100%; text-align: center;"> <thead> <tr> <th>種別\年度</th> <th>2011</th> <th>2012</th> <th>2013</th> <th>2014</th> <th>2015</th> <th>5 年平均</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>入学定員</td> <td>100 名</td> <td>100 名</td> <td>100 名</td> <td>100 名</td> <td>100 名</td> <td></td> </tr> <tr> <td>入学者数</td> <td>100 名</td> <td>95 名</td> <td>99 名</td> <td>105 名</td> <td>95 名</td> <td></td> </tr> <tr> <td>入学定員充足率</td> <td>1.00</td> <td>0.95</td> <td>0.99</td> <td>1.05</td> <td>0.95</td> <td>0.99</td> </tr> <tr> <td>収容定員</td> <td>400 名</td> <td>400 名</td> <td>400 名</td> <td>400 名</td> <td>400 名</td> <td></td> </tr> <tr> <td>在籍学生数</td> <td>478 名</td> <td>466 名</td> <td>453 名</td> <td>443 名</td> <td>429 名</td> <td></td> </tr> <tr> <td>収容定員充足率</td> <td>1.20</td> <td>1.17</td> <td>1.13</td> <td>1.11</td> <td>1.07</td> <td>1.13</td> </tr> </tbody> </table>							種別\年度	2011	2012	2013	2014	2015	5 年平均	入学定員	100 名	100 名	100 名	100 名	100 名		入学者数	100 名	95 名	99 名	105 名	95 名		入学定員充足率	1.00	0.95	0.99	1.05	0.95	0.99	収容定員	400 名	400 名	400 名	400 名	400 名		在籍学生数	478 名	466 名	453 名	443 名	429 名		収容定員充足率	1.20	1.17	1.13	1.11	1.07	1.13
種別\年度	2011	2012	2013	2014	2015	5 年平均																																																	
入学定員	100 名	100 名	100 名	100 名	100 名																																																		
入学者数	100 名	95 名	99 名	105 名	95 名																																																		
入学定員充足率	1.00	0.95	0.99	1.05	0.95	0.99																																																	
収容定員	400 名	400 名	400 名	400 名	400 名																																																		
在籍学生数	478 名	466 名	453 名	443 名	429 名																																																		
収容定員充足率	1.20	1.17	1.13	1.11	1.07	1.13																																																	
5.2 学生募集および入学者選抜は、学生の受け入れ方針に基づき、公正かつ適切に実施されているかについて、定期的に検証を行っているか。																																																							
①学生募集および入学者選抜の結果について検証していますか。						A ☒ B ☐ C																																																	
【検証体制および検証方法】 ※箇条書きで記入。 - 専任教員の全てが入試業務に携わっており、一般入試における学生の動向、選抜のあり方については、入試業務の準備段階、業務遂行時に情報の交換を行い、入試結果を見据えながら実質的な検証を重ねている。 - 指定校推薦の面接の結果、転入・編入学試験の筆記試験・面接の結果については、採点・面接担当者が学科会議で報告とともに所感を述べ、受験生の傾向、選抜のあり方について情報の共有を図っている。 2013 年度に指定校推薦について指定校の見直しを行い、近年推薦者のいなかった 2 校を除外し、2 校を新規に採用した。また指定校の見直し期間を 2 年間から 4 年間に延長することを学科として決定した。 - 志願者のいなかった外国人留学生入試については、2015 年度入試から英語を審査科目から外すこととした。これにより志願者 0 が続いていた外国人留学生の志願者が 2 年つづけて 10 名を超すことになった。																																																							
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。																																																							

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・今後も志願者数、とくに中国人・韓国人の志願者数の維持・増加が予想されるため、東洋史を専門とする専任教員を加えて適切な選考を行い、志願者の学力、志望理由、生活、学習環境についての包括的な情報収集に努めた。	

(3) 現状の課題・今後の対応等 (任意項目)

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・2016 年度の入学者では 129 名と大幅な超過が発生しており、現在対応を検討中である。

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照

6 学生支援

【2016 年 5 月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

6.1 学生への修学支援は適切に行われているか。	
①卒業・卒業保留・留年者および休・退学者の状況を学部（学科）単位で把握していますか。	☒ はい ☐ いいえ
【データの把握主体・把握方法・データの種類の等】 ※箇条書きで記入。 ・卒業所要単位を修得することで史学科が養成する人材像が達成されるよう教育課程を編成し、卒業生数・卒業保留者については毎年、学科会議および教授会で確認している。 ・大学での学習の集大成である卒業論文については指導教員が厳正に評価しており、2012 年度には学科としての統一的な卒業論文審査基準の策定を行った。 ・退学者については、ゼミ所属学生の場合は指導教員が個別に相談に応じていることも多く、理由を把握しやすいが、1 年生や長期欠席者の退学の場合は学部事務課からの報告で把握しているのが現状で、多くの場合「一身上の都合」とのみ記されている理由を調査することは困難と言わざるを得ない。 ・留年については、前項に記したように、留年が懸念される 1 年生は 12 月の時点で把握が可能である。2 年次以降の留年者については所属ゼミ指導教員が把握し、学科全体でも情報を共有するようにしている。加えて、2011 年度分からは教授会で資料が配布され、各学年の留年者の氏名・人数が正確に把握できるようになった。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
②成績不振な学生に対し適切に対応していますか。	A ☒ B ☐ C ☐
【成績不振学生への対応体制および対応内容】 ※箇条書きで記入。 ・メンタル面での問題を抱えている学生を除き、単位修得状況や GPA といった形での成績不振については、学科としての特別な対応は行っていない。 ・演習（ゼミ）における学習態度や学修不振については、適宜、ゼミ担当教員が個別に指導している。 ・卒業論文の作成が滞っている学生については、ゼミ担当教員が個別の面接指導を行っている。 ・各教員がオフィスアワーを設定し、悩みを抱えた学生の相談を受けられる体制を作っている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2016 年度文学部講義概要（シラバス）』（pp. 454-458）	
③学部（学科）として外国人留学生の修学支援について適切に対応していますか。	☒ A ☐ B ☐ C
（～400 字程度まで）※外国人留学生の修学支援に関する取り組みの概要を記入。 2015 年度には 1 名、2016 年度には 3 名の外国人留学生を受け入れている。1 年次に設けられた基礎ゼミにおいて担当の教員が注意深く就学状況を把握し、学科会議や特別学科会議などを通じて教員間で情報の共有を行っている。言葉の問題、	

人間関係の問題などから孤立する状況を作り出すことのないよう学科全体で注視しており、現在のところいずれも中国・韓国からの留学生であることから、特に東洋史専攻の教員が個別に相談に応じている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

（２）特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・第 1 回特別学科会議（2015 年 9 月 9 日）第 2 回特別学科会議（2016 年 2 月 3 日）において、専任教員より成績不振者や留年者に関する報告を受け、学科全体で情報の共有を行った。	

（３）現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※（１）～（２）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・成績不審者や留年者の環境は、人間関係、家庭事情、健康状態などによって個々に異なっているため、それぞれ対する情報の共有を逐次行い、学科全体として対応していく必要がある。

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照

7 内部質保証

【2016 年 5 月時点の点検・評価】

（１）点検・評価項目における現状

7.1 内部質保証システム（質保証委員会）を適切に機能させているか。

①質保証委員会は適切に活動していますか。

☒ はい ☐ いいえ

【2015 年度質保証委員会の構成、開催日、議題等】※箇条書きで記入。

- ・「文学部全体」のシート参照。
- ・文学部全体の規程により、学科内に内部質保証委員を置き、文学部質保証委員会と連携しつつ、問題があれば学科会議で審議して、改善策を同委員会や文学部教学改革委員会に諮り、最終的には教授会に提案して承認を得るシステムとなっている。
- ・学科内では、学科会議を定期的に開催しているほか、2011 年度からは教育課程や教育内容等に特化して話し合う特別学科会議を年 2 回開催することとしている。
- ・文学部質保証委員会に史学科からは委員 1 名が出席し、文学部教学改革委員会には学科主任を含む委員 2 名が出席している。これらを通じて学部全体と学科の連携が確保されている。

（２）特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照

【大学評価総評】

※文学部全体の大学評価総評を参照

文学部地理学科

I 2012 年度認証評価 努力課題に対する改善計画（報告）書

該当なし

II 2015 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2015 年度大学評価結果総評】

文学部では、その教育理念やカリキュラムの概要が学部パンフレットや HP などに明確に示されている。また『文学部 2016 GUIDE BOOK』の内容も（専任教員の顔写真を掲載するなど親しみやすい作りになっていることも含めて）簡潔かつ分かりやすいものになっている。

学科ごとに独自の学問分野や教育方針を掲げながらも、共通して少人数教育を重視しており、学生が主体的に学んでいくことを促進・媒介する仕組みとなっている可能性が高いといえることができる。

このようなきめ細かな指導は、その他の学務（とりわけ日本文学科と史学科と地理学科の場合は通信教育部の仕事）とあいまって、教員個々の負担増につながりうることに懸念される。少人数教育の強みをより一層生かすためにも、教員の負担増を減らす措置・工夫が望まれる。

なお、教授会規程、内規、細則等の整備を指摘された認証評価・努力課題に対する対応が適切になされた結果、具体的な改善点としては、特段に記載することはない。

【2015 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400 字程度まで）

少人数教育の実施は、学生数と教員数の割合から簡単に実現することではないが、カリキュラムの工夫や時間割の工夫により、できるところから知恵を出して対応しているところである。2016 年度には少人数授業に対応すべくカリキュラムの見直しも予定している。大学院科目の学部での単位化はまだ実施していないが、試験的に大学院と学部の合同授業などを行っており、学部生が大学院授業についていけるかどうかを検証中である。卒論発表会は基本的に全員参加で行い、卒業生や学科主体に運営している学会とも連携しながら、優秀卒論を表彰することによってモチベーションを上げるシステムを導入しており、今後も継続的に学生の意欲を喚起していく努力をしていきたい。

III 自己点検・評価

1 教員・教員組織

【2016 年 5 月時点の点検・評価】

（1）点検・評価項目における現状

【教員像および教員組織の編制方針】（2011 年度自己点検・評価報告書より）

確固たる信念と情熱を持って教育に取り組み、研究への飽くなき探究心を持ち続け、学生への規範となる高い人間性と指導力を持った人物が教員として求められる。その上で、学会活動や社会貢献にも積極的に取り組み、内外の教育研究者との連携を構築していることが望まれる。

教員組織においては総合科学としての幅広い地理学の領域をカバーすべく、人文、自然、それぞれにおいて専門分野のバランスに留意した教員組織とするとともに、内外から優秀な人材を兼担、兼任講師として確保し、本学科の幅広い教育ニーズに対応可能な編制を行なう。

1.1 学部等として求める教員像および教員組織の編制方針を明確にしているか。

①採用・昇格の基準等において、法令に定める教員の資格要件等を踏まえて、教員に求める能力・資質等を明らかにしていますか。

☒ はい ☐ いいえ

【根拠資料】※教員に求める能力・資質等を明らかにしている規程・内規等の名称を記入。

・文学部地理学科人事に関する申し合わせ事項

②組織的な教育を実施する上において必要な役割分担、責任の所在を明確にしていますか。

☒ はい ☐ いいえ

【学部執行部の構成、学部内の基幹委員会の名称・役割、責任体制】※箇条書きで記入。

・文学部全体の記述を参照して下さい。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・地理学科役割分担表

③教員組織の編制において大学院教育との連携を考慮していますか。

☒ はい ☐ いいえ

（～400 字程度まで）※教員組織の編制において大学院教育との連携にあたりどのようなことが考慮されているか概要を記入。

地理学科の多くの教員が人文科学研究科と国際日本学インスティテュートの大学院教育に関わることによって、相互の連携は緊密に図られている。また、2011 年度には人文科学研究科地理学専攻への進学を前提とした早期卒業制度を整備し、文学部地理学科における専門教育と大学院人文科学研究科地理学専攻における専門教育との連携を明確にしている。なお、大学院の地理学関連の科目を学部生が聴講することは可能であり、それを推奨しているが、現時点では大学院科目の単位化はなされていないので、今後の課題である。またそれに加えて大学院担当専任教員を増やすことも今後の課題である。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・学則第 49 条 4 項、5 項

1.2 教育課程に相応しい教員組織を整備しているか。

①学部（学科）のカリキュラムにふさわしい教員組織を備えていますか。

☒ はい ☐ いいえ

（～400 字程度まで）※教員像および教員組織の編制方針、カリキュラムとの整合性等の観点から教員組織の概要を記入。

教員組織においては、総合科学として幅が広い地理学の領域をカバーすべく、人文地理学・自然地理学それぞれにおいて専門分野のバランスに留意した教員組織とするとともに、内外から優秀な人材を兼任・兼任教員として確保し、本学科の幅広い教育ニーズに対応可能な編成を行っている。したがって、学部・学科のカリキュラムに則った教員組織は整備されていると判断できる。また、地理学科では多くの専門科目を他学部公開科目として他学科・他学部生にも開放するとともに、教養科目（基礎科目）への関わりも重視し、専門科目の担当だけでなく、基礎ゼミを担当するとともに、基礎科目の分担や、総合科目の担当によって他学部生への教育にも積極的に貢献している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

2015 年度専任教員数一覧

（2015 年 5 月 1 日現在）

学部（学科）	教授	准教授	講師	助教	合計	設置基準上 必要専任教 員数	うち教授数
地理	7	2	1	1	11	6	3

専任教員 1 人あたりの学生数（2015 年 5 月 1 日現在）：39.2 人

②特定の範囲の年齢に著しく偏らないように配慮していますか。

☒ はい ☐ いいえ

【特記事項】（～200 字程度まで）※ない場合は「特になし」と記入。

2016 年 5 月の専任教員数は 10 名であり、そのうち女性教員は 1 名である。年齢構成では 60 歳代が 3 名、50 歳代が 4 名、40 歳代が 3 名、30 歳代が 0 名となっている。30 歳代および 40 歳代の若手教員が少ない構成となっているが、これは専門性を重視した教員採用を行った結果である。なお、近い将来の採用人事計画においては若手教員の採用を予定しており、分野・年齢構成のバランスを維持・改善していく。

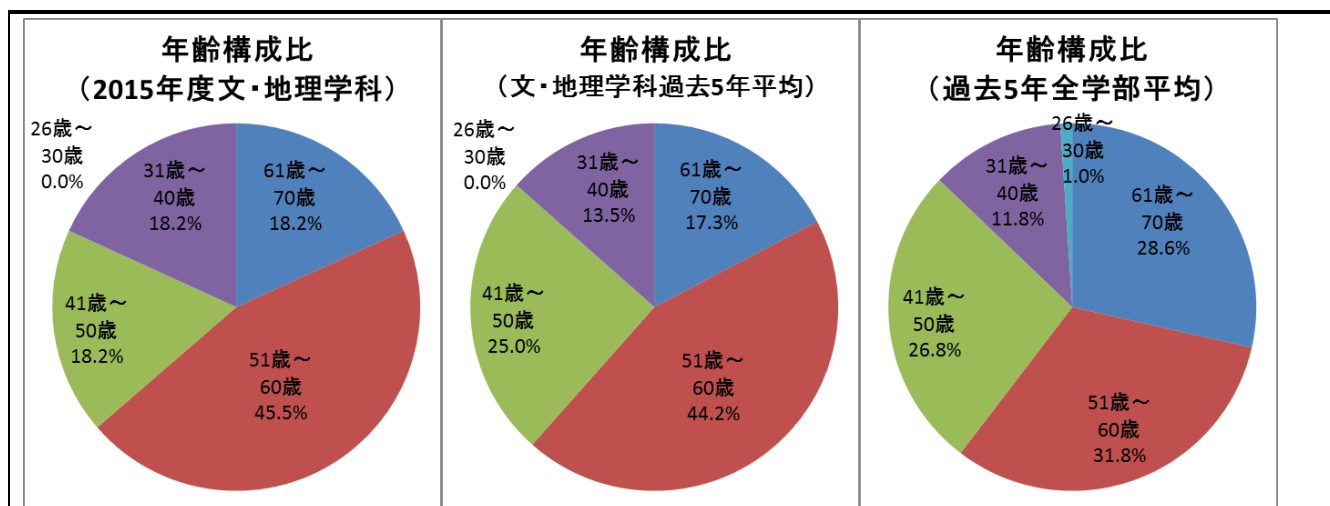
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

年齢構成一覧

（2015 年 5 月 1 日現在）

年度\年齢	26～30 歳	31～40 歳	41～50 歳	51～60 歳	61～70 歳
2015	0 人	2 人	2 人	5 人	2 人
	0.0%	18.2%	18.2%	45.5%	18.2%



1.3 教員の募集・任免・昇格は適切に行われているか。

①各種規程は整備されていますか。

☒ はい ☐ いいえ

【根拠資料】※教員の募集・任免・昇格に関する規程・内規等の名称を簡条書きで記入。

・文学部地理学科人事に関する申し合わせ事項

②規程の運用は適切に行われていますか。

☒ はい ☐ いいえ

【募集・任免・昇格のプロセス】※簡条書きで記入。「上記根拠資料の通り」と記載し、内規等（非公開）を添付することでも可。

・上記根拠資料の通り（内規を添付）

1.4 教員の資質向上を図るための方策を講じているか。

①学部（学科）内のFD活動は適切に行なわれていますか。

A ☒ B ☐ C ☐

【FD活動を行うための体制】※簡条書きで記入。

・授業改善アンケートなどをもとに、学科会議において、各自が点検し、改善すべき点を構成員全員で話し合う活動を定期的に行っている。

【2015年度のFD活動の実績（開催日、場所、テーマ、内容（概要）、参加人数等）】※簡条書きで記入。

・学科会議（授業評価アンケートによる改善点の検討を年2回程度、全員参加で行っている。）
・ネブラスカ州立大学オマハ校での教員研修に参加（学科構成員の1名が、2016年3月12～20日に、コミュニケーションを中心とした他文化共生授業の研修などを受け、研修成果の一部を学科会議で紹介した。）

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・学科会議議事録
・研修修了証

（2）特記事項

※上記点検・評価項目における2015年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、簡条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・学科内の昇任人事の規定を見直し、整備した。	2、3①②

（3）現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※（1）～（2）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について簡条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・特になし

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照

2 教育課程・教育内容

【2016 年 5 月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

【教育課程の編成・実施方針】

大学、学部が掲げる編成方針に加え、地理学科独自の編成として

1. 基礎ゼミ、地理学概論などの初年時教育により、大学で学ぶ地理学の基礎を理解し、地理学への興味関心を育成する。
2. 文化・歴史系（文化地理学、歴史地理学、観光地理学など）、社会・経済系（社会地理学、経済地理学、都市地理学など）、自然・環境系（地形学、気候学、水文学など）と分けられる多彩な科目群を総合的に学ぶことで地理学の方法論を習得する。
3. 実験・実習科目群によって調査・分析手法を学ぶとともに、現地研究というフィールドワークを通じて地理学的調査を実践する。
4. 演習、地理学研究法を通じて地理学的地域調査の具体例を学び、自らの研究対象の策定とそのまとめとしての卒業論文の作成により地理学士としての集大成を行なう。
5. 優秀な人材の早期な研究活動への移行を可能とするため、大学院修士課程と連動した 3 年早期卒業（学部大学院 5 年修了コース）を可能とする科目編成の実施。
6. 自然環境の保全に関わる能力の育成のために、卒業要件とは別に ECO-TOP プログラム科目群を配置する。
7. 社会科や理科の教員免許取得に向けた科目群を教職課程主催学部であるキャリアデザイン学部との共同による設置。

2.1 教育課程の編成・実施方針に基づき、授業科目を適切に開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

① 学生の能力育成の観点からカリキュラムの順次性・体系性を確保していますか。

A ☒ B C

（～400 字程度まで）※カリキュラム上、どのように学生の順次的・体系的な履修への配慮が行われているか概要を記入。

1 年次には必修科目である「地理学概論(1)・(2)」や「地理実習(1)・(2)」を中心に、専門科目を配置している。それら必修科目を通じて、大学で学ぶ地理学の体系と方法論の基礎を習得させている。さらに、基礎科目において「基礎ゼミⅠ」が設けられており、大学で必要な学習方法について学ぶ授業が提供されている。2 年次からは選択必修科目と演習によって多岐にわたる地理学の方法論を学ぶとともに、「現地研究」（フィールドワーク）を開講することで、習得した方法論の実践を図っている。3 年次は各自の興味関心に応じた科目群の選択と「地理学研究法」の履修により、4 年次の「卒業論文」へとつなげる編成となっている。以上のように、地理学科では卒業所要となる専門科目 88 単位のうち、必修科目 18 単位は、基礎的な科目である「地理学概論(1)・(2)」と「地理実習(1)・(2)」(8 単位)を 1 年次に、実践的な科目である「現地研究」(2 単位)を 2 年次以上に、そして「卒業論文」(8 単位)を 4 年次に配置し、その上で 2 年～4 年次に開講されているさまざまな選択必修科目や選択科目等(70 単位)の履修を通じて、段階的に学生の能力が育成できるよう体系づけている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・地理学科カリキュラムマップ

② 幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程が編成されていますか。

A ☒ B C

（～400 字程度まで）※カリキュラム上、どのように教養教育等が提供されているか概要を記入。

地理学は地理以外の幅広い分野と密接な関係があることから、「地理学Ⅰ・Ⅱ」のみならず「政治学Ⅰ・Ⅱ」や「経済学Ⅰ・Ⅱ」、「社会学Ⅰ・Ⅱ」、「文化人類学Ⅰ・Ⅱ」などの基礎科目の履修が望まれるが、それら科目の修得単位は専門科目の「自由科目」に組み込まれ、卒業所要単位となる編成となっている。また、基礎科目・総合科目のカリキュラムのみならず、地理学科専門科目においても、文化・歴史、社会・経済、自然・環境などのさまざまな分野について学ぶことができる教育課程が編成されている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・地理学科カリキュラムマップ

2.2 教育課程の編成・実施方針に基づき、各課程に相応しい教育内容を提供しているか。

① 学生の能力育成のための教育課程・教育内容が適切に提供されていますか。

A ☒ B C

（～400 字程度まで）※学生に提供されている教育課程・教育内容の概要を記入。

1 年次では、地理学の導入科目の位置づけである「地理学概論(1)・(2)」や「地理実習(1)・(2)」等を通じて、大学で学ぶ地理学の体系と方法論の基礎を習得させるとともに、「基礎ゼミⅠ」や基礎科目の「地理学Ⅰ・Ⅱ」を通じて大学で必要な学習方法や地理学に関する基礎を学ぶ。

2 年次以降は選択必修科目と演習によって地理学の方法論を学ぶとともに、「現地研究」において習得した方法論の実践

を図ることによって、4年次になるまでに卒業論文を作成するために必要となる能力が育成される教育内容になっている。 1年次から4年次まで段階を踏んで能力育成を行っており、卒業論文申請者の内の合格者の割合から判断すると教育内容は適切であると考えられる。		
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし		
②初年次教育、キャリア教育は適切に提供されていますか。		A ☒ B C
(～400字程度まで) ※学生に提供されている初年次教育、キャリア教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。 初年次教育として少人数クラスの「基礎ゼミⅠ」を設置して、レポート作成方法や図書館利用方法、プレゼンテーション方法など大学で必要な学習方法についての授業内容を提供し、ほぼ全員に履修させている。また、必修科目である「地理学概論(1)・(2)」では、高校で地理科目を選択していない学生に対する配慮から、高校地理で習う内容を踏まえた授業を提供し、高校地理と大学で学ぶべき地理学の内容との橋渡しとなる授業を行っている。さらに、同じく必修科目である「地理実習(1)・(2)」では、地理学科の学生が学士課程の4年間に地理学を専門に学ぶためのベースとなる基礎的な知識や考え方、調査や研究の方法論についての授業内容を提供している。 2～4年生に対しては、ガイダンス時において、キャリア教育の一環として開講されている文学部共通科目の「文学部生のキャリア形成」や「現代のコモンセンス」を受講するように指導している。また、教員ごとには、それぞれの演習の授業において各方面で活躍している卒業生をゲストスピーカーとして招き、職業選択や職業体験等の話を提供してもらい、学生への幅広い職業選択へ向けての動機付けを行っている。		
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし		
③学生の国際性を涵養するための教育内容は適切に提供されていますか。		A ☒ B C
(～400字程度まで) ※学生に提供されている国際性を涵養するための教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。 外国語を通じて地理学を学ぶための「外書講読」を開講している。また、地理学の研究対象領域は日本に限らず海外にも広がっているため、世界の各地域に対応した「世界地誌」やその他にも海外を対象にした地理学科専門科目を数多く開講しており、学生の海外諸地域に対する理解を深めている。 さらに、毎年ではないが海外での「現地研究」(2011年韓国、2012年台湾、2014年韓国)を実施し、学生自らが異文化を体験する機会を設けている。その結果、学士課程の総仕上げである卒業論文において、海外のフィールドを選択する学生が毎年、数名存在しており、上記の教育内容が学生の国際性を涵養するのに寄与していると考えている。 また、2015年度からは、英語強化プログラム(ERP: English Reinforcement Program)科目を単位化し、卒業所要単位に組み込むことで、学生の国際性を涵養する機会を増やすことに繋げている。		
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし		

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における2015年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・地理学科のカリキュラムマップを完成させた。	4.1①
・授業でアクティブラーニングを積極的に取り入れた。	5.1④
・留級・卒業保留者を調査し、それに対する対策を検討した。	6.2①

(3) 現状の課題・今後の対応等(必須項目)

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。

・授業相互参観のさらなる積極的参加

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照

3 教育方法

【2016 年 5 月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

3.1 能力育成の観点から教育方法および学習指導は適切か。	
①学生の履修指導を適切に行っていますか。	A ☒ B C
【履修指導の体制および方法】 ※箇条書きで記入。 ・正式な新入生ガイダンス終了後に加えて行っている地理学科オリジナルの履修ガイダンスにおいて、1 年次に履修すべき科目を学科で用意した時間割表にその場で記入させて、必修科目などを見落とすことがないよう指導している。 ・SSI ガイダンスにおいて、SSI 学生に地理学科での履修のしかたや、卒業要件などについて詳しく説明している。 ・正式な在校生ガイダンスに加えて、秋期に行っている地理学科オリジナルの卒論ガイダンスにおいて、卒業論文指導教員の選択手続のやりかたや、卒論作成にかかわる具体的な要領について詳しく説明している。 ・地理学科オリジナルの葉を配布し、文学部履修の手引きに書かれていない地理学科教員の詳しい紹介や取得できる資格などについて説明している。また、葉と同様な内容や、最新の情報は地理学科ウェブサイトからの情報を提供している。 【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・地理学科の葉、地理学科ウェブサイト (http://www.hosei.ac.jp/geogr/geo-net/index.html)	
②学生の学習指導を適切に行っていますか。	A ☒ B C
(～400 字程度まで) ※取り組み概要を記入。 春学期開講期間の中程で、初年次学生に対して、学科教員全員で学生を分担して学習指導を実施している。さらに、単位取得数が少ないなどの成績不振学生や、転入・編入してきた学生に対してもゼミ担当教員および学科主任が学習指導を行うとともに、学科会議等で情報の共有を図り、学科全体で取り組む体制となっている。また、シラバスには各教員のオフィスアワーを記載し、個々の学生の学習相談に対応できるようにしている。 【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
③学生の学習時間（予習・復習）を確保するための方策を行なっていますか。	☒ A B C
(～400 字程度まで) ※取り組み概要を記入。 地理学科には「卒業論文」、「現地研究」、演習科目、実習科目等、自ら準備して報告するタイプの授業が多く、それらに要する学生の学習時間はかなり多いと思われる。例えば、「地理実習 (1)・(2)」等の実習系科目に関しては、毎週課題を課すことで、学生の学習時間の確保を図っている。一方、講義系科目に関しても、授業改善アンケートに記載された学習時間の確保に関する質問項目の結果を基に、学科会議の場において、学生の学習時間の確保に関する方策に関しての意見交換を行ってきた。それを踏まえ、今年度のシラバスでは「授業外学習」の項目において、各教員が学生の学習時間の確保につながるよう記載の工夫を図り、学科内の委員がそのシラバスの記載内容について重点的に検証を行った。 【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
④教育上の目的を達成するため、新たな授業形態の導入に取り組んでいますか。	☒ A B C
【具体的な科目名および授業形態・内容等】 ※箇条書きで記入（取組例：PBL、アクティブラーニング、オンデマンド授業等）。 ・授業支援システムの積極的利用 ・「現地研究」報告書の作成および学科ウェブサイトでの公開 ・ECO-TOP プログラムでは、企業、自治体、NPO でのインターンシップ ・特に 2015 年度は各授業におけるアクティブ・ラーニングの積極的導入を行った。 【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
3.2 シラバスに基づいて授業が展開されているか。	
①シラバスが適切に作成されているかの検証を行っていますか。	☒ はい いいえ
【検証体制および方法】 ※箇条書きで記入（取組例：執行部（〇〇委員会）による全シラバスチェック等）。 ・学科でシラバスチェック委員を決め、チェックの結果により各教員に修正を求めている。 ・地域調査士、GIS 学術士の資格に関してはシラバスに必要なキーワードがあり、担当教員がチェックしている。 【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。	

・特になし	
②授業がシラバスに沿って行われているかの検証を行っていますか。	☒ はい ☐ いいえ
【検証体制および方法】 ※箇条書きで記入（取組例：後シラバスの作成、相互授業参観、アンケート等）。	
・授業相互参観の実施 ・学生による授業改善アンケート結果の学科会議での開示	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。	
・特になし	
3.3 成績評価と単位認定は適切に行われているか。	
①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。	A ☒ B C
【確認体制および方法】 ※箇条書きで記入。	
・オムニバス授業では担当教員間で成績を協議 ・成績分布についてのデータを学科会議で妥当性を検証 ・卒論の評価は全教員が協議し成績を決定している	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。	
・特になし	
②他大学等における既修得単位の認定を適切な学部（学科）内基準を設けて実施していますか。	☒ はい ☐ いいえ
（～400 字程度まで）※取り組み概要を記入。 規定など明文化されたものはないが、転編入の学生に対する既修得単位の認定はシラバス等の書類をその都度精査し、学科会議で審議したうえで教授会に諮り決定している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。	
・特になし	
③厳格な成績評価を行うための方策を行っていますか。	A ☒ B C
（～400 字程度まで）※取り組み概要を記入。 「現地研究」など専任教員が分担して行う科目に関しては、GPA の分布のうち A+ を 10% 程度に収めるなど、教員によって GPA の平均値が大きく異ならないように成績がつけられている。「卒業論文」に関しては、学科教員全員の審議を経て成績がつけられている。また、文学部全体でも授業形態ごとの成績分布の資料を検討することで、各教員が偏りのないよう成績評価を行うよう促している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。	
・特になし	
3.4 教育成果について定期的な検証を行い、その結果を教育課程や教育内容・方法の改善に結びつけているか。	
①教育成果の検証を学部（学科）ごとに定期的に行っていますか。	A ☒ B C
【検証体制および方法】 ※箇条書きで記入。	
・各期末の学生による授業改善アンケート ・教員が個別に行う授業ごとのアンケートやリアクションペーパー ・シラバスへの授業改善アンケートに対する「気付き」の記載 ・4 年間の教育成果を検証するための重要な指標である卒業論文については、合格者数（卒業者数）を毎年度確認するとともに、学生の卒論に対するモチベーションを上げるため、卒業生も含めた全員参加の卒論発表大会を毎年行っている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。	
・2016 年度文学部講義概要（シラバス）	
②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。	A ☒ B C
【利用方法】 ※箇条書きで記入。	
・学科会議でアンケート結果を開示し意見交換を行っている ・問題点等があれば「授業改善」の依頼を学科として当該教員に伝える	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。	
・特になし	

（2）特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・アクティブラーニングの積極導入	5.1④
・シラバスチェック体制の整備	5.2①

(3) 現状の課題・今後の対応等 (必須項目)

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。

・アクティブラーニングのさらなる積極的導入

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照

4 成果

【2016 年 5 月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

【学位授与方針】	
1. 「地域」を単位とした分析視覚を養う。 2. 習得した文化・歴史的、社会・経済的、自然・環境的諸問題に関わる分析手法を踏まえて、具体的に調査・研究する能力を身につける。 3. それらの上に、自然環境そのものと、それを舞台として生起する地域問題を具体的に分析する能力を身につける。 地理学科のカリキュラムはこれらの能力を育成するために編成されており、本学科の所定単位を修得した時、「学士」の学位が授与される。	
4.1 教育目標に沿った成果が上がっているか。	
①学生の学習成果を測定していますか。	A ☒ B ☐ C ☐
(～400 字程度まで) ※取り組みの概要を記入 (習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用状況等)。 地理学科では、さまざまな方法で学習成果を測定している。学生の学習成果としての集大成は卒業論文である。地理学科では担当教員の指導で作成された論文は、複数の教員による口頭試問を受け、さらに学科教員全員出席の会議の中で、その評価についての検討を行っている。その場で当該年度の学生の学習成果の測定が行われる。「現地研究」は必修科目であり、報告書の作成と地理学科ウェブサイト (geo-net) での公表を義務付けている。報告書による発表は学習の成果を測定する指標となっている。地理学科には教員免許、測量士補、ECO-TOP プログラム、地域調査士等の各種資格・認定があり、卒業時に取得者数等の調査を行っている。なお、2015 年度卒業生の教員免許申請者は 10 名、測量士補申請者は 15 名、ECO-TOP プログラム修了者は 4 名、地域調査士認定者は 13 名、学芸員資格取得者は 7 名であった。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
②成績分布、進級などの状況を学部 (学科) 単位で把握していますか。	☒ はい ☐ いいえ
【データの把握主体・把握方法・データの種類等】 ※箇条書きで記入。 ・事務部からのデータを元に分析 ・入試経路別の学生の単位取得状況 ・入試経路別の学生の GPA の調査 ・入試経路別の学生の留級者の単位取得状況の調査 ・入試経路別の学生の E 評価の有無による GPA の差の調査	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
③学習成果を可視化していますか。	A ☒ B ☐ C ☐
【学習成果可視化の取り組み】 ※取り組みを箇条書きで記入 (取組例：専門演習における論文集や報告書の作成、統一テストの実施、学生ポートフォリオ等)。 ・学科と学会が連携した卒業論文発表大会の実施 ・全国地理学専攻学生卒業論文大会へのエントリー	

・各種学会誌への卒業論文の投稿 ・各ゼミ活動を卒論発表会の折、ポスターにて発表 ・ECO-TOP 全体発表会、学内発表会への参加	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
4.2 学位授与（卒業・修了認定）は適切に行われているか。	
①学生の就職・進学状況を学部（学科）単位で把握していますか。	☒ はい ☐ いいえ
【データの把握主体・把握方法、データの種類等】 ※箇条書きで記入。 ・事務からの報告資料による把握 ・学科独自の学位授与率やその原因についての調査も行っている	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 現状の課題・今後の対応等（必須項目）

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。

・学位授与率を向上させるため、就職活動、単位取得、卒論執筆のバランスがうまくとれるよう、学生にはゼミ教員を通じてきめ細かいカウンセリングなどを充実させる必要がある

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照

5 学生の受け入れ

【2016 年 5 月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

【学生の受け入れ方針】 総合科目としての地理学を習得するためにはある程度の基礎学力が求められ、したがって学生の選抜方法としては学力に基準を置く一般入試、センター試験利用入試が中心となっているが、特別推薦として、地理や地学の授業に力を入れている高校や地方の優秀な高校を率先して選抜した指定校推薦制度や高校での地理、地学の成績優秀者を対象とした地理学科独自の自己推薦制度により、日本全国から学生を集め、また地理学に興味ある学生を優先的に受け入れることで、多様な人材の確保に努める。						
5.1 適切な定員を設定し、学生を受け入れるとともに、在籍学生数を収容定員に基づき適正に管理しているか。						
①定員の超過・未充足に対し適切に対応していますか。						☒ はい ☐ いいえ
(～200 字程度まで) ※入学定員・収容定員の充足状況をどのように捉えているかを記入。 定員の超過・未充足に関しては、入試時の査定に大きく関わる問題であり、学科として対応できる部分は元々限られる。学科で対応可能な入試では、定員の超過・未充足に対して適切に対応している。これまでの状況を見ると、入学者数は年により若干の増減はあるが、2011 年度から 2015 年度の平均超過率は 1.01 であるので、適正に管理されているといえる。						
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし						
定員充足率（2011～2015 年度）（各年度 5 月 1 日現在）						
種別\年度	2011	2012	2013	2014	2015	5 年平均
入学定員	90 名	90 名	99 名	99 名	99 名	
入学者数	86 名	87 名	100 名	122 名	87 名	

入学定員充足率	0.96	0.97	1.01	1.23	0.88	1.01
収容定員	360名	360名	369名	378名	387名	
在籍学生数	418名	420名	412名	433名	431名	
収容定員充足率	1.16	1.17	1.12	1.15	1.11	1.14

5.2 学生募集および入学者選抜は、学生の受け入れ方針に基づき、公正かつ適切に実施されているかについて、定期的に検証を行っているか。

①学生募集および入学者選抜の結果について検証していますか。

A ☒ B C

【検証体制および検証方法】※箇条書きで記入。

・入試経路別の志願者数、合格者数について学科会議で分析し、次年度以降の各入試経路の定員について検討している

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・学年ごとの定員充足率のばらつきが大きいため、各入試経路の定員について見直しを検討し、入学者数が安定するような方策を模索する

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照

6 学生支援

【2016 年 5 月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

6.1 学生への修学支援は適切に行われているか。

①卒業・卒業保留・留年者および休・退学者の状況を学部（学科）単位で把握していますか。

☒ はい ☐ いいえ

【データの把握主体・把握方法・データの種類の等】※箇条書きで記入。

・事務からの報告資料による把握
・学位授与率やその原因についての調査

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

②成績が不振な学生に対し適切に対応していますか。

A ☒ B C

【成績不振学生への対応体制および対応内容】※箇条書きで記入。

・学科主任やゼミ担当教員による面談
・「留級者・成績不振者情報交換会」の情報について学科内で共有

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

③学部（学科）として外国人留学生の修学支援について適切に対応していますか。

A ☒ B C

(～400 字程度まで) ※外国人留学生の修学支援に関する取り組みの概要を記入。

新入の外国人留学生については、新入生に個別に行う「新入生面談」にて、就学の状況や言語や文化的な問題を抱えていないか、確認するようにしている。2 年生以上の在籍生に対しては、主にゼミ教員が随時相談を受け付けるなどの対応を継続するとともに、学習態度、就学状況に問題があれば、学科会議などで担当教員が報告することになっている。また成

績や GPA についても常に注視し、成績が極端に下がるようなことがあれば、呼び出して状況を把握するなどのケアを行っている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

- ・成績不振学生との面談回数を増やすなど、さらなるケアを充実させることにより、学位授与率の上昇、留級率の低下を努力目標とする。
- ・カリキュラム全体の見直しによる少人数授業の実現

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照

7 内部質保証

【2016 年 5 月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

7.1 内部質保証システム（質保証委員会）を適切に機能させているか。

①質保証委員会は適切に活動していますか。

☒ はい ☐ いいえ

【2015 年度質保証委員会の構成、開催日、議題等】※箇条書きで記入。

・「文学部全体」のシート参照

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照

【大学評価総評】

※文学部全体の大学評価総評を参照

文学部心理学科

I 2012 年度認証評価 努力課題に対する改善計画（報告）書

該当なし

II 2015 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2015 年度大学評価結果総評】

文学部では、その教育理念やカリキュラムの概要が学部パンフレットや HP などに明確に示されている。また『文学部

2016 GUIDE BOOK』の内容も（専任教員の顔写真を掲載するなど親しみやすい作りになっていることも含めて）簡潔かつ分かりやすいものになっている。

学科ごとに独自の学問分野や教育方針を掲げながらも、共通して少人数教育を重視しており、学生が主体的に学んでいくことを促進・媒介する仕組みとなっている可能性が高いといえることができる。

このようなきめ細かな指導は、その他の学務（とりわけ日本文学科と史学科と地理学科の場合は通信教育部の仕事）とあいまって、教員個々の負担増につながりうるということが懸念される。少人数教育の強みをより一層生かすためにも、教員の負担増を減らす措置・工夫が望まれる。

なお、教授会規程、内規、細則等の整備を指摘された認証評価・努力課題に対する対応が適切になされた結果、具体的な改善点としては、特段に記載することはない。

【2015 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400 字程度まで）

教員の、教育以外の学務負担を減らすために、心理学科内では「予算」「PC 管理」「カリキュラム」等の係担当を決めている。これにより特定の個人に多くの作業が偏らず、また、単年度ごとに係が変わるのではなく、複数年にわたって任に着くことにより作業の合理化が図られている。係による仕事量の軽重は当然あるので、数年ごとに係担当は変更している。

III 自己点検・評価

1 教員・教員組織

【2016 年 5 月時点の点検・評価】

（1）点検・評価項目における現状

【教員像および教員組織の編制方針】（2011 年度自己点検・評価報告書より）

学部・学科の理念を十分に理解しながら、教育活動や研究活動をたゆまず前進発展させていくことのできる教員が求められる。学部・学科運営にも自分の専門性に埋没することなく、バランス良く積極的に関わることも重要である。教員組織においては、年齢、専門分野を考慮しながら、学科全体としての理念を実現するのに十分な教育・研究が可能となるような各教員間の公平性・協調性が確保されるような編制を目指している。学科主任をはじめとした各種の役割は、輪番制をとりながら、特定の教員に偏ることがないように配慮し、教育・研究活動に必要な役割を全員が体系的に果たすようにしている。

1.1 学部等として求める教員像および教員組織の編制方針を明確にしているか。

①採用・昇格の基準等において、法令に定める教員の資格要件等を踏まえて、教員に求める能力・資質等を明らかにしていますか。

☒ はい ☐ いいえ

【根拠資料】※教員に求める能力・資質等を明らかにしている規程・内規等の名称を記入。

・心理学科人事の内規

②組織的な教育を実施する上において必要な役割分担、責任の所在を明確にしていますか。

☒ はい ☐ いいえ

【学部執行部の構成、学部内の基幹委員会の名称・役割、責任体制】※箇条書きで記入。

・文学部全体のものに準ずる。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

③教員組織の編制において大学院教育との連携を考慮していますか。

☒ はい ☐ いいえ

（～400 字程度まで）※教員組織の編制において大学院教育との連携にあたりどのようなことが考慮されているか概要を記入。

2016 年度より、10 名の学部専任教員のうち 2 名が、大学院の所属としてはスポーツ健康学研究科の専任として移籍したが、引き続き人文科学研究科心理学専攻の授業を担当し、専攻会議にも出席している。また、大学院入試問題の出題・採点にも参加する予定である。結果として心理学科専任教員 10 名全員が、大学院心理学専攻の授業並びに専攻の運営に携わっている。このことにより、学部と院を通したカリキュラム構成や学位授与のプロセス全体について検証できることがメリットとしてある。具体的には、学部 4 年次の大学院科目履修と大学院進学後に単位として認定できる制度を導入することが実現している。専任教員は特定の領域に偏らず、幅広い領域の研究を行っており、他大学からの大学院入学希望者も広範に受け入れることのできる大学院での体制が、そのまま学部の体制として整備されている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

1.2 教育課程に相応しい教員組織を整備しているか。

①学部（学科）のカリキュラムにふさわしい教員組織を備えていますか。						☒ はい ☐ いいえ	
（～400 字程度まで）※教員像および教員組織の編制方針、カリキュラムとの整合性等の観点から教員組織の概要を記入。 心理学科のカリキュラムは、「認知」と「発達」という心理学科独自の二領域を柱に据えた編成に最大の特徴がある。そして、基礎から発展への体系を明確にするために、この二領域のそれぞれについて基礎科目と展開科目を設定している。さらにこの二領域それぞれを支え、且つ連動させる役割を持つスキル系科目があり、これにより演習から実習、さらに卒論へとつながるカリキュラム編成が構築されている。人事の際には、以上のような独自性の高いカリキュラムの運用を維持できる教員の採用が最も重視されており、「認知」「発達」の二領域を広くカバーできる教員組織の整備が実現している。具体的には、知覚、生理、発達、教育、学習、行動、犯罪、言語、スポーツ、健康といった分野を網羅している。また、学際的なコラボレーションや、他学問との連携性も兼ね備えた人材に恵まれており、各教員はスキル系科目と卒業論文の指導にも十分な力量を有している。							
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし							
2015 年度専任教員数一覧						(2015 年 5 月 1 日現在)	
学部・学科	教授	准教授	講師	助教	合計	設置基準上 必要専任教 員数	うち教授数
心理	8	1	1	0	10	6	3
専任教員 1 人あたりの学生数（2015 年 5 月 1 日現在）：29.4 人							
②特定の範囲の年齢に著しく偏らないように配慮していますか。						☒ はい ☐ いいえ	
【特記事項】（～200 字程度まで）※ない場合は「特になし」と記入。 現在の専任教員数は 10 名（うち、女性教員 2 名）である。年齢構成は、30 代 1 名、40 代 3 名、50 代 4 名、60 代 2 名である。2010 年度に新任教員の選考を行う機会があり、30 歳代の教員が採用され教員の年齢バランスが適正化されたが、今後の人事の機会にも、20 代、30 代の教員の割合を増やすことや、男女のバランスについて考えていく必要がある。							
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし							
年齢構成一覧						(2015 年 5 月 1 日現在)	
年度\年齢	26～30 歳	31～40 歳	41～50 歳	51～60 歳	61～70 歳		
2015	0 人	1 人	4 人	3 人	2 人		
	0.0%	10.0%	40.0%	30.0%	20.0%		
年齢構成比 (2015年度文・心理学科)		年齢構成比 (文・心理学科過去5年平均)		年齢構成比 (過去5年全学部平均)			
1.3 教員の募集・任免・昇格は適切に行われているか。							
①各種規程は整備されていますか。						☒ はい ☐ いいえ	
【根拠資料】※教員の募集・任免・昇格に関する規程・内規等の名称を箇条書きで記入。 ・心理学科人事の内規							
②規程の運用は適切に行われていますか。						☒ はい ☐ いいえ	

【募集・任免・昇格のプロセス】 ※箇条書きで記入。「上記根拠資料の通り」と記載し、内規等（非公開）を添付することでも可。 ・上記根拠資料「心理学科人事の内規」の通り。	
1.4 教員の資質向上を図るための方策を講じているか。	
①学部（学科）内のFD活動は適切に行なわれていますか。	A ☒ B ☐ C ☐
【FD活動を行うための体制】 ※箇条書きで記入。 ・特定の委員によるのではなく、全教員による討論・意見交換・情報共有を基本とする。 ・月に一回以上開催される学科会議で常時、上記の活動をしている。 ・必要に応じて、学科教員によるメーリングリスト（以下、ML）での情報共有を行っている。 【2015年度のFD活動の実績（開催日、場所、テーマ、内容（概要）、参加人数等）】 ※箇条書きで記入。 ・春学期と秋学期の授業改善アンケートからの「気づき」を全教員が各自 A4 で 1 枚に記述し、学生が読める場所に掲示している。掲示する前に教員 ML で内容に関して共有した。 ・共通シラバスで 5 名の教員（2015 年度はうち 4 名が専任教員）が担当している秋学期開講の演習 II という授業の進め方・評価方法について、随時 ML で意見交換を行った。また、相互授業参観も行った。 ・兼任講師 3 名と専任教員 2 名により共通シラバスで行っている春学期開講の演習 I については、年度末に総括および次年度の授業に向けた意見交換会を授業担当の 5 名で行った。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・特になし

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照

2 教育課程・教育内容

【2016 年 5 月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

【教育課程の編成・実施方針】 大学のスクラップアンドビルドのカリキュラム編成方針に従い、数年に一度その意見を反映させながらカリキュラムを再編している。大きくわけて「認知」と「発達」の二領域からなる専門科目の構成に基づいたカリキュラムマップを作成し、基礎から発展への授業体系性を明確にしている。さらに、卒業論文研究の遂行を通して、人間の心の仕組みに関して、科学的・客観的に分析する方法を取得できるようになっている。	
2.1 教育課程の編成・実施方針に基づき、授業科目を適切に開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	
①学生の能力育成の観点からカリキュラムの順次性・体系性を確保していますか。	A ☒ B ☐ C ☐
(～400 字程度まで) ※カリキュラム上、どのように学生の順次的・体系的な履修への配慮が行われているか概要を記入。 心理学科の教育課程の編成・実施方針に基づき、認知系科目群と発達系科目群を柱とした様々な授業科目を適切に開設し、教育課程を体系的に編成している。カリキュラムツリーおよびカリキュラムマップに示されている通り、1 年次に基礎科目や学科基礎科目を履修させ、2 年次から学生の興味関心にしたがい専門性の高い学科展開科目を比較的自由に選択幅を広くして取れるように編成している。学科基礎科目においては、1 年次では心理学科生に特化した初年次教育である基礎ゼミ（基礎科目）を開講し、高校から大学へのスムーズな学びの転換を目指している。さらに、心理学基礎実験によ	

り心理学への興味や基礎的な方法論についてのスキルを獲得させるようにし、2 年次では研究論文の読み方や実験方法を具体的に学ぶ演習科目をほぼ全員が履修している。さらに、3 年次以降は、研究法という科目によって、心理学分野での研究活動を一人で行うという学習活動を通じて、それまでに修得した知識・技能を活用する方法論を学ぶ。さらにこれらの集大成として卒業論文を作成させることを必修単位としている。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・心理学科カリキュラムツリー、カリキュラムマップ	
②幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程が編成されていますか。	A ☒ B C
(～400 字程度まで) ※カリキュラム上、どのように教養教育等が提供されているか概要を記入。 1 年次には市ヶ谷基礎科目を中心に、人文科学、社会科学、自然科学、語学、体育を幅広く履修することで、狭い知識の勉強に留まらず、生きる力を養う幅広い教養を獲得させることを目指している。同時に、心理学科の専門科目についても 1 年生から履修でき、基礎ゼミを含む基礎科目との相対化によって心理学についてのマクロな視点を獲得できる。2 年生以降は、演習、研究法という演習授業を通して、人間の心をテーマとするさまざまな研究論文に巡り会い、論文を通して専門性の深さを体得し、いまだ明らかにされていない人間の行動科学について探求する力を養っている。専門科目においては、専門知識にとどまらず、学問を学ぶのに重要な態度や姿勢、ならびに技能の修得を目指すことが各教員によって重視され教示されている。2 年次以降においても、自由科目の履修が求められているほか、認知と発達を柱に幅広い心理学を学べるように科目が整備されている。様々な心理的・社会的なリソースを活用して、複雑な時代や社会のニーズに対応できるレジリエンスを身につけ、人間性の涵養をめざす教育課程が編成されている。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
2.2 教育課程の編成・実施方針に基づき、各課程に相応しい教育内容を提供しているか。	
①学生の能力育成のための教育課程・教育内容が適切に提供されていますか。	A ☒ B C
(～400 字程度まで) ※学生に提供されている教育課程・教育内容の概要を記入。 心理学科では、教育課程の編成・実施方針に基づき、社会に貢献する心理学的研究の内容を提供している。初年次教育の基礎ゼミでは一般的・基礎的な研究スキルおよびマナーの修得を徹底している。2 年次までには幅広い心理学の分野の知識および基礎的なスキルを専門基礎科目で学び、3 年次以降は、より深い専門的な知識やスキルを展開科目で学ぶことになる。論文の検索の仕方、読み方、データの分析の仕方、プレゼンテーションの仕方といったスキルに関しては、1、2、3、4 年次の全学年において演習形式で行い、卒業論文につなげている。学生は卒業論文で自ら問題設定をし、データを集め分析し、考察し、発表を行うことで、応用力、判断力、行動力を獲得する。この一連の作業は、積極的に問題発見をし、自ら解決するという社会人に期待される能力を育むために適切である。そして、心理学を生かした職業選択を支援することも視野に入れ、現場で働いている学外の特別講師を毎年招聘し、掲示板や心理学科独自のホームページの「最新ニュース」を通し学生に広く周知して受講を促している。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・法政心理ネット http://www.hosei-shinri.jp/psychology/	
②初年次教育、キャリア教育は適切に提供されていますか。	A ☒ B C
(～400 字程度まで) ※学生に提供されている初年次教育、キャリア教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。 心理学科 1 年生のほぼ全員が受講する基礎ゼミが、初年次科目として展開されている。高校での学びから大学での学びへスムーズに移行することに加え、大学で学ぶだけでなく社会に出てからも有用な学習スキルおよび態度の修得を目標としている。春学期の基礎ゼミの 1 コマでは、キャリアセンターから講師を派遣してもらってキャリアガイダンスも行っている。さらに、2、3、4 年生に対しては、文学部共通科目として「文学部生のキャリア形成」と「現代のコモンセンス」が設置されており、大学での学びが、将来のキャリアにどのように結びついていくかというマクロな視点をもてるように履修を促している。心理学を活かす職業選択の存在や方法についても、公務員採用試験の対策を行ったり、人事系の職務、発達支援を行う企業などの紹介をするために、特別講師として実際に心理学を活かす職場で活躍している卒業生を毎年招聘している。また、精神科病棟や学校、自治体での取り組み、施設などを見学に行く機会もできるだけ設けている。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
③学生の国際性を涵養するための教育内容は適切に提供されていますか。	A ☒ B C
(～400 字程度まで) ※学生に提供されている国際性を涵養するための教育に関し、どのような教育内容が提供されてい	

るか概要を記入。

国際化に対応した教育の一環として、心理学科を希望するアジアからの多くの留学生を積極的に受け入れている。また、2012 年度からの新カリキュラムでは、カリキュラムの中の専門英語科目である「心理学外書講読Ⅰ・Ⅱ」を「心理学英語Ⅰ・Ⅱ」に変更し、国際的な場で発表できるだけの語学力の伸長に努めている。機会があれば、国際性を涵養するため、外国人研究者を講師として招聘し、学生に聴講の機会を提供している。心理学研究の論文も、できるだけ学部生から英文の査読つき学術雑誌にふれるようにし、メールを用いて海外の研究者に質問をしたり、資料を求める等のコミュニケーション力をもつよう促している。海外の学会の紹介や、TED (Technology、Entertainment、Design)を通して著名な心理学研究者の講演を聴くなどの情報のリソースを授業で伝えている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 現状の課題・今後の対応等 (必須項目)

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。

・現状ではその必要性が認められないために、留学生を対象とした特別なカリキュラムを学科としては用意していないが、必要性が生じたときのために他学部・他学科の取り組みに関する情報を収集したい。

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照

3 教育方法

【2016 年 5 月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

3.1 能力育成の観点から教育方法および学習指導は適切か。

①学生の履修指導を適切に行っていますか。

A ☒ B C

【履修指導の体制および方法】※箇条書きで記入。

- ・全科目に関して、授業の到達目標やテーマ、授業の概要と方法、授業計画等をシラバスで公開し、授業外の教育活動(課外活動)についてはその詳細を心理学科独自のホームページで明示している。
- ・授業形態として、すべての学年ごとに、習熟度に合わせた演習や実習形式の授業を履修させ、講義科目によって得た知識や技能を学生自身が応用・活用して、心理学の研究方法についての理解を深めることができるよう工夫している。
- ・履修指導は、新入生に対してはオリエンテーション、それに続く専任教員による集団面接、学科の上級生で構成するピアサポーターによる履修講習会が実施されている。2年生には、ゼミ説明会も行っている。このピアサポートシステムは、ピアカウンセリングを活用しており、互いの人間的成長能力を信じ、「支援する存在」でもあり「支援される存在」でもあるという互恵性を高めることによって、学習環境をポジティブな風土にし、個々の学生の能力を伸ばすシステムである。ピアサポーターは、現在 30 名近くおり活発な活動を行ってくれている。
- ・転編入生に対しては、学科主任やゼミの担当教員が、面談等で取得単位や学習状況を確認した上で履修指導を行っている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

②学生の学習指導を適切に行っていますか。

A ☒ B C

(～400 字程度まで) ※取り組み概要を記入。

1 年生、2 年生では、いわゆる卒論ゼミとは異なるが、ほぼ全員が履修する演習形式の科目があることから、学生の雰囲気や特徴、個々の学生の状況等を学科会議等で報告しあい、情報を共有している。学習が進展しない者に対しては、日常の様子をもとに、わからない場合はサポートするので相談するように声をかけている。心理学科に管理責任のある教室

は、授業がない時間には、自習室として提供されており、多くの学生が勉強している。教員は状況に応じて、個別指導やグループ指導をし、学習活動を促すファシリテーターとして機能している。		
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし		
③学生の学習時間（予習・復習）を確保するための方策を行なっていますか。	A	☒ B C
（～400 字程度まで）※取り組み概要を記入。 シラバスに、時間外でどのようなことを予習または復習したらよいかを具体的に明記しているほか、授業支援システムなどを利用して受講者にメールを流し、予習や復習による学習の定着の意義を伝えている。シラバスに授業外の学習について明記されているかどうか、全専任教員が兼任講師担当科目を含む全科目を対象にチェックを行うことが、授業外学習の重要性を意識させる機会ともなっている。また、ミニテストや、リアクションペーパーなどを授業の終わりや初めに実施し予習、復習の成果を平常点に加味したりしている。先にも述べたが、自習室の開放や大学院生が主に自習や研究に利用している部屋の活用を促し、先輩に教えてもらったりする関係づくりもサポートしている。また、生活支援にかかわるが、アルバイトの入れ方や、時間の有効活用のスキルなど、生活態度や学習態度についてのアドバイスも全体に投げかけるようにしている。		
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし		
④教育上の目的を達成するため、新たな授業形態の導入に取り組んでいますか。	A	☒ B C
【具体的な科目名および授業形態・内容等】※箇条書きで記入（取組例：PBL、アクティブラーニング、オンデマンド授業等）。 ・非常に多くの科目で先進的な取り組みを行っている。下記根拠資料に実践報告をまとめてあるので参照されたい。下記根拠資料に挙げたもののほか、2016 年度からは「心理学測定法 I」で、新たにビデオ教材を用いた反転授業を取り入れている（情報メディア教育研究センターとの共同事業）。		
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・「2015 年度 心理学科 アクティブ・ラーニング、PBL 導入事例」報告書		
3.2 シラバスに基づいて授業が展開されているか。		
①シラバスが適切に作成されているかの検証を行っていますか。	☒ はい	いいえ
【検証体制および方法】※箇条書きで記入（取組例：執行部（〇〇委員会）による全シラバスチェック等）。 ・心理学科全教員による全シラバスチェック。 ・文学部教学改革委員会および教授会での、上記チェック結果の報告。		
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・「シラバスの第三者チェック」実施結果報告		
②授業がシラバスに沿って行われているかの検証を行っていますか。	☒ はい	いいえ
【検証体制および方法】※箇条書きで記入（取組例：後シラバスの作成、相互授業参観、アンケート等）。 ・「授業改善アンケートに対する気づき」を各教員が作成する過程で、シラバスどおりに授業を展開できたかを振り返ることにしている。 ・演習 II は 5 名の教員が共通シラバスによる授業運営を行っているため、相互授業参観を行っている。		
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし		
3.3 成績評価と単位認定は適切に行われているか。		
①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。	A	☒ B C
【確認体制および方法】※箇条書きで記入。 ・成績評価基準はシラバスに明記している。単位認定についても、単位とはいかに定義されるか、単位認定に値する学習活動とはどのようなものかといった基本的な認識から、毎年ガイダンスの際に学生に説明している。 ・客観的で公平な成績評価が可能なよう具体的にレポート 30%といった数値を可能な限り明示している。 ・D や E 評価を受けた授業に関しては、学部の制度として学生は成績調査申請を行うことができ、教員は問い合わせがあった件に答えている。その際、教員側に瑕疵があった場合、教授会の審議を経て、成績は訂正される。 ・卒業論文に関しても予め評価基準（タイトルの適切さ、方法論の妥当性など）を心理学科独自のホームページに公開しており、学生自身がどのように評価されるかが理解できるよう透明化している。		

・学科全体で発表会形式の口頭試問を行う場合にも、成績評価について専任教員全員で適切性を検討し決定しており、学科全体として公平で妥当性の高い成績評価を行っている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・法政大学人文科学研究科心理学専攻修士論文／文学部心理学科卒業論文評価表	
②他大学等における既修得単位の認定を適切な学部（学科）内基準を設けて実施していますか。	はい ☒ いいえ
（～400 字程度まで）※取り組み概要を記入。 編入生などの既修単位の認定は、申請のあった科目の内容について、本学科の開設授業との間の整合性の有無についてシラバス等をもとに学科会議で検討し、その結果を教授会で審議、承認を受けるという文学部の規定する正式な手続きにのっとって行われている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
③厳格な成績評価を行うための方策を行っていますか。	A ☒ B C
（～400 字程度まで）※取り組み概要を記入。 少人数クラスを担当する演習科目においては、担当する教員全員が評価方法の基準設定について協議し、公正かつ厳格な成績評価の実施に努力している。たとえば、演習 II では、学生の発表に対する評価基準表（ループリック）を作成し、共通の基準で評価できるように努めている。他の科目についても、成績評価の基準について、シラバスに成績評価の配分を記入しているほか、予習をせずに出席しても平常点にカウントしないなどについて合意を得ている。卒業論文の評価についても、絶対評価を基準にしながらも、教員によってその基準に齟齬がないよう、話し合いの場を常に設けている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
3.4 教育成果について定期的な検証を行い、その結果を教育課程や教育内容・方法の改善に結びつけているか。	
①教育成果の検証を学部（学科）ごとに定期的に行っていますか。	A ☒ B C
【検証体制および方法】 ※箇条書きで記入。 ・学科会議において、毎年の時間割編成時期に、授業担当者が主な授業での学生の履修状況を報告し合い、次年度の授業体制のありかたに反映させている。 ・上述の演習 I、演習 II では、同じ科目を担当している教員が集まり、学生の学習姿勢や取り上げる課題について情報および意見の交換を実施している。 ・問題を呈する学生がいた場合には、学科全体で情報を共有し、特定の授業のみで発生している問題であるのか、学生の学習活動の全体において教育成果が表れていないことによる問題であるのかを話し合うようにしている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。	A ☒ B C
【利用方法】 ※箇条書きで記入。 ・受講生が少人数である場合も含め、全科目について、学生による授業改善アンケートを実施している。 ・それに対する専任教員全員の気づきを学生にフィードバックし、さらに学科教員のメーリングリストや学科会等で情報を共有し、教育課程や教育内容・方法の改善に活かしている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	

（２）特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

（３）現状の課題・今後の対応等（必須項目）

※（１）～（２）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。

・兼任講師が担当している授業についても、シラバス通りに授業が展開されているか否かを確認する手段について、学科として議論する必要性がある。
--

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照

4 成果

【2016年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

【学位授与方針】	
心理学科では、学術的な意味と同時に社会への応用を見据えたテーマの設定をし、さらには倫理規程にも配慮しながら心理学の方法論を使用して研究するよう指導している。学生には、学科の基礎科目と専門科目をバランスよく取得した上で、ゼミの年次進行に従い、卒業論文を課している。その際に卒論発表会を実施して、その発表プレゼンテーション能力も評価しており、その評価基準は学生にゼミやホームページを通して提示している。このように上記の教育理念を達成するカリキュラムが組まれており、これを満たす単位履修および卒業論文研究の完成をもって、学士に必要な知識や技術、能力を獲得できたと判断している。	
4.1 教育目標に沿った成果が上がっているか。	
①学生の学習成果を測定していますか。	A ☒ B C
(～400字程度まで) ※取り組みの概要を記入(習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用状況等)。 シラバスに示した「成績評価基準」に基づいて評価している。成績評価基準の設定は、各教員が学習成果を結果としてだけでなく、次の学習に対する意欲に結びつけていけるような評価基準にできるよう熟考して設定している。それゆえ、GPCAの利用方法についても、数値の一人歩きに終わらないよう、学生の視点から、学びへのモチベーションを高めるよう配慮して用いている。さらに、必修科目である卒業論文への取り組みによって、心理学科が掲げている教育目標への到達度、すなわち学習成果を測ることができると考えている。なぜなら、心理学領域に特有の知識のみならず、問題の設定の仕方やアイデアの産出、データ収集の方法や適切な分析、研究を実施する上での協力者とのコミュニケーション、得られた成果を先行研究の知見と対比して批判的に考察する力、論理思考能力および表現力などのすべてが、卒業論文作成の過程に含まれているからである。学士力で謳われている知識・理解、汎用的技能、態度・志向性、統合的な学習経験と創造的思考力の獲得のすべてが、この卒業論文およびその取り組みから成果を測り評価できると考えている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
②成績分布、進級などの状況を学部(学科)単位で把握していますか。	☒ はい ☐ いいえ
【データの把握主体・把握方法・データの種類の等】 ※箇条書きで記入。 ・把握主体は全教員 ・把握方法は、成績分布については授業改善アンケート結果、進級状況は事務作成書類による。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
③学習成果を可視化していますか。	A ☒ B C
【学習成果可視化の取り組み】 ※取り組みを箇条書きで記入(取組例：専門演習における論文集や報告書の作成、統一テストの実施、学生ポートフォリオ等)。 ・学士力で求められるような資質の向上については、卒業論文の成果発表会がその役割を果たしている。この発表会は心理学科の全教員・全学部生に公開されている。論文自体は、主査および副査が精読しており、発表会では他の教員の発言も歓迎している。発表は学生一人ずつの口頭発表であり、4年間の演習形式の授業で修得してきたプレゼンテーション能力の到達度について評価できる。評価観点については、学生にあらかじめ公開されていることから質保証に役立つとともに、専門性をどの程度身につけてきたかを、全教員が把握できる。 ・個々の学生の研究計画は、倫理申請のときに教員全員で検討する機会があり、実験室などの利用状況からも、大半の学生の研究プロセスが確認できる。 ・卒業論文研究の成果は、全学生が各自A4で1ページにまとめ、それを要旨集として卒論発表会で配付しているほか、同窓会組織である法政心理学会年報にも収録している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・修士論文・卒業論文要旨集、法政大学心理学会年報	

4.2 学位授与（卒業・修了認定）は適切に行われているか。	
①学生の就職・進学状況を学部（学科）単位で把握していますか。	☒ はい ☐ いいえ
【データの把握主体・把握方法、データの種類の等】 ※箇条書きで記入。 ・把握主体は全教員 ・把握方法・種類は、卒業論文提出時の進路調査票による。進学、一般企業に就職、公務員に就職等について回答を求めている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 現状の課題・今後の対応等（必須項目）

※（１）～（２）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。

・4年次に至るまでの各学年における学習成果の可視化の在り方について検討する必要がある。

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照

5 学生の受け入れ

【2016年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

【学生の受け入れ方針】 心理学学習に意欲があり、社会的貢献に対して関心の高い人材を広く受け入れるよう入試体制を組んでいる。さらには科学的な心理学を志向する人材も積極的に受け入れる。						
5.1 適切な定員を設定し、学生を受け入れるとともに、在籍学生数を収容定員に基づき適正に管理しているか。						
①定員の超過・未充足に対し適切に対応していますか。						☒ はい ☐ いいえ
（～200 字程度まで）※入学定員・収容定員の充足状況をどのように捉えているかを記入。 過去5年間の入学定員充足率は1.03から1.20での範囲内であり適正である。したがって、定員の超過および未充足については特段の対応はしていない。						
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし						
定員充足率（2011～2015年度） （各年度5月1日現在）						
種別\年度	2011	2012	2013	2014	2015	5年平均
入学定員	60名	60名	66名	66名	66名	
入学者数	63名	72名	70名	68名	68名	
入学定員充足率	1.05	1.20	1.06	1.03	1.03	1.07
収容定員	240名	240名	246名	252名	258名	
在籍学生数	281名	292名	299名	292名	294名	
収容定員充足率	1.17	1.22	1.22	1.16	1.14	1.18
5.2 学生募集および入学者選抜は、学生の受け入れ方針に基づき、公正かつ適切に実施されているかについて、定期的に検証を行っているか。						
①学生募集および入学者選抜の結果について検証していますか。						A ☒ B ☐ C ☐
【検証体制および検証方法】 ※箇条書きで記入。						

- ・入試経路別の学生の成績を検証している。入学経路は、附属校推薦、指定校推薦、スポーツ推薦、一般入試と多岐に渡っているが、教学企画課が経路別に入学後の学生の成績追跡調査を実施しており、その資料が毎年学科に知らされている。経路別のアンケート結果などは、大学のデータベースでも学科から閲覧できるようになっており、学科の特徴を他学科、他学部とも比較して、客観的な情報をもとに検証することができる。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・特になし

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照

6 学生支援

【2016 年 5 月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

6.1 学生への修学支援は適切に行われているか。	
①卒業・卒業保留・留年者および休・退学者の状況を学部（学科）単位で把握していますか。	はい ☒ いいえ
【データの把握主体・把握方法・データの種類の等】※箇条書きで記入。 ・把握主体は全教員。 ・把握方法は、文学部教授会での審議資料。 ・卒業に関わる単位数の確認は客観的に行われ、文学部教授会において所定の手続きを経て卒業判定をおこなっている。 ・留級については年度末に、休学・退学についてはそのつど文学部事務から報告を受けている。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	
②成績が不振な学生に対し適切に対応していますか。	A ☒ B C
【成績不振学生への対応体制および対応内容】※箇条書きで記入。 ・予防として、新入生に対しては、オリエンテーションで少人数のグループに分け、専任教員にわりふって、教員も含めて学生相互がやりとりできる機会を設けている。さらにオリエンテーション直後にピアサポート主催の歓迎会を行った。入学式翌日に履修講習会を開催して、大学生活での対人関係や学習システムの違いによるドロップアウトを予防している。スポーツ推薦の学生については特別なガイダンスを開き、学業との両立をはかれるよう支援している。 ・2 年生以上は、欠席が目立つようになった時点で、各教員からの情報を学科会議で共有し、早い段階で対応し、問題によっては学生相談室に繋げていくなど、他機関との連携をしながら支援していけるように配慮している。 ・成績不振などのことから留級してしまった学生については、毎年、春学期開始まえに学部事務課よりリストをもらい、対象となる学生に往復はがきを送り、ガイダンスへの参加意思や近況を知らせるように連絡している。それでも連絡がつかない場合は、本人および保証人に連絡し、状況把握に努めている。 ・スポーツ推薦で入学してきた学生は履修の仕方に異なる点があることから、大学全体のスポーツ推薦担当の委員で心理学科に所属している教員が、さらに面談して丁寧に対応している。 ・以上の情報はすべて学科で共有し、いずれの教員もいつでも協力してもらえるよう、全員体制で取り組んでいる。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	

③学部（学科）として外国人留学生の修学支援について適切に対応していますか。	A	☒ B	C
（～400 字程度まで）※外国人留学生の修学支援に関する取り組みの概要を記入。 外国人留学生についても、他の学生と同様に、出席状況や成績上に問題があれば対処できる体制にある。今までのところ、留学生であるという理由で修学に困難が見られる事態は発生していないと思われるため、特段の対応はしてきていなかった。ただし、予防的な取り組みは行っていないため、定期的な面談を行うなどについては、今後の検討課題である。			
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし			

（２）特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

（３）現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※（１）～（２）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・特になし

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照

7 内部質保証

【2016 年 5 月時点の点検・評価】

（１）点検・評価項目における現状

7.1 内部質保証システム（質保証委員会）を適切に機能させているか。	
①質保証委員会は適切に活動していますか。	☒ はい ☐ いいえ
【2015 年度質保証委員会の構成、開催日、議題等】 ※箇条書きで記入。 ・「文学部全体」のシート参照。	

（２）特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

※文学部全体の大学評価を参照

【大学評価総評】

※文学部全体の大学評価総評を参照
